ミステリー・ボーイズ

GAYA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミステリー・ボーイズ

【Ｎコード】
Ｎ０２０４Ｈ

【作者名】
ＧＡＹＡ

【あらすじ】
神美村学園に突如転校してきた謎の美少年３人組。武闘派イケメンのクール系「大志」純情派イケメンの可愛い系「カズ」正統派イケメンのさわやか系「勝春」彼らが転校してきた真の目的は？数々の珍事件に挑みながら見えざる敵から学園を守るミステリー・ボーイズの活躍を描きます。

第一話　柔道部は危険な香り（前書き）

ミステリータッチの学園ラブコメです。

第一話　柔道部は危険な香り

プロローグ

都内某所。とある外資系ホテル最上階の一室。
間仕切りカーテンの向こうで「マスター」と呼ばれる老人が念を押す。
『分かっているとは思うが、くれぐれも秘密裏に行動するように』
仕切りの手前には少年が3人。そのうちの一人が茶髪をさらっとかき上げる。
「分かってますヨ。で、今度の学校はいったいどんな状況で？」
『ウム。何者かが学校運営を妨害しているようだ』
「そりゃアバウトですネ。何者かって……敵が誰だか分かってないんですか？」
『ウム。現時点ではクライアントも敵が何者なのか把握出来ておらんのだよ』
そこにメガネの少年が申し訳なさそうに口を挟む。
「つまりボク達の役目は、その見えざる敵を見つけ出して排除するって事ですね？」
『ウム。その通りだ。すでに君達3人の転入手続きは済んでいる』
そこで一番背の高い少年が面倒そうに口を開く。
「フン。たまには強い敵とガリガリやりあってみたいものだな。でないと腕がなまる」
それを聞いて茶髪の少年が呆れる。
「まったく、しょうがないナ！　大志は。これだから格闘技バカは……」
「失敬だな。お前のほうこそ、せいぜい女の衆にうつつをぬかさんことだな」
「オナゴのシュウって……言い方が古いヨ！」

「あのう2人ともここでケンカするのは、ちょっと頭悪くない？」
メガネ少年の一言に長身の少年が怒る。
「フン！　お前のＩＱが高いことは認めるが、そうやって俺達を見下すのは鼻持ちならん！」
『やめんか！　まったく君らは……。とにかくやり方は問わん。結果がすべてだ。さしあたって最初のミッションを与えておこう』
任務と聞いて3人の表情が引き締まる。
『最近、この学校の柔道部の連中が怪しいアルバイトをしているという情報が入った。事実関係を究明してしかるべき処置をしてくれたまえ』
「了解！」と、3人が声を揃える。
『この事件が見えざる敵に関係するかどうかは定かではないが……頼んだぞ。ミステリー・ボーイズ！』

1．謎の転校生

「このクラスに転校生が入るらしい！」
誰かが仕込んできた情報に始業式前の教室がざわめく。
夏休みの名残で眠気が抜けない菊乃は、その話を聞いて隣席の美穂子に声を掛けた。
「転校生って……ガセじゃないの？」
「そだね。うちは私立だけど試験ないと入れないはずだし……」と、美穂子が答える。
「どうせロクなもんじゃないでしょ。他の学校クビになったとかさ……」
しかしそんな菊乃の予想は外れていた。なぜなら担任が連れてきた3人の男子を見て、女子達が一斉に感嘆の声をあげたからだ。
女子が騒ぐのも無理はない。なぜなら3人ともかなりの美形なのだ。このクラス、いやこの学校で一番と言われている男の子でも遠く及ばない。まるでテレビに出ている男の子達に街中で出くわした

ようなインパクトがあった。しかもそんな高レベルのイケメンが一度に3人も転校してきたのだ。
「え？　いっぺんに3人も？」と、さすがの菊乃も口をあんぐり……。
ホームルームの始めに担任が3人を紹介する。
「ええ～では皆さんに紹介します。二学期から我が加美村学園に転入することになった……」
まずは茶髪のさらさらヘアが良く似合う爽やか系の少年が挨拶をする。
「田川勝春（タガワカツハル）です！　勝春って呼んでください。よろしくネ！」
一言でいえば綺麗な顔立ち。まるで歌番組の真ん中で踊っていそうな正統派イケメンだ。だけど笑った顔は見る者をほっとさせる。
「あの……岩田和成（イワタカズナリ）と申します。皆さん、はじめまして」
そう言ってぴょこんとお辞儀をしたメガネの少年は可愛い系の美少年。目がクリッとして、まるで初恋の幼馴染がそのまま大きくなったような感じ。はにかんだ表情がとてもいい。
「後藤大志（ゴトウタイシ）……以上！」
3人目の少年は背が高くて180cm以上はありそうだ。短く刈った黒髪がツンツン立っている。すっきりとして形のいい目鼻立ちがクールな感じ。ちょっと取っ付きにくそうだがこちらも和風イケメンといえる。
突如現れた美少年3人組に女子達はすっかり圧倒されてしまった。そして彼女達の目は教壇に釘付けだ。
美穂子が興奮を抑えきれない様子で菊乃の袖を引っ張る。
「ねねね、マジ凄くない？　菊乃は誰がいい？」
「だ、誰って別に……」
「私はやっぱ田川勝春君！　あの中でもダントツ！　足長いし、肩幅広いし、顔ちっちゃいし、超～格好いいよね～」
「そっかなあ。アタシは……あの背の高い方がまだ好みかな」
「ええ～？　マジで？　絶対、勝春君だって！」

あまりに美穂子が茶髪君を絶賛するので敢えて違うのを好みだと言ってみたものの、正直、菊乃には別世界のことのように思えた。周りの女子が異様に興奮しているのを見ていると逆に冷静になってしまう。それになぜ転校生が一度に3人も入ってきたのかという疑問の方が大きかった。

（なんか変なの……）

どうしてなのかその理由はわからないけれど妙な胸騒ぎがする。大騒ぎする女子達を眺めながら菊乃はそんなことを考えていた。

＊　＊　＊

学校の授業は2日目から容赦なく始まった。

（やだ。もう限界……）

夏休みに慣らされた身体には正直、厳しい。できればリハビリ期間が欲しいところだ。菊乃は、眠気との壮絶な戦いを経てようやく待望の昼休みを迎えることができた。

（予想はしてたけど、まさかここまで辛いとは……）

菊乃がヘロヘロになっていると、お弁当を持った美穂子が尋ねてきた。

「ね、菊ちゃん。お弁当はどこで……」

「ごめん。今日はちょっと」

「？」

「どうしても観たい番組があるの！」

「またぁ？　だったら録画すればいいのに」

「アタシ、操作できないんだわ。予約録画とか。だから兄貴の「ワンセグ」ガメてきちゃった」

「そんなのどこで見るの？」

「へへ。それがね～。いいトコ見つけたの」

そう言う菊乃が見つけた良い所というのは無人の理科室だった。

理科室の奥にはもうひとつ小部屋があってフラスコやらビーカーやら実験に使う道具をしまうための棚が幾つも並んでいた。
「ね。ここ超～穴場なんだよ」と、得意げに菊乃が自慢する。
ここは滅多に人が来ないので絶好の穴場になるのだ。
「そだね。けど……お弁当食べるには、ちょっと薬臭いかも」
「大丈夫！　さ、テレビ観ながらお・べ・ん・と！」
菊乃は鼻歌まじりに昼食の準備を整えた。ワンセグのチャンネルを合わせてからお弁当を広げる。ちょうど弁当箱の半分ぐらいを空にしたところで、お目当ての俳優が登場。菊乃は箸を止めて画面に集中した。
（やっぱ格好いいな。ちっちゃい画面で見ても良いっ！）
しばらくして「ガラガラッ」と、扉を開く音がした。その音は隣の部屋からだった。続いて誰かが入ってくる気配……。菊乃たちのいる小部屋と理科室は壁で仕切られていないので良く分かるのだ。
「き、き、菊ちゃん。誰か来ちゃったよ～」と、美穂子が焦る。
「静かにしてりゃ平気でしょ」
「でも……先生だったらヤバくない？」
「ごめん。じゃ、美穂子見てきて」
「ええ～？　私がぁ？」
ワンセグの画面から目を離せない菊乃に頼まれて美穂子がしぶしぶ偵察に出る。
美穂子は四つんばいの姿勢でそろりそろりと前進して、隣の部屋をのぞき込んだ。
「？！」
隣の部屋を見てパニックになった美穂子が、元気すぎる赤ちゃんみたいな「高速はいはい」で戻ってきた。
「あ、あ、あれって、てんてん転校生だよ……」
「はい？」
丁度お目当ての出番が終わったところだったので仕方なく菊乃も隣の様子を伺ってみることにした。すると、「ガラガラ～」と、再

び扉が開く音がして、それと同時に「遅せぇぞ！」という低い声が聞こえた。また誰か隣に入ってきたらしい。
　相手に気付かれないように菊乃と美穂子は四つんばいのまま隣室に近づいて、目いっぱい首を伸ばす。
「悪いネ。女の子たちをまくのに時間くっちゃったんダ」
そう言いながら入り口の所に立っているのは……美穂子たちが密かに「カッチー」と呼んでいる茶髪の転校生「田川勝春」だった。
「フン。何が女の子たちだ。喜んでいる場合か！」
と、腕組みしながら文句を言ったのは……ノッポの転校生「後藤大志」のようだ。
「さて、と。しばらくはこんな感じで集まる場所を転々としなくちゃね」
　ちょっと甲高いその声は可愛い系の転校生「岩田和成」に違いない。
　菊乃は首をひねった。
（転校生3人組が勢ぞろい？　こんな所で？）
　床にはいつくばった姿勢のままで菊乃は、美穂子の顔を見て首をかしげてみせた。それを受けて美穂子も訳が分からないといった顔で首を振る。
　田川勝春が机に腰掛けながら言う。
「柔道部の連中、今ンとこ動きはないネ。昨日適当に尾行してみたけど手がかりは無かったヨ」
それに続いてメガネの岩田和成が報告する。
「ボクも柔道部に関係ありそうな生徒にヒアリングしてみたけど成果は無かったよ。例の噂も出てこなかったし」
「フン。だったら潜入するしかないようだな。柔道部に」
そう言ってノッポの後藤大志が頭を掻く。そんな彼の肩を茶髪の勝春がぽんと叩く。
「そっか。じゃ、とりあえず大志が柔道部に潜入だネ。勿論、部員として」

「え？　俺かよ？」
メガネの和成も期待を込めた目でノッポの顔を見上げる。
「ボクも大志が適任だと思う」
2人の視線が後藤大志に集中する。
「俺が入部するのか？　勘弁してくれ。苦手なんだ。畳と汗の混じったあの独特の匂いは……」
「けどサ。女臭いよりはいいんじゃない？　大志の場合」
勝春にそう突っ込まれて大志が「まあな」と、苦笑いを浮かべる。
3人の会話を盗み聞きして菊乃は混乱してしまった。
（柔道部って……何それ？　何の話してんの？）
そんな疑問と共に、ふいに鼻の奥に違和感が芽生えた。菊乃の脳裏にさっきのお弁当が浮かぶ。
（まさか……さっきの「ひじき」が鼻に？）
何ともいえないこのむず痒さ。ヤバイと思って菊乃はとっさに口を抑える。しかし、それが完全に裏目だった。
「ブシュン！」
もの凄い勢いで空気が鼻から逃げ出した。
その音に後藤大志が反応した。
「な、なんだ！　誰かいるのか？」
勝春が首をすくめる。
「アララ。誰かに聞かれちゃったみたいだネ」
メガネを指で突きながら和成が非難する。
「うん。大志のミスだね。こういう時は事前に誰も居ないか調べとくのが鉄則なんだけど」
「俺のせいかよっ！　畜生……どこのどいつだ。出てきやがれっ！」
（やだ……見つかっちゃった。でも、しょうがないか……）
こんな姿勢では逃げることも出来ない。意を決して菊乃はすっくと立ち上がった。そして3人の鋭い視線に負けないようにわざと胸を張った。ここは一発、逆切れだ！
「何よ！　そっちが後から来て勝手にしゃべってたんでしょーが！」

菊乃の剣幕にきょとんとする3人組。
突如「ぷっ」と、勝春が吹き出した。それを合図に残る2人も大爆笑。
「なによ……何がおかしいのよ」
戸惑う菊乃のスカートを美穂子が下から引っ張る。
「菊ちゃん、鼻！　鼻に……」
「？」
美穂子に手鏡を渡されて菊乃は自分の顔を映して見た。
（？！）
右の……鼻の穴から……黒い物がちょろん、と出てる……。
後藤大志がバカみたいな大声で「は、は、鼻毛が！」と、笑っている。それも菊乃を指差しながら。
菊乃は真っ赤になって上着の袖で鼻の下をゴシゴシこすった。
（最悪っ！）
泣きたくなるのを必死で堪えて菊乃は3人を睨みつけた。
「笑うなっ！　バカッ！」
その迫力に押されて流石に3人は笑うのを止めた。
嫌な空気が漂う。そこへゆっくりと立ち上がった美穂子が何を思ったのか妙なことを言い出した。
「後藤君。柔道部入るんですね。がんばってくださいっ！」
美穂子の一言に菊乃がげんなりする。
（美穂子……空気読めよ……）
頑張ってと言われた本人もぽかんとしている。
しらっとした空気の中、勝春が沈黙を破る。
「アレ？　君たち……確か同じクラスだよネ？」
勝春は菊乃たちが自分と同じクラスだということに気付いたらしい。
菊乃と美穂子がうなずくと勝春はニコッと笑顔で続ける。
「やっぱそうか。どうりで見覚えあると思ったヨ。まあ、オレって女子にしか興味ないからサ。それも可愛い子だけ……」
菊乃は内心（チャらい男だな〜）と思ったが、美穂子は明らかに嬉

しそうだ。
このまま話をそらされそうな気がしたので菊乃はさっきの疑問をぶつけてみることにした。
「ところで柔道部って何？」
菊乃の迫力に一瞬、３人の表情が強張った。そして顔を見合わせ、勝春が目配せをして、メガネの和成が頷く。
「実はボク達、ある人から調査を頼まれてるんだ。柔道部の部員がいかがわしいバイトをしてるんじゃないか、つまり高校生らしくない変な仕事をしてるんじゃないかってね」
ノッポの大志がそれをフォローする。
「これは俺たちの仕事だ。だから邪魔をするな！」
その言い方に菊乃はカチンときた。先ほど指を差された恨みもある。
「へぇ～そうなの。じゃ、アタシもまぜてもらおっかな～」
「な、なんだと？」と、大志が目を剥く。
「だって面白そうじゃん。なんか探偵みたいで」
菊乃の思わぬ反撃に勝春は、やれやれといった風に首を振った。和成はため息をついた。大志は呆れた表情で菊乃の顔をしげしげと眺めた。
しばらく間を置いて勝春が仕方ないなっといった感じで口を開く。
「しょうがないネ。じゃあ事件解決まで手伝ってもらうとするかナ」
それに和成も同意する。
「うん。ボクも同じこと考えてた。いいよね？　大志も」
「……本気かよ」と、大志だけは納得がいかない様子だ。
なんでこんな流れになってしまったのかは菊乃にもよく分からなかった。が、とりあえず菊乃と美穂子も３人と一緒に柔道部の秘密を調査することになった。
一応、仲間になったということで自己紹介などやってみる。
「オレは「カッチー」でいいヨ。なんか既にそういう風に呼ばれてるンだろ？」
「ボクは……和成でいいよ。２人からは「カズ」って呼ばれてるけ

ど」
菊乃がふんふんと頷く。
「じゃあ、アタシ達は「カズ君」って呼ぶね」
カズは菊乃の提案を快諾する。
「いいよ。カズ君で。で、大志は？」
「じゃ「ゴッキー」でいいんじゃない？」
菊乃の発想は単純だ。後藤だからゴッキー。
「ふざけるな！　ゴッキーだと？　「ゴキブリ」みたいだからやめろ。気分が悪い」
「ええ～いいじゃん。別に」
「ふん。勝手にしろ。で、そういうお前らは？　何て呼べばいいんだ」
それまで黙っていた美穂子が急に口を開いた。
「私は美穂子でいいです。菊ちゃんは「菊ちゃん」のままでいいんじゃない」
それを聞いて大志が吹き出す。
「ククッ、うちのばあちゃんと同じ……」
むっとして菊乃が大志を睨み付けるが、大志は知らん顔だ。
（なにコイツ？）
クールな男の子だと思っていただけに菊乃はゲンメツした。
その時、昼休み終了の鐘が鳴ったので最後にカッチーが締める。
「ま、そういうことで仲良くやろうヨ。それじゃ解散！」
大志に名前を笑われたのは気に食わなかったが、カッチーとカズ君とは仲良くなれそうだな、と菊乃は思った。

2．潜入！　柔道部

「柔道部の連中が怪しいバイトをしている！」
なんで転校生3人組がそんなどうでもいい噂のことを調べているのか理由は分からない。が、菊乃が彼らの調査に加わることで3人組

のことを少しずつ理解できるかもしれない。正直、そういう期待があった。菊乃にとって興味の対象は、柔道部の噂ではなく3人組の謎なのだ。
そういうわけで菊乃は、カズに誘われるまま6時間目を抜け出して柔道部の部室に侵入することにもあっさり同意してしまった。

＊　＊　＊

体育館の隣が武道場。それに隣接したプレハブが柔道部と剣道部の部室になっていた。
カズがいつの間にか鍵を調達してきたので部室への侵入は意外と楽だった。
（カズ君、どこから鍵もってきたんだろ？）
そんな疑問を解消するヒマもなく、カズはさっさと室内に入ってしまう。仕方なく菊乃も後に続く。
なんだか「スパイ」みたいでドキドキする。誰かに見られてないか周りを確認！　そして、一気に扉の向こうに潜り込む。
「臭っ！」
それが部屋に入った時の第一印象だった。一言でいえば「お父さんの靴下」いや「お母さんが捨て忘れた冷蔵庫の生もの」みたいな刺激臭……。
（男子のロッカー室って臭っ……みんなそうなの？　それともここが別格？）
菊乃は鼻から空気を吸い込みすぎないように呼吸を口と分担しながら、とぼとぼと部室内を歩いた。
室内は教室の半分ほどのスペースにロッカーが4列。正面の壁に「初段」とか「二段」とか書いたボードがあって、その横に名前の書かれた木の札が幾つかぶら下がっている。特に変わったこともない。具体的に何をすれば良いのか分からず、菊乃は辺りを適当に物色した。一方、カズはロッカーをひとつひとつ点検している。

「ね、カズ君。なんか手掛かりあった？」
「……無いみたいだね。ロッカーにはだいたい鍵がかかってるし、開いてるやつも中は柔道着ぐらいしかないよ」
素人探偵が部室をうろついたぐらいでは大した発見はできないようだ。探索に飽きてしまった菊乃はもう後悔し始めていた。
（なんか思ったよかツマンナイ……）
その時、カズが「あれっ！」と、声をあげた。何かを発見したらしい。
「え？　なんか見つかったの？」
「うん。これ……何かの当番表みたいなんだけど」
カズが発見したのはホワイトボードに貼り付けられたＡ４版の表だった。縦軸に日付と曜日。その横に名前が連なっている。例えば今日の日付の横には「西野、肥後、小林」と書かれている。
当番表を眺めながらカズが呟く。
「１日に３人。そうじ当番かな？　あれ。でも……なんで金曜と土曜は５人なんだろ？」
そう言われてみれば確かに妙だ。菊乃も首をかしげる。
「さあ？　なんでだろ。週末は大掃除するんじゃない？」
「分からないな。でも何か意味はあるんだろうね……」
これ以上の手掛かりはないとみて部室の探索はそこまでにした。カズの提案で続きは放課後に部活を見学するということになった。

その日の放課後。一応、入部希望という口実で菊乃とカズは柔道部の練習を見学させてもらうことにした。「見学させて下さい」と、菊乃が申し出るとモアイ像みたいな四角い顔の部長が気持ちの悪い声を出した。
「か、歓迎するッス。そっか。待望の女マネージャーかぁ。くぅ～」
モアイ像のような部長の緩んだ顔を見て菊乃は（キモイよっ！）と、０．２秒で心の突っ込みを完了した。
「あ～そうだ」と、モアイの部長は申し訳なさそうに言う。

「最初は河川敷までランニングするから30分だけ待って欲しいんッス！」
「あ～そうですか」と、表情を変えない菊乃に向かってモアイ部長はニカッと微笑んだ。
その顔つきに再び（キモイッ！）という心の声。ほとんど条件反射だ。

柔道部の連中が並んでランニングに出かける様をぼんやり見送りながら菊乃が呟いた。
「柔道着にスニーカーって変。それにあの部長ウザすぎ！」
それを聞いてカズが苦笑する。
「いいんじゃない。ああいう人がいても。青春まっさかりって感じで」
「アタシはヤダ。それにしても30分も待つの？　なんだ、こんなことならわざわざ6時間目抜けることなかったね。部室なら今調べれば良かったのに」
「そうだね」
武道場の左半分は畳、右半分が板張りで剣道部のなわばりになっているようだ。
誰も居ない武道場にカズと2人きり。待っている間、菊乃は暇つぶしにカズの横顔を眺めていた。
（カズ君て肌きれい……髪もサラサラだし）
そこで思いついたことを菊乃がぽつりともらした。
「カズ君てさ。アタシよか背ちっちゃいね」
一瞬、「え！」という顔をしてカズが菊乃の顔を見た。
「……驚いたな。面と向かって言われたのは初めてだよ」
「あ、ごめん。気にしてたんだ。で、でもそこが可愛いトコなんじゃない？」
「か、可愛いって……あんまり嬉しくないような……」
そう言って照れる顔がまた少年っぽい。たぶんそういう雰囲気が女

の子を萌えさせるのだろう。とくに中性的な男の子が好きな子にとってはツボに入るんじゃないかと思った。
話題を変えようとして菊乃は素朴な疑問をぶつけてみた。
「あのさ。何で3人一緒に転校してきたの？」
「ああ、それね。……実はボク達3人には共通の保護者がいてね。その人の都合なんだ。それで3人揃ってこの学校に入ることになったんだ」
「……共通の保護者？」
「うん。まあ色々な事情があるんだよ。それぞれ……」
菊乃は悪いことをしてしまったような気がした。本当は住んでいる所とか家族のこととか聞きたいことは他にもたくさんあったのだ。まさか3人とも複雑な家庭の事情を抱えてるなんて思わなかった。
「……ごめんね。アタシ、まずいことを聞いちゃったよね」
「大丈夫。慣れてるから。そんな事でヘコんだりしないよ」
カズはそう答えながら笑顔を見せる。しかし、菊乃にはその笑顔が寂しさをごまかすために無理に作られたもののように見えた。強烈な母性本能、まるで捨てられた子犬と目があってしまった時のように菊乃の胸がきゅうと締め付けられる。

そのうちに剣道部の部員が続々と武道場に入ってきた。そして準備運動、素振り、と練習メニューを消化していく。菊乃とカズはそんな様子を眺めながら柔道部の帰りを待った。
カズが時計を見る。
「そろそろ帰ってきてもいい頃だね」
その言葉通り、すぐに柔道部の連中がランニングを終えて帰ってきた。
汗だくのモアイ部長が菊乃の所に駆け寄ってきて息を弾ませる。
「はぁ……はぁ……お待たせしたッス！」
菊乃のテンションが一気に下がる。
（何だか、匂ってきそう……）

モアイ部長は菊乃の方だけを見ながら言った。
「はぁ……はぁ……じっくり見学して欲しいッス。で、返事はいつでもいいッスから」
モアイ部長はカズにはまったく興味が無いらしい。菊乃がマネージャーになることだけしか考えていないようだ。
やがてモアイ部長の掛け声で練習が始まる。
「おーし！　今日は気合い入れっぞ！」
「うぃーッス！」
2人一組になって互いに投げたり投げられたりをひたすら繰り返す。柔道に興味が無い人には、ぎったんばったんしてるようにしか見えない。
何かに気付いたようにカズが一言、呟いた。
「あれ……変だなあ」
「どうしたの？」
「いや。足りないんだ。という事は……もしかして」
そのままカズは考え込んでしまった。彼が何に気付いたのか気になって菊乃が何度も声をかけるが、その後もカズはそれ以上何も教えてくれなかった。
（カズ君のケチ！）
今回の見学は菊乃にとっては変な部長に目を付けられただけの大失敗に終わった。が、カズにとっては何らかの成果があったようだ……。

＊　＊　＊

3．作戦会議

加美村学園から歩いて3分のマンション7階。角部屋の3ＬＤＫ。ここが3人のかりそめの根城になっていた。広いリビングにはテレビ、人数分のソファ、テーブルが一台しかない。「シンプル・イズ・ベスト」とはいうものの舞台のセットみたいなリビングはまるで生

活感が無かった。
夕食の後、互いに今日一日の調査結果を報告しあう。
まずは勝春が、優雅に足を組み直しながら首を振る。
「こっちは全然ダメだネ。校内で何十人も声かけてみたけど全く手がかり無し。ていうか誰も柔道部に興味もってないんじゃないかナ」
「同じく」と、大志がパソコンの画面を閉じながら呟いた。彼は「ふぅ」と、大きく息を吐き出すと頭をかきながら言った。
「俺は噂の方から調べてみたが柔道部の話題なんてひとつも無かったぞ」
「でもサ。マスターがオレたちに任務を与えたってことは、どこかでは噂になってるはずだよネ？」
勝春の言葉にカズが大きく頷く。
「そうだね。少なくともその噂はクライアントの耳には入っている。だとしたら生徒よりも先生とか父母とかＯＢとかのコミュニティを洗った方がいいかも」
「チッ、分かったよ。じゃあその線でいってみりゃいいんだろ」
そう言いながら大志は身体がなまって仕方が無いといった風にゴキッゴキッと首を回した。
次にカズの報告。
「ボクが調べたところによると、柔道部の練習は朝練が7時から8時。で、午後が放課後から夜の8時まで。日曜以外は毎日びっちり練習してるらしい。夏休みもお盆を除いては夕方の4時から8時で毎日やってたみたいなんだ。だから普通に考えたらとてもバイトする暇なんて無いと思うんだけど……」
それを聞いて勝春が眉をひそめる。
「うえ～そういう青春もあるんだナ～」
「いや。俺はリスペクトするぜ。同じ格闘家として」
と、大志は本気でそう言っている。カズが苦笑しながら報告を続ける。
「……まあそれはおいといて。で、今日も適当な部員を一人選んで

尾行してみたんだけど真っ直ぐ家に帰っちゃったんだよね」
「こっちも同じだヨ！　オレ、でっかい2人組を尾行してみたんだけどサ。途中で牛丼三杯ずつ食って帰っただけだったヨ」
「俺が尾行した奴はコンビニで「いやらしい本」を立ち読みして帰っただけだ」
カズは口元に拳をあてて唸った。
「うーん……昨日尾行した連中もそうなんだよね。とてもバイトに出かけるような時間的余裕はない。だとすると……」
考え込むカズの様子を見て勝春がふっと笑った。それにつられて大志も笑顔でカズを見守る。2人ともカズの推理力を心から信頼しているのだ。
しばらくしてカズが顔を上げた。
「一応、仮説はたてた。ボクの推理が正しければ……あさってには解決できると思う」
やったね、といった風に勝春と大志が互いの顔を見て微笑む。
「それで勝春と大志にお願いしたいことがあるんだけど……」
自信に満ちたカズの顔つきを見て2人は確信した。後はカズに言われた通りの事をやっておけば、この事件は間違いなく片付く……。

＊　＊　＊

朝の6時半。菊乃にとって、こんな時間に学校へ来るなんて生まれて初めての事だった。
前の日の夜遅くカズから菊乃の携帯に電話があった。「確かめたい事があるから7時前に学校に来てくれ」というのだ。
眠い目をこすりながら菊乃は駅から学校に向かった。
（やっぱ朝の1時間は大きいよ～）
駅から学校に向かう人はほとんど居ない。逆に駅に向かう人は少なくない。
（カズ君、こんな時間に呼び出して何がしたいんだろ？）

そんな疑問を持ちつつ菊乃は誰も居ない校門の前までやって来た。
校門の所では既にカズが待っていた。
「おはよう。藤野さん。悪かったね、こんなに早く」
「まあ……ね。あれ。カズ君はいつ来たの？」
「ああ。ボクは歩いて来たから」
「歩いて？　え、どこ住んでんの？」
「すぐそこだから。ほら。あそこに見える茶色いマンション」
カズが指差した方向を見て菊乃が驚く。
「ウソ？　超近いじゃん。なんかズルくない？　アタシなんて5時起きだよ。朝ゴハンだって食べてないし」
「だと思ってコンビニで買っておいたよ。パンとおにぎり、どっちがいい？」
そう言ってカズはコンビニの袋を差し出してにっこり笑った。

校内に入って校舎の外階段に座り、2人並んで朝食をとった。この位置からなら校門を見渡せる。
「ね、カズ君。何か分かったの？」
「まあ、ね」
「ふうん。じゃあ教えてよ」
「いや。まだ仮説の段階だから」
「あ～そう。やっぱ教えてくんないんだ。けど、ま、いっか」
7時近くになって「朝練」組がパラパラと登校してきた。運動系の人は膨らんだスポーツバッグを持っているのですぐ分かる。そんな中で、鞄だけの大男が混じっている。
「ね、あれって柔道部じゃない？」
「だね。荷物を持ってないところを見ると柔道着は部室に置いたままなんじゃないかな」
「ええ～！　昨日あんなに汗かいてたのに？　汚いな～」
「あんまり洗わないんじゃないかな。乾きにくそうな生地だから」
「なんか臭そう……」

色んな部の人達が次々と登校して来る。そんな様子をぼんやり眺めていると急にカズが身を乗り出した。
「やっぱり！」
何の事だろうと思って菊乃が目を凝らす。
「やっぱりって、何が？」
別に興奮するほど変わったものは見当たらない。強いて言えば制服姿に混じって白い服、よく見ると柔道着を来たまま、のっしのっしと歩いてくる手ぶらの大男が目に入る程度。
「カズ君？」
「……思った通りだ。後は証拠か……」
カズは何か確信しているみたいだが、菊乃はまったくチンプンカンプンだった。昨日の見学といい、今朝の観察といい、何だか仲間はずれにされているようでちょっと悲しい。
（なんか全然、面白くないんですけど……）
謎解きに協力するといいながらも菊乃も美穂子もまったく役に立てていないような気がしてならなかった。
結局、この日は一日、何事も無く終わってしまった。菊乃と美穂子が柔道部の調査に誘われることも無かった。しかし、菊乃の知らないところでミステリー・ボーイズは水面下で準備を着々と進めていたのである。

＊　＊　＊

翌日の昼休み。菊乃の怒りが爆発した。
「あんたらホントにやる気あるの？」
「……あるヨ」
勝春が紙パックの「いちごオレ」を飲みながらすまして答えた。ストローをくわえていても顔がカッコイイから許せるものの普通の男だったら張り倒しているところだ。
「だって全然、調査とかしてないじゃん！」

冷静に最後の一粒まできれいに食していた大志が呟く。
「……たわけ」
「は？　ゴッキーなんか言った？」
「食事中に喚くな。やるべき事はちゃんとやっている。お前の目はフシ穴か」
大志の言葉に菊乃が目を吊り上げる。
「何それ？　どういう意味？」
今にも大志に掴みかからんばかりの菊乃をカズがなだめる。
「まあまあ堪えて藤村さん。大志も大志だよ。ちょっとは言い方、考えなよ」
「へいへい」
「その態度がむかつくんですけど！」
美穂子が慌てて間に割って入る。
「もう止めなよ、菊ちゃんも」
菊乃の興奮が収まるのを待ってカズが宣言する。
「とりあえず今日の放課後には決着つけるから」
「え？　ホント」と、菊乃の目が輝く。
「うん。おかげで目処はついたよ。放課後、柔道部に乗り込む」
「やだ。私こわい……」と、半泣きになる美穂子に勝春がやさしく声を掛ける。
「いいヨ。美穂子ちゃんは無理しなくて。オレ達だけで何とかするから」
カズは今日の放課後に事件は解決すると言い切った。否が応でも菊乃の期待が高まる……。

　食事を終えて3人組と菊乃、美穂子は教室に戻ることにした。
食堂を出て校舎に向かう。校庭を横切る際に、突如、ぼんやり歩いていた大志の体勢がカックンと左に傾いた。はっとして皆が見守る中、大志の身体が地面にストーンと引き寄せられた。まるで大木が最後の一押しで切り倒されるように大志が派手に転んだ。

後ろからその様子を見ていた菊乃が噴出す。
「ぷっ。バッカじゃないの」
大志は地面に這いつくばったまま起きようともしない。ダメージが大きかったのか、精神的なショックを受けたからかは分からない。が、ゆっくりと立ち上がりながら、「だ、だ、誰だ…こんな所に穴を掘りやがったのは…」と、呟いたところをみると、必死で怒りを堪えているようにも見える。
確かに大志の左足は膝から下が溝にはまっていた。見るからに深そうな溝。誰かが校庭の一部を掘って溝を作っているらしい。
（こんな所、工事でもするのかな？）
などと菊乃が考えていると背後で誰かが叫んだ。
「キミ達！　困るよ。勝手に入ってもらっちゃあ！」
皆が一斉に振り返ると、見るからにネクラそうな小太りの男子がシャベルを手にこちらを睨んでいた。大志がゆっくりと左足を溝から抜きながら顔を引きつらせる。
「ん？　お前か？　こんな所にしょーもない穴、堀りやがったのは」
小太りの男子は黒縁メガネの奥の小さな目を見開いてどなった。
「失敬な！　ここは郷土史研究会の発掘現場なんだぞ！」
聞いたことも無い名前に菊乃と美穂子が困惑する。美穂子がぽつりと呟く。
「ふんどし研究会？」
美穂子の天然ぼけに小太り少年が激怒する。
「ふんどしじゃないっ！　キョウドシだ。郷土史！」
菊乃が眉をひそめる。
（キョウドシ研究会？　発掘現場？）
「ぼ、僕は2年5組の目黒健介。郷土史研究会の会長だ。で、顧問の有賀先生の許可を貰ってここを発掘してるんだ」
目黒とかという小太り少年の話を黙って聞いていた大志が低い声で威圧する。
「誰もてめーの名前なんて聞いてねえよ」

その迫力に押されて目黒が少したじろぐ。が、ぐっと胸を張って逆切れした。
「は、発掘現場は神聖な場所なんだ。な、なめないで頂きたいっ！」
そう言い切った顔の憎らしいこと！　色黒で下膨れのタヌキみたいな男の子が鼻の穴を広げている……。
「ほお」と、言いかけた大志をカズが「暴力はダメだって！」と、必死で制止する。
大志がぴたりと動きを止めて冷たい目つきで目黒を見下ろす。そして何事か考えた後にクルリと方向を変えて、スタスタと足早に歩いていってしまった。
残された目黒はビビリながらも何とか立っているという状態。握り締めたシャベルが震えている。彼はしばらく呆けていたが、菊乃たちの視線に気付くと「エヘン」と、咳払いをして穴を掘り始めた。
目黒と大志のやりとりを見守っていた４人はこの妙な展開にまったくついていけず、茫然とその場に立ち尽くしていた。
はっと我に返った勝春が大志の姿を探す。そして「あっ」と、声を上げた。菊乃が勝春の見ている方向を目で追うと、百メートルぐらい先で次の授業の準備をする生徒達に混じって大志が何やら喚いているのが見えた。
（ゴッキー、何やってんだろ？　野球？）
バットを持った大志がバッターボックスに立って、体操着をきた人達にあれこれ指示を出しているようだ。ここからでは何を言ってるのかはっきり聞き取れないが、どうも自分が打つからみんな守備につけ、と命令しているっぽい。
「藤村さん。危ないよ。下がった方がいい」
カズにそう言われて菊乃は訳もわからずその場から数歩下がった。
（危ないって何が？　……まさか、ここまで球が飛んでくるの？）
菊乃は半信半疑でバットを振り回す大志の姿を眺めた。
（ここからはだいぶ距離があるように見えるけど……）
と思っていたら「カッ！」と、乾いた音と共に何かが飛んできた。

「シューッ」と、空気を裂くような音が近づいてくる。
（来たっ！）と、思った次の瞬間、数メートル手前の地面で「ボスッ」と、何かが跳ねた。
（球？！）
バウンドする白い物体を見て、ようやくそれが打球だと分かった。
（ホントにこんなトコまで届くんだ！）
驚いて菊乃はバッターボックスの方を見た。大志はバットを地面に叩きつけてくやしがっている。そして、もう一球のポーズ。

……そして2球目。
投手が投げる。大志が打つ。「カッ」「シューッ」「ボスッ」と、まるでＶＴＲみたいにさっきと同じように打球が飛んできて目の前で跳ねた。結構なスピードだ。
……続いて3球目。
やはり「カッ」「シューッ」ときて……「ズボッ」と、今度は鈍い音がした。
「？！」
おやっと思って打球の行方を追う。すると……奇妙な物体が目に入ってきた。そして言葉にならない呻き声が耳に入った。地面に転がって死にかけのゴキブリみたいに悶絶する変な男子。それが打球を背中に受けた目黒健介だということを理解するには数秒を要した。
「嘘……」
菊乃は絶句した。
（もしかしたら、ゴッキー、はじめからこれを狙ってた？）
信じられない思いで菊乃は小さく見えるバッターボックスを見た。
「やったー！　やったー！」と、喜びを爆発させる大志の声がここまで聞こえてきた。
　菊乃に野球は分からない。でも、今起こった出来事がただ事でないことぐらいは分かる。
（何なの一体……）

目の前の奇跡に菊乃と美穂子が唖然としているのに対して、勝春とカズはそうでもない様子。まるで驚いていない。
（この人達って……なんか変……）
もしかしたら想像している以上にこの3人には何かあるんじゃないか？
菊乃はそんな気がしてならなかった。

＊　＊　＊

4．決着！

決戦は放課後。いよいよ柔道部に乗り込む時間が近づいてきた。
授業が終わり、教室を出て武道場に向かう。
カズを先頭に勝春、大志がそれに続く。さらに3歩後から菊乃と美穂子がチョロチョロついていく。
武道場に近づくにつれて菊乃の不安が高まっていく。
（カズ君は解決するって言ってたけど……ホントは何も分かってないんじゃないの？）
そうこうしている間にも先頭のカズが武道場に到着。そして扉を勢い良く開け放った。
武道場にはまだ数人しか集まっていなかった。柔道着に着替えた部員が数人。部長のモアイもいる。
「おっ？」と、モアイ部長が顔を上げる。そして例の気持ち悪い顔でニヤッと笑う。
（やっぱキモッ！）
菊乃にはもうアレルギー反応が出ていた。
「なんだ？　入部する気になったのかぁ？」
モアイ部長の問いかけに対してカズは「いや」と首を振った。そしてズカズカと畳に足を踏み入れながら続ける。
「単刀直入に言うけどいいかな？」
「な、なんだ？」と、モアイ部長が怪訝そうな表情を浮かべる。

それに構わずカズは、ちょこんと指先でメガネの位置を直してから冷静に口を開いた。
「夜のバイト。止めてくれないかな？　問題になる前に」
「な、な、何言ってんスかぁ？　夜のバイト？　何のことだか…」
と、モアイ部長はすっとぼける。しかし、明らかに動揺している。
「おとといの見学で気がついたんだ。練習の時に3人足りないって。ランニングに出る時は15人。でも帰ってきたのは12人。しかも足りない部員は当番表の3人だった。それでピンときたんだ。案の定、次の日、朝練に出てきたその3人は、前の日の格好のまま登校してきた。鞄も持たずにね。つまり、ランニングに出た時に当番の3人はバイトに直行してそのまま帰宅したってことだよね」
　カズは淡々と説明を続けた。それを聞いて菊乃にもようやくカズの行動の意味が分かってきた。
（カズ君て頭いいんだ。なんか探偵みたい……）
モアイ部長が凄い顔つきでカズに迫る。
「な、なんだと？　だ、誰が信じるか。そんな作り話……証拠は？　証拠はあるんスか？」
カズの後ろでニヤニヤしていた勝春が口を挟んだ。
「にしても変態チックな店だったよネ。大志？」
「ああ。二度と行きたくないな。あんな変態じみた店は。だいたい何だ。あの「ハグ・タイム」とかいうサービスは？」
それを聞いて不思議に思った菊乃が声を漏らす。
「ハグ・タイム？　何それ？」
大志がげんなりした顔で説明する。
「ホモの客が千円払ってこいつらに抱きしめて貰うというサービスだ。客の連中は汗臭い柔道着の匂いをクンクン嗅ぎながら喜んでいやがった。まったく俺には理解できんが」
理解不能な話に菊乃と美穂子は眩暈がした。
（ホモって何？　ハグ・タイム？　匂い嗅いで喜ぶ？）
カズの推理がモアイ部長を追い詰める。

「なるほど分からないわけだ。だって柔道部ぐるみでアリバイ工作してるんだからね。それも変態クラブで……下手したら廃部だよ！」
「しょ、証拠が無いッスよ」と、モアイ部長はそれでもしらをきるつもりだ。
しかし、カズはあくまでも冷静だ。
「……証拠ね。いいよ。じゃあ、昨日の当番の人。小池君、秋澤君、矢内原君。君達、今日、着替える時に気がついたかい？」
モアイ部長が振り返って部員達の方を睨む。カズに名前を呼ばれた3人と思われる部員が、びびりながら首をぷるぷる振る。
カズが何を言っているのか理解できないモアイ部長が喚いた。
「な、何、ハッタリかましてるんスか！　証拠なんてないっしょ！」
「それがあるんだナ」と、勝春がブレザーのポケットから何かを取り出した。
よく見るとそれは「油性ペン」だった。いつの間にか大志も同じペンを手にしている。それでも意味が分からないモアイ部長が喚いた。
「この2人が昨日、君達がバイトしてたお店で3人の帯にサインさせてもらったんだよ」
その瞬間、モアイと部員達の表情が凍りついた。菊乃もやっと意味が理解できた。つまり、昨夜お店に潜入した勝春と大志が、部員達の黒帯に油性ペンでこっそりサインを書いていたということだ。
カズが補足説明をする。
「黒帯に赤でサインしたから見にくかったんだろうね。言っとくけど、その柔道着は日中はずっと鍵のかかったロッカーにしまってあったんだよね。だったらボク達がサインするチャンスがあったのは、昨日の夜だけってことになるでしょ」
そこまでカズが証拠を挙げているにもかかわらず、モアイ部長はまだ認めようとしない。
「そ、そんな事ないッスよ。だって、その、昨日の夜に書いたかどうかなんてわかんないッスよね？　もっと前に書いてあったのかも

……」
「それは無いね」と、即座にカズが否定する。そして、勝春に向かって尋ねた。
「ね。勝春。キミは何て書いたの？　彼らの帯に」
「ああ。昨日の試合結果サ。「巨人７－０阪神。ウキタ初完封！」ってネ」
「あっ……」
さすがにモアイ部長も参ったようだ。うつむいて何事かブツブツ言っている。
武道場がしんと静まり返る。
「畜生……」と、モアイ部長が顔を上げた。その目はぎらぎらとしている。
「お前らが邪魔するっていうなら力ずくで黙らせて……」
そう言いながらモアイ部長が両手を広げて、熊が人間に襲い掛かるようなポーズでジリジリと前に出てきた。
（カズ君、危ない！）と、菊乃は思わず目を閉じそうになった。
すっと下がるカズ。代わりに大志が前に出た。
「ほお。やる気ッスか？　都大会ベスト４のオイラと？」
モアイの挑発に対し、大志はポケットに手を入れて突っ立ったままだ。まったく戦うような体勢ではない。
そのまま無言で対峙するモアイと大志。張り詰めた空気が畳の上を支配した。
「きぃえぇぇ！」と、モアイが先に動いた。
ひらりと身をかわす大志。
次の瞬間、大志の右足がふっと消えた！　かと思うと、「バチッ！」と音が響く。
見ると大志の右足ローキックがモアイの左ひざの裏側にめり込んでいた。
左ひざを「くの字」に曲げて苦悶するモアイ。
その瞬間、左の足の裏でモアイの左ひざを踏み台にした大志の身体

が「ぶわっ」と浮いた。と同時に右ひざが水平に振り切られた。
モアイの顔と大志の膝蹴りの軌跡が一直線になり、「ゴッ！」と鈍い音が響いた。
思わずカズが声をあげた。「シャイニング・ウイザード！」
モアイが倒れるのと同時に大志が軽やかに着地する。
そしてそれっきりモアイは石像のように動かなくなった。
一瞬の出来事に凍りつく武道場内。柔道部員たちは完全に戦意を喪失している。
モアイを沈めた大志といえば……またポケットに手を突っ込んで、何事もなかったかのようにモアイを見下ろしている。
（つ、強っ……）
大志のあまりの強さに感心しながらも菊乃は納得した。どうりで熊の巣窟みたいな柔道部に殴り込みをかけても落ち着いていられるわけだ。
誰もが言葉を失っている状態で、突如、カズがパンパンと手を打った。
「はい。という事で、柔道部の秘密のバイトはお終い！」
何を言われているのか分からないといった表情の面々に向かって大志がすごむ。
「分かったのか？　分かったなら返事っ！」
「う……うぃーッス」
何ともしまりの無い返事が返ってきた。しかし、これで事件は一応、解決した。
柔道部のいかがわしいバイト疑惑。それはホモの人達を相手にする変態クラブに柔道部ぐるみで部員を派遣していたものだと判明した。
そしてそれが公になる前にカズ達3人がそれをやめさせたのだ。

＊　＊　＊

武道場を出ながら菊乃が感心する。

「それにしてもカズ君て超アタマ良いよね？　だって部員の顔と名前覚えちゃったんでしょ。たった1回、見学しただけで」
「え？　普通、覚えない？」
そんなの当たり前でしょと言わんばかりにカズがすました顔をする。
「覚えられないって！」
菊乃には段々彼らの凄さが分かってきたような気がした。と同時に、彼らの秘密に只ならぬ興味がわいてくるのを抑えることが出来なかった。
（この人達、ただのイケメン転校生なんかじゃない！　絶対に何かある！）
謎の美少年3人組の転入と柔道部事件の解決。一見すると何でもない偶然のように思われる。しかし、奇しくもそれがこの加美村学園を襲う危機の始まりであることには、まだ誰も気付いていなかった。
ミステリー・ボーイズの3人を除いては……。

第二話　特進クラスの憂鬱

1　新たなミッション

柔道部バイト事件の報告を聞いてクライアントである校長は安堵の表情を浮かべた。
「さすがはミステリー・ボーイだ。助かったよ。手遅れになる前で。すでに父兄会の一部に情報がもれていたものでな」
カズが念を押すようにクライアントに尋ねた。
「まだ安心はできませんよ。ところで校長。本当にお心当たりはないんですか？」
「……無い、と思う」
大志がやれやれといった風に首を振る。
「あの後、柔道部の奴らを締め上げたが……結局、誰があの変態クラブのバイトを見つけてきたのかは分からなかった」
大志の言葉に勝春が説明を加える。
「変ですよネ。見知らぬ男にあの店を紹介されたって言うんですヨ？　おまけに、あのアリバイ工作もその男から教わったってネ。柔道部の連中は何者かに踊らされたくさいナ……」
それを聞いて校長が狼狽する。
「や、やはり、誰かが裏で糸を引いていると言うのかっ？」
勝春は当たり前でしょうという口調で頷く。
「そうですヨ。ていうか、そうとしか考えられないですヨ」
「ま、まさか我が校の……内部の人間なのか？」
うろたえる校長の疑問にカズが即答する。
「それは無いと思います。柔道部の連中にはこの学校の職員すべての顔写真を見せて確認しましたから」
カズの言葉に校長はホッとする。しかし、カズは釘をさすことを忘れない。

「いずれにせよ悪意のある何者かが、この学園の生徒を陥れようとしているのは間違いないですね」
カズの分析を聞いて校長はバンと机を叩いた。
「いったい何者なんだっ！」
腕組みしながら大志が冷静に言った。
「それを見つける為に俺たちが呼ばれたんだろう。違うか？」
「むぅ。確かに……」
勝春がにっこり笑う。
「信じて下さいヨ。オレらを」
「そうか。そうだったな。うん。君らの実力は聞いている。これからも頼んだぞ」
と、校長は自分に言い聞かせるように何度もうなずいた。そして、大きなため息をつくと思い出したように言った。
「そうだ。もしかしたら……いや、関連性があるかどうかは分からんが、今、別件で問題が発生しているんだが……」
「問題？」と、カズが反応する。
残る2人の表情が引き締まる。新たなミッションか？
「実はだな。進学指導課の山吹君。彼が指導する特進クラスの三年生2人の成績が、最近、特にふるわないのだ」
拍子抜けしたように大志があきれる。
「夏休みに遊びすぎたんじゃないのか？」
「いいや。山吹君の指導には定評がある。恐らく何か他の原因があるはずだ」
カズがメガネに触れながら言った。
「とりあえず調べてみましょう。今は少しでも手がかりが欲しいですから。で、校長はその2人の生徒はご存知で？」
「ああ。とても優秀な生徒だ。2人とも三年のエース的な存在だ」
「そうですか。ではその2人のファイルを見せていただけますか？」
「な、それは個人情報なのでちょっと……」
「いえ。パラパラっと見るだけですから。持ち出したりはしません

よ」
ファイルを持ち出さなくともカズのずば抜けた記憶力をもってすればパラパラ見るだけでも充分なのだ。
「では頼んだぞ。ミステリー・ボーイ君！」
それを聞いて勝春がすまして言う。
「ミステリー・ボーイズ、ですヨ。ボーイズ。複数形のSをお忘れなく」
その後、校長室を出た3人の表情は険しかった。
――　やはりこの学園を狙う何者かが存在する。
とりあえず特進クラスのエース2人の成績不振の原因を突き止めること。それが新たなミッションだ！

2　菊乃の不満

昼食の後、休み時間がまだ充分残っていたので菊乃と美穂子は飲み物を買いに食堂へ向かった。
廊下を歩きながら美穂子がうっとりする。
「……カズ君って超カッコイイよねぇ」
柔道部事件の後、美穂子は方針を変えたらしい。
「あれ？　美穂子はカッチーがダントツとか言ってなかったっけ？」
菊乃がからかうと美穂子はむきになって力説する。
「だってカズ君てば超アタマ良いんだよ！　あんな可愛い顔して。それにあの名推理！　まるで名探偵みたいだったでしょ。超カッコイイ……」
もともとミステリーとか探偵マンガとかを好む美穂子がこの前のカズを見て惹かれてしまうのは無理も無いのかもしれない。
「ね。菊ちゃんは大志君なんだよね？　カズ君じゃないよね？　ね？」
（美穂子……必死すぎ）
菊乃が苦笑しながら否定する。

「アタシは別に誰でもないよ。だいたい誰があんな格闘バカなんか……それに超、失礼だし」
「え～？　でも大志君が柔道部でキック決めた時、菊ちゃん見とれてなかった？」
「な……み、見とれてないってば！」
美穂子の反撃が続く。
「そっかな～。それに第一印象も大志君がいいとか言ってなかったっけ？」
「そ、それは……確かに……そう言ったけど……」
菊乃が言葉に詰まっていると2人の間に何者かが後ろから割って入った。
「ふ～ん。それは聞き捨てならないネ！」
「わ！　カ、カッチー？」
と、目を丸くする菊乃に向かって勝春がにっこり笑う。
「い、いつの間に？」と、菊乃が勝春を睨む。
「勝春君、どこからわいてきたの？」
と、美穂子が首をかしげてみせる。
「ひどいナァ。どこからわいたって……オレは虫かヨ！」
まったく悪びれた様子の無い勝春に菊乃が疑いの目を向ける。
「アタシらの話、どこから聞いてたの？」
「う～ん、第一印象がどうたらってとこらへんカナ？」
菊乃の顔に血が上る。真っ赤になっていくのが自分でもよく分かる。
「あ、あんた、そ、それって、誤解っていうか……」
動揺する菊乃の肩を勝春がぽんと叩く。
「ま、頑張ってヨ。大志は口が悪くて乱暴で格闘バカだけど、意外とやさしいヤツだし」
「え……やさしい？」と、素で答えてしまってから菊乃は後悔した。
こんな反応では大志に興味があるということがバレてしまう！
案の定、勝春は菊乃の心中を見透かしたような笑みを浮かべて言った。

「ネ？　菊ちゃんは大志のこと。好き？　それとも嫌い？」
勝春の問いに菊乃は警戒した。そして慎重に言葉を選ぶ。
「どちらかというと……キライ」
それを聞いて勝春が「やっぱりネ」と、微笑んだ。
（何で？　表情に出ないように気をつけたはずなのに）と、菊乃が戸惑う。
「オレの思った通りだネ」
「え？　どういうこと？」
勝春はじっと菊乃の目を見ながら言った。
「好きの反対は嫌い。嫌いの反対は好き。本当に何とも思ってないなら、どっちでもないはずダヨ！」
「あ……」
菊乃はうまくはハメられたと思った。
（いつもニコニコしてるけど……カッチーって結構クセモノかも？）
そんな気がした。そして、つくづく思った。
（やっぱりこの人達って……絶対にタダモノじゃない！）

3　作戦会議におじゃします

今日の作戦会議は音楽室。
楽器をしまってある小部屋で大志とカズは勝春を待っていた。楽器のケースや太鼓が積み上げられた小部屋はちょっとした隠れ家のようだ。
例によって遅れてきた勝春に向かって「遅いぞ」と、文句を言おうとした大志が菊乃と美穂子の姿を見つけて目を見開いた。
「お、おいっ勝春！　どういう事だ？　なんでこいつらが居る？」
勝春の背後からちょこんと顔を出した菊乃が「こ、こいつらぁ？」と、顔を引きつらせる。大志の剣幕に「後藤君、怖すぎ…」と、美穂子も引き気味だ。

しかし、大志の怒りは収まらない。
「話が違うぞ！　この前の事件で終わりじゃなかったのか？」
「いや、それがサァ。菊ちゃんも美穂子ちゃんも仲間になったんだから……ネ、せっかくだし今回も手伝ってもらおうヨ！」
「は？　手伝うだと？　この前の事件でこいつらが何か役に立ったか？」
みもふたもない大志のコメントだがそれもまた事実。前回の事件で菊乃と美穂子は何もできなかった。本当のことを言われて菊乃は唇を噛んだ。
そこにカズの助け舟が入る。
「まあまあ。大志も言いすぎだよ。ある意味、彼女たちを巻き込んでしまったのはボクらなんだから」
「は？　何を言っている？　前の事件の時だってこいつらが勝手に……」
「そういえば最初の理科室。あの場所は大志がセッティングしたんだよね？」
一瞬、カズが何を言っているのか分からなかったが、はじめて菊乃たちと遭遇したのが理科室だったことを思い出したのか大志はしぶしぶ認める。
「そ、そうだが……」
「だったら大志にも責任はあるんじゃない？」
「な、カズ、お前はどっちの味方なんだ！」
「ボクはいつでも中立だけど？」
やはり口ではカズには敵わないとみて大志は「勝手にしろ」と、ふてくされてしまった。勝春がこっそり（サンキュー）のジェスチャーをカズに送る。
「ヨシ。これで決まりだネ。じゃ、早速、分担を決めようヨ」
勝春の言葉に菊乃と美穂子がほっとする。
（また、三人組と一緒だ！）という喜びに、菊乃は内心ガッツポーズをした。

まずはカズが任務の概略を菊乃と美穂子に説明する。
「今回の任務は、特進クラスの成績が落ちた原因を探ることなんだ。ターゲットは二人。まず一人目は3年1組の高井久美子さん。生年月日は……」
カズは何も見ないで高井久美子の家族構成や得意学科、性格などなどのプロフィールを長々と説明する。
菊乃が不思議に思って尋ねる。
「え、ちょっとカズ君？　何でそんな細かいことまで知ってるの？」
「ああ、クライアントに資料をみせてもらったんだよ。ちょこっとだけね」
本当にさっと目を通しただけの資料でもカズの頭の中には細部までしっかりとインプットされている。カズは続いてもう一人のターゲット「堀達郎」のプロフィールを完璧に説明した。そして今回の作戦について提案する。
「二手に分かれてアプローチしよう。「高井久美子」には勝春と藤村さん、「堀達郎」にはボクと森野さん。で、残った大志は特進クラスについての調査でＯＫ？」
みんな異論はない。カズはゆっくり頷いてから最後にこう付け加えた。
「彼らの成績が急下降したのには何か理由があるはずなんだ。もしかしたら何者かが関わってる可能性もある」
カズの言葉に菊乃は少し違和感を持った。
（何者かが関わってる？　……どういうことだろ？）
今はまだ分からない。しかし、この3人組のことだ。きっと何か裏があるんじゃないか、と菊乃は思った。

4　高井久美子のため息

その日の放課後、さっそく勝春と菊乃は行動を開始した。
6時間目の授業が終わってから2人は真っ直ぐに特進クラスに向かった。が、すでに高井久美子はいないと言われてしまった。そこでクラスメイトに聞き込みをした結果、高井久美子は図書館に直行したことが判明した。すぐさま2人も図書館へ急行する。

情報通りにターゲットは図書館にいた。
「いたいた。あの子だヨ」と、勝春が彼女を指差した。
「え？　カッチー、顔知ってんの？」
「オレも資料見たんだヨ。オレ、一度見た女の子の顔は絶対に忘れないんだヨ」
読書スペースのテーブルに一人でぽつんと座っている彼女が「高井久美子」。特進クラスのエースだ。ただ、見た目はごく普通。化粧こそしていないようだが、セミロングの髪は上品にカールさせている。
しばらく離れた場所から観察してみる。
（なんか元気ないみたい……）
菊乃は少し意外な気がした。特進クラスでトップというから、もっとバリバリ勉強していると思っていた。しかし、参考書を広げてはいるものの彼女はため息ばかりついている。
「ねえ。なんか悩み事でもあるのかなあ？」
「さあネ。でも声掛けるチャンスではあるナ」
「え？　声掛けんの？」
「勿論サ」
そう言うと勝春はツカツカと久美子がいる机に向かって歩き出した。仕方なく菊乃も後に続く。
「高井さん！」と、親しげに名前を呼ぶ勝春を見て久美子が「え？」と、一瞬、困ったような表情をみせた。
考える間を与えずに勝春は畳み掛ける。
「M大学だったよネ？　あさっての模試。M大って最寄り駅どこだ

っけ？」
「え、あ、御茶ノ水だけど……」
おそらく見覚えのない男子に声を掛けられて戸惑っているのだろう。なのに無視できないところをみると少し気が弱いタイプなのかもしれない。
「あのサ。オレ、御茶ノ水、降りたことなくってサ。悪いんだけど一緒に行ってくれないカナ？」
「……え……でも」
やはり勝春の強引なお願いをきっぱり断りきれないあたりが彼女の性格をあらわしているようだ。
「やっぱ無理カナ？　あ、もしかして彼氏とデートとか？」
「や……そういうわけじゃ、ないけど」
「しょうがないナ。じゃ頑張って行ってくるヨ。邪魔して悪かったネ」
そう言うと勝春はあっさりと引き下がった。

図書館を後にしながら菊乃が尋ねる。
「ね。あれで終わり？」
「ああ。そうだヨ」
「だって、あれじゃ何にも分かんないじゃん」
「いや。そうでもないヨ。あさってになれば分かるさ」
「へ？　どうして？」
「たぶん彼女、迷ってるんじゃないかナ。あさっての模試に行くかどうかを」
「何でわかるの？」
「模試の話をふったときの表情。それと一緒に行ってくれないかナって頼んだときの反応」
「それって見覚えの無い相手に馴れ馴れしく話しかけられて困ってただけなんじゃない？」
「それを適当にあしらえないンだから彼女、相当押しに弱い性格な

んだろうネ。だからもっと強引にお願いしてればＯＫしたはずだヨ。けど、自分が模試に行くかどうか迷ってるからＯＫできなかったンじゃないかな」
「そんな……特進の三年生が模試をサボるなんて……」
「そう。そこダヨ！　彼女が模試をサボろうとするなんてよっぽどの事だと思わない？」
「うん」
菊乃が頷くと勝春が確信したように言う。
「おそらくデートの約束があるんだと思うヨ。彼氏の話をふった時、彼女、うわずった声で無意識に口元に手をやったでしょ？　あれは嘘ついてる時によくみせる仕草なんだヨ」
「そんなもんかな～」
「ま、あさって彼女をマークしてれば分かるヨ」
「マーク？　てことは尾行するの？」
「そういうことサ」
「ふ～ん。そうなの」
自分が誰かを尾行すると聞いてもあまり違和感が無い。そういう自分が段々と3人組のペースに染まってきてるなあ、と菊乃は思う。
「ところでカッチー、初対面の人にあんなに馴れ馴れしくよく話せるよね。おまけにタメ口だし」
「そうかナ。別にいつもあんな感じだけど？」
「普通は警戒されるけどねぇ。ま、カッチーの場合は分かるような気もするけど」
そこが彼の魅力なのかもしれない。黙ってるとそれだけで絵になるようなルックス。その涼しげな二重で見つめられると、たいていの女の子はドキドキしてしまうだろう。それなのになぜかその微笑にはなんともいえない親近感がある。
（例えるなら……例えるなら……なんだろ？　見ているものを癒すもの。そうだ。もし、この3人組が犬だったら……）
人懐っこいカッチーはゴールデンレトリバー。

可愛らしいカズ君はミニチュアダックスかな。
で、ゴッキーは……。
あれ？　なんだろ。強いていうなら……ハリネズミ？
そんなことを想像して菊乃はひとりで吹いてしまった。
そんな菊乃を見て勝春が呆れる。
「何考えてるんだヨ？　ひとりでニヤニヤしてサ」
「べ、別に！　なんでもない」
「ふーん。怪しいネ……」
からかうような顔つきで勝春が菊乃の顔を眺める。なんだか心の中を見透かされているようで菊乃は少し焦った。
もしかして勝春にはテレパシーのように人の心を読む能力があるのかもしれない、なんてことを想像しながら菊乃は勝春に背を向けた。また顔が赤くなりそうだった。それを隠すために菊乃は校庭を眺めるふりをした。

5　もう一人のターゲット

一方、カズと美穂子はもう一人のターゲット「堀達郎」を尾行していた。
堀は特進クラスの授業が終わると、そそくさと帰り支度をしてクラスの誰とも話すことなく逃げるように教室を抜け出した。そしてそのまま学校を出て駅に向かう。
カズは適当に距離をとりながら近すぎず遠すぎず、微妙に距離を変えながらターゲットを追跡した。美穂子は息を切らせながらカズについていくのがやっとだ。
「大丈夫？　森野さん」
「ん……まぁ、なんとか」
「だいぶ息切れしてるみたいだけど？」
「ん、平気。私、カズ君についていくから……どこまでも！」

最後の「どこまでも！」には美穂子の気持ちが込められていたが、声が小さすぎてカズの耳には届かなかったようだ。
「え？　何か言った？」
きょとんとするカズの愛らしい表情に美穂子は萌えてしまう。
「ん……何でもない」
好きだという気持ちを軽くスルーされてしまった。顔で笑って心でグスン……。しかし今の美穂子にとってはカズと二人きりというだけでも大変なことだ。堀の二十歩後をカズが追いかけ、カズの三歩後ろを美穂子が追いかける。そんな具合で駅に到着した。

堀達郎は電車で移動して二つ隣りの駅に降りた。
その足で彼は駅前のロータリーをすたすたと歩く。どこかに寄り道する風でもなく、まっすぐに目的地に向かっているようにみえた。そして最終的に彼が到着したのは駅前のコーヒーショップだった。ワンテンポおいてカズと美穂子も店に入る。
「向こうはボクらのこと知らないけど、制服だから気付かれるかもしれない。だから少し離れていよう」
「うん」
カズと美穂子は堀達郎のテーブルから三つ離れた席を確保した。そして窓際の席に陣取るターゲットを監視する。
（カズ君と二人きり……これが調査じゃでなきゃもっといいのに）
美穂子の中では調査なんかは既にどうでもいいことになり始めていた。カズは、時折、店の入り口をちらっと見ながらターゲットの様子を観察している。美穂子は、そんなカズの表情や仕草をずっと見ていた。
（カズ君の目ってなんでキラキラしてるんだろ。たぶんメガネ外したらもっとカッコイイんだろうなぁ……）
しかし、どんなに見つめたところでカズが美穂子の熱い視線に気付く気配はまったく無い。それでも恋する乙女はポジティブだ。
（何かに夢中になってる男の子ってステキ……）

しばらく堀達郎を観察していると、やがて「堀クン」と、ターゲットのテーブルに近づく女性が現れた。熱心にノートに書き込みをしていた堀が手を止めて顔を上げる。見るからにギャルっぽいその女が堀のテーブルに座る。
「あれがそうか……」
カズが堀達郎のテーブルを注視する。
しばらく観察してみたが、普通のカップルという雰囲気ではないように感じられた。女が一方的にしゃべって男は我慢して聞いているような具合だ。
カズがぽつりと呟く。
「……あの二人。話、合うのかな？」
「……あんま楽しそうにみえないね」
「ボクには堀先輩が無理やりつき合わされてるように見えるんだけど」
「そうだね。なんかあの派手な女の人と堀先輩、世界が全然違うような気がする」
「森野さん。それ、当たってると思うよ。あの二人は明らかにミスマッチだよ」
森野さんと言われて美穂子は軽いショックを受けた。
（……美穂子って呼んで欲しいのになぁ）
せっかく二人きりでいるのに楽しくおしゃべりをするどころか、さっきからカズは別なテーブルの方ばかり気にしている。それが美穂子には不満だった。調査だから仕方ないことは分かる。でも……。
（もう少し私を見て欲しいな……）
「あ。トイレに行くみたいだな。そうだ。森野さん。トイレに行って、あの子の様子を探ってきてくれないかな？」
「私が？　……私にできるかな？」
「彼女がトイレで何してたか、それを後で教えて欲しいんだ」
「トイレで何してたかなんて……」
美穂子が少し変な顔をしたのでカズが慌てる。

「べ、別に変な意味でじゃないよ。彼女、携帯を持ってトイレに向かったから誰かに電話するんじゃないかって思っただけだから」
カズのお願いを断るわけにはいかない。美穂子は少し間を置いてから、しぶしぶ女子トイレに向かった。

女子トイレは左手に洗面台、右手に個室が二つという造りになっていた。
美穂子が入った時、片方の個室は扉が閉まっていた。が、中から話し声がもれてくる。
（携帯？）
カズの言葉を思い出して美穂子は、彼女が何を話しているか聞き取ろうと耳をすませる。
『でしょ、でしょ。うん。うん。だからさ。お願いっ……今月、同伴のノルマきついんだ』
重要だと思われる言葉を拾って美穂子は頭の中で繰り返した。
（ドーハン、ノルマ、キツイ……）
やがてカチカチッという音がして、すぐにタバコの匂いが漂ってきた。
（あ、タバコ吸ってる！）
禁煙のプレートを見ながら美穂子は確信した。
（この子は悪い女に違いない！　堀先輩はダマされてる……）

急いで席に戻った美穂子がやや興奮気味に報告する。
「あの子、トイレでタバコ吸ってたんだよ！」
「そ、そうなんだ。ところで電話は？　何か話してなかった？」
「そうそうそう。それがね。あれ……なんだっけ？　あ、そうだ。よく聞き取れなかったんだけど、ドーバンの車がきついって」
「は？　何だいそれ？」
「さあ。ドーバンって名前のちっちゃい車なのかなぁ。乗るときついのかも。で、なんか誰かにお願いしてたみたい」

「お願い……ドウバンのクルマがきつい？　……それってさ。もしかして同伴のノルマがきついってことじゃない？」
「……そうかもしんない」
「そっか。何となくそんな感じがしたんだよね。やっぱりそっち系か……」
「そっちってどっち？」
「……いや、その、森野さん。君ってちょっと……」
とほほ、といった感じでカズが苦笑いを浮かべる。が、美穂子は全然、気にしていない。それどころか少し喜んでいる。
（カズ君……そういう表情も可愛い）
そうこうしている内に、堀達郎の彼女が「バイバイ」と、席を立とうとした。
それを見たカズは素早く携帯を取り出してカメラを美穂子に向けた。
「え？　やだ。そんな急に」と、美穂子があせる。
好きな人にいきなりカメラを向けられてあせらない女の子はいない。どんな表情をすればいいのか、髪は変じゃないか、ちょっとでもキレイに撮られたいけど……。
ところが、カズは美穂子ではなく、堀の彼女がテーブルに近づくタイミングを計って彼女を撮影した。カシャッという音に反応した堀の彼女が視線をカズに向けた。が、それと同時にカズは手首を返して携帯を美穂子に向けたので、彼女はチラッと目を向けただけでスタスタと行ってしまった。
がっかりするやらほっとするやらで美穂子は複雑な心境になってしまった。
（……私を撮りたかったんじゃないんだ……なんか慌てて損した）
カズは携帯に収めた写真を確認してから電話をかける仕草をみせた。そして、携帯を耳にあてたまま席を立とうとする。それを見て美穂子も慌てて立ち上がろうとする。
が、カズはそれを制した。
「森野さんはこのまま帰っていいから」

「なんで？　私も……」
「ダメだよ。彼女が水商売系だって分かったからにはそうはいかない。制服のままお店まで尾行するわけにはいかないだろ？」
「でも、カズ君だって制服……」
そういう美穂子の言葉を無視してカズが電話にむかって言う。
「あ、勝春？　そっちはどう？」
勝春と繋がったらしい。カズは歩き出しながら勝春に応援を要請した。
「そういうわけで頼むよ。着替えたらすぐに来て欲しい。じゃ、駅についたらまた連絡する」
彼女を見失わないようにカズは店を出て歩く速度を上げる。その後を美穂子が追いかける。
必死で追いかけてくる美穂子を見てカズが歩きながら困ったような顔をみせた。
「だから森野さんはここまでいいって……」
「やだ！　ついていく！」
堀達郎の彼女は駅に向かってテクテク歩いている。遠ざかる彼女の後姿と美穂子の必死な顔を見比べてカズは少し焦った。そして一瞬、目を閉じてから立ち止まり、美穂子の両肩に手を乗せて言った。
「君を危険な目にあわせたくないんだ」
「！」
美穂子は息を飲んだ。
カズの手のひらが美穂子の両肩をしっかりと握っている。その力強さ、ぬくもり……。
頭が真っ白になった美穂子が人形みたいにこくんと頷く様を見て、カズは駅に向かって走り出した。
（カズ君……）
カズに置いてきぼりにされたというのに美穂子はまったく気にならなかった。アタマの中でカズの言葉が何度も繰り返される。
（私のことを心配してくれてる……）

駅前のロータリーでぼんやり立ちつくすその時の美穂子は、どこからどう見ても怪しい女子高校生にしか見えなかっただろう……。

6　秘密基地でランチ

次の日の土曜日。授業は午前中だけだったので昼ごはんを兼ねて中間報告は3人組のマンションでやることになった。情報交換なら3人だけでやれば良いのだが菊乃と美穂子も仲間にした手前、一応みんな揃ったところでミーティングをやらないとならない。
3人組の住む部屋に行けるということで美穂子はテンションが上がりっぱなし。
「ね、ね、菊ちゃんどうしよ。私、なんか超テンション上がってんだけど」
美穂子は明らかに声が上ずっている。
「でも部屋とか超汚いかもよ」
そういう菊乃だってあの3人組がどんなところに住んでいるのか興味はある。
「秘密基地でランチだねっ！」
「秘密基地って……美穂子ってば……」
美穂子の「はしゃぎっぷり」は菊乃の方が恥ずかしくなるくらいだった。

学校から歩いて3分のマンション7階。3人組の3ＬＤＫにはじめて足を踏み入れる。
心臓バクバクの美穂子。興味シンシンの菊乃。ニコニコと出迎えてくれたのは勝春。
「サ、遠慮なく入ってヨ。お弁当も用意してるからネ」
広い玄関だなあというのが菊乃の第一印象。しかし、よく見ると何もないからそう見えるのかもしれないと気づいた。まるで引越しを

してしまった部屋を訪れたような感じだ。
それは勝春に案内されたリビングも同じだった。すごく広いのに、何コレ？　と言いたくなるぐらい殺風景な室内……。
リビングに通された菊乃と美穂子を見てカズが立ち上がって「いらっしゃい」と、軽く手を上げる。が、大志はソファに座ったままこちらを見ようともしない。
（感じ悪っ！）
菊乃は大志の態度にムッとしたがここは堪える。
美穂子がリビングに入って第一声をあげる。
「すごーい。なんか、ちっちゃい無人島みたい！」
その妙なコメントに始めは何のことか誰も分からなかった。しかし、よくよく彼女の説明を聞いてみると、二十畳ぐらいありそうなだだっ広いリビングの真ん中にソファとテーブルがぽつんと放置されている様子が美穂子には海に浮かぶ小さな無人島みたいに見えたということらしい。
カズがクスッと笑う。
「森野さんて面白い発想をするね」
カズの言葉に「そんなことないよぅ」と、美穂子が顔を赤らめる。
そんなリアクションを見て菊乃も呆れる。
（美穂子……ホメてないって……）

5人揃ったところで昼食をかねた報告会を始めることにした。
ところがソファが三つしかなくテーブルも小さいので5人でコンビニ弁当を食べるにはちょっと厳しかった。そんな中で勝春は気をきかせてくれる。
「菊ちゃんと美穂子ちゃんはソファに座りなヨ。オレとカズは床でも平気だから」
「さっすがカッチー。紳士だよねぇ。誰かさんと違って」
菊乃が嫌味っぽくそう言いながら大志を見た。
「ぐふっ」と、コロッケ弁当に手をつけていた大志がむせる。

「ゴッキー、お行儀悪すぎ。一人だけ先に食べてるし」
菊乃に指摘されて大志が睨み返す。
「お、お前なあ……自分ン家で何しようが俺の勝手だろうが」
「自分ン家？　は？　カッチーとカズ君と3人の家でしょ」
「お前は下らねえ事、いちいち……」
菊乃と大志のケンカがヒートアップしそうなのでカズが割って入る。
「まあまあ止めなよ二人とも。とにかく食べながら報告会やるんだから」
菊乃と大志のやりとりをニヤニヤしながら見ていた勝春が二人をからかう。
「そうそう。痴話ゲンカは二人きりの時にやって欲しいよネ」
「だ、誰が！」という菊乃の台詞と大志の台詞がかぶった。そしてぷいっと顔を背ける二人。
お弁当を開けながら菊乃は考えた。
（特に意識してるわけじゃないのに……なんでだろ？）
勝春が言っていた『嫌いの反対は好き』という言葉がやけに引っかかる。
　菊乃と美穂子がお弁当を食べ始めたところでカズが特進クラスの「堀達郎」は水商売風の女と付き合っている事を報告した。そこまでは菊乃も美穂子から聞いていた。問題はその後だ。カズは美穂子を残してその女を追跡したらしいが……。
　その点についてカズは次のように語った。
「あの後、森野さんと別れてから彼女を尾行したんだけど予想通り彼女の正体はキャバクラ嬢だったよ。で、名前が……」
「ミドリちゃんだネ」と、勝春が口を挟む。
「そう。彼女が客と同伴してる間に勝春がボクと合流してそのあと彼女の店に潜入してくれたんだ」
それを聞いて菊乃があきれたように勝春の顔を見る。
「カッチーってさ。そういうの好きなの？　この前の変態クラブだっけ？　あれもお酒出すお店だったんでしょ」

「ン、まぁネ。嫌いではない。でも、変態クラブはもう勘弁！」
話がそれてしまったのでカズが軌道修正する。
「で、そのミドリ……本名かどうかは分からないけど少なくとも彼女は堀先輩とは何の接点も無いはずなんだ。そもそも無理がある。ボクたちは彼女と先輩が会っているところを見たんだけど、とても恋人同士には見えなかったし。そうだよね？　森野さん」
いきなりカズに話をふられて口をモグモグさせていた美穂子が動揺した。その拍子に彼女のお箸からウインナーがこぼれてアクションスターみたいに派手に転がった。
そのままの状態でかたまる美穂子を見かねてカズが謝った。
「ご、ごめん。食べてるとこ、急に振っちゃって……」
「ううん。大丈夫よ。拾って食べたりしないから！」
もともと美穂子のペースは緊張感に欠けるきらいがあるが、こういう場面ではトホホな感じとしかいいようがない。気を取り直してカズが続ける。
「ボクの印象では、どちらかというと堀先輩の方が無理に付き合わされてるような感じだったよ」
それまで黙って聞いていた大志が何か考え事をするような仕草をみせる。そして厳しい目つきで言った。
「つまり、そのミドリって女は刺客……か」
カズが神妙な顔つきで頷く。
「ボクはそうじゃないかと思ってる」
大志がいまいましそうにはき捨てた。
「なるほどな。堀の成績を悪くさせるために送り込まれた刺客というわけか」
そこで大志とカズのやりとりを聞いていた勝春がぽつりと呟く。
「でもサ。そんなことで成績がガクンと落ちたりするもんカナ？」
勝春の素朴な疑問にカズも首をひねる。
「そこなんだよね……ボクが見た感じ、堀先輩がのめり込んでいるようには……」

美穂子も同じ意見らしく大きく頷く。
「私もそう思う。だって堀先輩、彼女を待ってる間も勉強してたし。彼女に夢中って風には見えなかったな……」
もしも、ミドリとかいう女の人が、大志が想像するような「刺客」だとしても堀達郎の成績をメチャメチャにしてしまうほど彼をのめり込ませているとは言い難い。そこで話が行き詰ってしまったのでカズは勝春にもう一人のターゲットの情報を求めた。
「ねえ勝春。高井久美子さんの方はどうなの？」
「まだ分からないネ。でも、オレは男の存在を感じたヨ」
それを聞いて大志が身を乗り出す。
「やはりそちらも刺客か？」
「どうカナ。多分、明日になれば分かると思うヨ。明日、菊ちゃんとデートしながら確かめてみるから」
「デ、デート？」
聞いてないよ、といった風に菊乃が慌てた。
（カッチーったらいきなり何言い出すのよ……）
そう思いながらもつい大志の方をチラッと見てしまう。しかし大志はまったく無反応だ。そんな大志の態度にちょっぴりへコんでしまった菊乃の表情を勝春はしっかり見ていた。
最後にカズが大志の報告を促す。
「大志は何か分かった事ある？」
「ああ。取りあえず特進クラスのことを調べてみたんだが山吹が三年生担当になってからの４年間で進学実績が異常に伸びてるな。たぶんその功績が認められたんだろう。進学実績の伸びに比例して奴もトントン拍子で出世してる」
それを聞いてカズが尋ねる。
「ところで特進クラスの主任にはどんな権限があるの？」
「それも調べてみたんだが結構なものだな。例えばこの学校で使う教材の決定権がある。噂では奴は業者からかなりのリベートもらってるそうだ。接待なんかも受けてるみたいだしな」

「なるほどネ。一冊２０００円の参考書を千人に配布したら２００万。これが全学年、全科目になったら数千万……業者にとっては結構な売上だヨ」
「もっと怪しいのが推薦入学だ。これがクセモノだ。大学からのオファーに対してどの生徒を推薦するか。これを山吹が独断で決めてるというのだからな」
「そりゃワイロの宝庫だネ。おそらく推薦が欲しい親は幾らでもお金出すだろうネ」
カズが眉をひそめる。
「信じられないな。誰を推薦するかなんてそんな重要なことを一人で決めちゃうなんて……。まあ、そのあたりは大志がクライアントに確認しておいてね」
「ああ。校長に確認しておく」
校長と聞いて美穂子が目を丸くする。
「え？　クライアントって校長先生なの？」
「そうだヨ。あれ？　言ってなかったっけ」
と、とぼける勝春に向かって菊乃が突っ込む。
「聞いてないって！」
勝春たちのやりとりとは無関係にカズはしばらく考え込んだ。そして、こう推理する。
「山吹先生のことを良く思っていない他の教師の陰謀という可能性はあるね。彼の出世が進学実績に支えられてるとしたら今年のエース２人を潰せばダメージは大きいだろうから。あるいは特進クラスの権力を牛耳ることが狙いかもしれない。いずれにせよ、何者かが特進クラスのアシを引っ張っろうとしてるのは間違いない」
　その後で当面の方針について確認した。
勝春と菊乃は高井久美子にも刺客が送り込まれていないかどうかを調べる。カズと美穂子は堀先輩にアプローチして成績不振の原因が本当に「ミドリちゃん」のせいなのかを探る。大志は引き続き特進クラスの担任教師の身辺を洗うことになった。

事件はいよいよ核心に迫ってきた……。

7　デートで尾行？

翌日の日曜日。今日は高井久美子を尾行しなければならない。
菊乃は朝早く家を出て勝春との待ち合わせ場所に急いだ。
昨日の打ち合わせで勝春が「デート」なんて言うものだから、よけいなプレッシャーを受けてしまった。そのせいで散々、考えに考えてそれらしいおしゃれをしてきたつもりだったが勝春の格好を見て一気に萎えた。
（ぜんっぜん釣り合わない……）
グレーのセーターにピタッとした黒のパンツを決めた勝春は、どこのモデルさんですか？　と聞きたくなるような完璧さだ。とにかくスタイルが良い。足が長いのは当然として意外に肩幅が広いんだ、という新発見もあり菊乃の劣等感を倍加させた。
（……なんか一緒に歩くのヤダなぁ）
すっかりへコんでいる菊乃の心中などお構い無しに勝春は「サ、急ごう！」と、さわやかに笑顔をみせた。
まずは久美子が利用する駅に向かう。

＊　＊　＊

模試の時間から逆算して久美子は7時半には家を出るはず。という予想から二人はS駅の改札口近辺で待機した。ここで彼女を捕まえようという作戦だ。
なるべく目立たないようにという菊乃の思いをよそに勝春の目立つこと……。日曜の朝なので改札を通る人は少ないものの、勝春の姿を見た女の子はほぼ例外なく息を飲む。確かに日曜の朝イチでこんなイケメンと駅で出くわしたら誰だって驚くと思う。

（でも、こんなに目立っちゃってダイジョウブかなぁ）
……そして待つこと２０分。
（来たーっ！）
高井久美子が姿を現した。淡いピンクのセーターに水色のスカート。髪が無造作に束ねられているところをみると寝坊してしまったのかもしれない。久美子は急ぎ足で改札を抜けると、勝春と菊乃には目もくれずにホームに向かった。それを見届けてから二人も動き出す。いよいよ尾行開始だ！

Ｓ駅から準急で池袋へ。ここでＪＲに乗り換えるはずだ。
電車を降りた久美子はいったん改札口を出てＪＲの乗り場に向かった。
彼女との距離を詰めながら勝春と菊乃がそれに続く。さすがに池袋はこの時間でも人が多い。これから目的地に出かける人と昨夜の疲れを引きずった人が入り混じっている。そんな構内を突っ切って久美子は自動券売機のコーナーに到着。
勝春と菊乃もそこでいったん停止。少し離れた位置で久美子の様子をうかがう。が、彼女はすぐに切符を買おうとしない。料金表を見上げながら何か迷っているように見える……。
「あれ？どうしたんだろ？」と、菊乃が不思議に思っていると、彼女はようやくお金を入れて切符を買った。
それを見て勝春が呟いた。
「そっか……やっぱ男を選んだか」
「何で分かるの？」
「彼女は１６０円のキップを買ったからネ。御茶ノ水までは１９０円。指の位置見れば分かるんだヨ」
切符を手にした久美子はゆっくりと改札に向かって歩き出した。
「サ、オレ達も行くヨ」
「あ、ちょっと待って！　アタシも切符」
「はァ？　パスモ持ってたんじゃないの？」

「さっきので残高４０円になっちゃった」
勝春がげんなりした表情で首を振る。
「マジで？　これから尾行するのにチャージしてないの？　……常識でしょ」
「ごめん」
「早く行っといでヨ！　オレ、先に彼女を追うからサ」
「うん。分かった！」
パスモをチャージしていなかったせいで菊乃は朝から走るハメに……。
自動券売機に小銭を押し込んで切符を買う。そしてすぐにUターン！　まるで借り物競争みたいだ。
何とか間に合って勝春と合流。山手線のホームへ駆け上がる。幸い、電車はまだ来ていない。ピンクのセーターの女の子を探す。
「いたっ！」
菊乃が先に久美子を見つけた。ちょうどそこへ山手線が入ってきた。二人は間一髪、隣の車両に滑り込んだ。

＊　＊　＊

久美子が降りた駅は渋谷だった。キョロキョロと駅の案内板を目で追いながら出口に向かったところを見ると渋谷はあまり降りたことがないらしい。
渋谷駅、大交差点、センター街と、彼女のおぼつかない足取りにあわせて尾行するのは結構、気を使った。何かを探しながら苦労しているようにもみえるし、ブラブラしているだけのようにもみえる。途中で何度も（ホントに待ち合わせしてるのかな？）と、疑問に思ったぐらいだ。
そして、ようやく彼女がファストフード店に入る。そして飲み物を買って二階席へ上がる。菊乃も急いでコーヒーを注文する。ところがふと隣を見ると、勝春がのんきに朝食メニューを選んでいる。

「ちょ、ちょっとカッチー何やってんの？」
「え？　どれにしようか考えてるんだけど」
「ダメでしょ。早くしなきゃ」
「大丈夫ダヨ。逃げやしないから。それに昨日の夜も遅かったからハラ減っちゃって」
まったく緊張感のない勝春をせきたてて菊乃は二階席へ上がった。
二階席は半分ぐらいの入りでピンクの背中はすぐに見つかった。
彼女と向かい合って座っている男の姿が目に入る。ぱっと見、水商売系。シャツの色からして夜の商売まるだし。それに、必要以上に足を広げてだらしない感じ……。
菊乃が小声でたずねる。
「ね。どのへんに座ればいいの？」
「そだネ。うん。あそこが空いてる」
勝春はずんずん奥の方まで歩いていく。そして、大胆にも久美子の斜め後ろの席に陣取ってしまった。
（それって近すぎじゃ……）
あっけにとられて立ち尽くす菊乃に向かって勝春が手招きする。これ以上、放っておくと尾行してることが久美子にばれてしまう。仕方なく菊乃はコソコソと勝春の席に近づいた。そして席に着くなり声を潜めて文句を言った。
「こんな近くじゃバレちゃうでしょ」
「平気だヨ」
勝春は普通に地声で答える。その能天気さは、菊乃の方があせってしまうぐらいだ。しかし、しばらく様子を見る限り、勝春が言うように久美子に気付かれる心配はなさそうに思えた。そこで改めて久美子のお相手を観察する。とはいえ、じっくり観察するまでもなく、どういう職業の人かはすぐ分かる。
勝春が苦笑いを浮かべた。
「アイタタタ……そのまんまダネ」
「だね……仕事上がってそのまんまって感じじゃない？」

「なんだか安っぽいナ」
根元が黒くなりかけた金髪。うそ臭い日焼け。微妙に派手なスーツ。これ見よがしのアクセサリー。それに菊乃にはどうしても納得できないことが一つあった。
（なんか顔がイマイチなんだよねぇ……）
具体的にどこが悪いのかがはっきりしないもどかしさ。菊乃が複雑な顔つきで考え込んでいると勝春が呟いた。
「とりあえず馬っぽい顔してるから「馬面ホスト」ってことにしよう」
「ウマヅラ？　……それも結構ヒドイよね」
菊乃も思わず苦笑いだ。
そんな具合に勝春と菊乃の二人に勝手に命名されていることなどつゆ知らず、馬面ホストは言いたい放題の様子。ところどころ聞き取れない部分はあるものの、彼が一方的にしゃべっているのが筒抜けだ。要は半分が自慢話で残る半分が久美子に対する説教らしい。やれ俺と付き合えるなんてオマエは幸せだとか、この俺様が会ってやってるんだからもっと嬉しそうな顔しろだとか、傍で聞いている菊乃の方がムカムカしてくる内容だ。
（何なのアレ？　イマイチのくせに！）
ここからでは久美子の後姿しか見えない。だから彼女がどんな顔をしているのか分からない。しかし、菊乃でも想像はできる。
（あんな風に言われっぱなしだなんてアタシだったら確実にキレるな）
散々、好き勝手しゃべってから馬面ホストは時計を見た。
「オラ。行くぞ」
その言い方がまた菊乃のシャクに触る。
慌ててテーブルを片付ける久美子を見下ろしながら馬面ホストは「早くしろよっ！」と、大声を出した。店内の視線が集まるが馬面はポケットに手を突っ込んだまま周りを威圧するようにガンを飛ばす。
（ホント、態度悪っ！）

ムカムカするのを抑えきれない菊乃に勝春が注意する。
「菊ちゃん。冷静にネ……」
そして二人は、馬面と久美子が階段に降りたのを見計らってさらに尾行を続けることにした。

＊　＊　＊

朝の渋谷をゆうゆうと歩く馬面ホスト。それに遅れて久美子がとぼとぼとついていく。
やがて馬面が向かったのは円町のホテル街だった。次第に人通りが少なくなり、やがてそれらしきラブホテルの看板が目に付くようになる。そのせいで尾行している菊乃の方がドキドキしてきた。
（この辺ってやっぱ……ウソでしょ。こんな朝っぱらから）
このまま久美子は……と想像しただけで菊乃の頭がクラクラしてくる。何かの間違いであって欲しいという菊乃の希望に反して、馬面は一軒のラブホテルに入って行く。
一瞬、立ち止まる久美子。菊乃には彼女の背中が震えているように見えた。
馬面が振り返って「おいっ！」と声を荒げる。その声にビクッとして久美子が思い切ったように後に続く。
（とうとう入っちゃった……）
半ば茫然として菊乃が立ち尽くしていると、今度は勝春が菊乃の背中をポンと押した。
「サ。オレ達も入るよ」
「え？」
勝春は大真面目な顔で菊乃の腰に手を回してラブホテルの入り口に向かおうとする。
「ちょ、ちょっとカッチー！」
抵抗しようとするが勝春の腕は意外に力強い。
（なんで？　なんでこうなっちゃうワケ？）

パニックになりそうな菊乃の耳元で勝春が囁く。
「大丈夫だヨ。潜入するだけだから」
（ホントに信用していいのかな……）
半信半疑ながら菊乃はそれに従うしかなかった。
勝春と菊乃が建物の中に入ると馬面と久美子はまだ受付に居た。馬面ホストが部屋を選ぶパネルに向かって毒づいている。
「チッ！　なんだよ。全然、空いてねぇじゃねーか」
その傍でうつむいている久美子。薄暗い中で彼女の表情はよく見えない。が、泣いているようにも見える。それを見て勝春が呟く。
「おやおや。これはマズイよね」
物珍しそうにキョロキョロしていた菊乃が勝春の呟きに「？」と、思った瞬間、勝春は唐突に彼女の名を呼んだ。
「やあ。高井さん！」
はっとして久美子がこちらを見た。馬面も「は？」とガンを飛ばしてくる。
久美子は勝春の顔を見て息を飲んだ。そして建物の外へ向かって急に駆け出した。それを追いかける馬面がすぐに追いついて久美子の腕を掴む。
「てめっ、今さら止めるのかよっ！」
「やっぱり嫌！」
という押し問答が入り口の所で繰り広げられる。
それを見てオロオロする菊乃。それとは対照的に勝春は落ち着き払っている。
「やめなヨ！」
勝春の一言で馬面ホストの動きがピタッと止まった。そして、ゆっくりとこちらに顔を向けながらすごんだ。
「何だオマエら？」
勝春は腕組みしながらフッと笑う。
「やめときなヨ。彼女、嫌がってるじゃないか」
勝春の言葉にキレた馬面が「このクソガキッ！」と、いきなり勝春

に殴りかかってきた。
（カッチー！）
菊乃がヤバイと思うやいなや勝春は腕組みしたまま軽くそれをスルーした。
パンチが空を切った馬面は勢いあまって体勢を崩す。
「や、野郎！」と、馬面はさらに怒り狂って次の攻撃を仕掛けてくる。
とても見ていられないと菊乃が思ったのもつかの間、今度も勝春は余裕で攻撃を交わす。パンチが当たらなくてイライラした馬面が勝春に掴みかかろうと手を伸ばす。が、すっと身を沈めた勝春がその腕をキャッチして自らの脇の下に挟む。と同時にクルッとダンスみたいに回転して馬面の腕をねじり上げた。
「いでっ」と、馬面ホストが悲鳴をあげる。
ニヤリと笑う勝春。その笑い方はいつもの勝春ではない！　まるで氷のような冷たい微笑……。
勝春は腕をひねりあげたまま冷たく言い放った。
「……あんた。自分が思ってるほどイケてないから」
勝春はそう言ってから馬面の腕を解放してやり、ドンと突き飛ばした。
「ク……このクソがっ」
そんな捨て台詞を残して馬面はとっとと退散した。
それを見届けてから勝春が携帯を取り出した。
「あ、大志？　今、菊ちゃんと渋谷なんだけどネ。Ｇ４の追跡を頼むヨ」
菊乃が不思議そうに勝春の横顔を眺める。
「Ｇ４って何？」
「ああ。ＧＰＳのことだヨ。奴の上着に潜り込ませといたんだ」
そう言って勝春はポケットから携帯のストラップについているような小さなヌイグルミを幾つか取り出した。
「これだヨ。これで馬面ホストの動きがＰＣで追跡できるんだ」

「へえ……小っちゃいんだね」
「あとは大志に任せとけば大丈夫サ」
感心する一方で菊乃の中でますます疑惑が深まる。
（そんな物まで用意してるなんて……いったい何なの？）
普通の高校生がそんなものを持っているはずがない。それにその妙に手馴れた感じ……。
勝春がふと思い出したように久美子の様子を伺う。久美子は両手で顔を覆い、肩を振るわせながら立ち尽くしていた。勝春はすっと彼女に近寄りその腰に手を回す。そして彼女の耳元で囁いた。
「高井さん。良かったら話を聞くヨ」
小さく頷く久美子を勝春はごく自然な流れでエスコートする。久美子がゆっくりと歩きだすのを支えながら勝春が振り返って（ついてきなよ）といった風に菊乃を促した。

＊　＊　＊

落ち着いた雰囲気のカフェで久美子と勝春が対面している。
通路を隔てた隣のテーブルでそれを見守る菊乃は少し心配になった。
（カッチー、どうする気なんだろ？）
はじめ、久美子は勝春の問いかけに首を振ったり小さくうなずいたりするだけだった。が、しばらくするとポツリポツリと口を開くようになり、やがて普通に活き活きと語り始めた。菊乃にはその内容を聞き取ることはできなかったが、久美子の話にだんだん熱がこもってくるのは分かった。そして、はっと気がついた。
（カッチーって……ひょっとして聞き上手？）
勝春の相槌は完璧だった。時に表情を曇らせ、時に笑い、場合によっては怒りの表情を浮かべて同意する。まるで久美子の感情を鏡に映し出すように勝春の表情が変化する。
二人のやりとりを音声抜きで見ているとよく分かる。勝春の仕草や相槌が、久美子のしゃべりを上手にあおっているのだ。

（さっきまであんなに泣いてたのに……でも、もしかしてこれがカッチーの才能？）
勝春と久美子に面識はほとんど無い。しかしこの状況で彼女は笑顔さえみせるようになっている。
（誰とでも仲良くなれるってこと？　ていうか相手の心を開かせる……それがカッチーの特技……）
菊乃は改めて考える。
（カズ君の頭脳。ゴッキーの戦闘力。で、カッチーの能力……。なんかバランス取れてるような気がする）
そう考えてみると転校生3人組は「最強ユニット」といえる。ただ、そんな彼らがなぜ自分たちの学校に転入してきたのか？　そして妙な事件を調べて解決しようとしているのか？
勝春の横顔を眺めながら菊乃はそんなことを考えていた。

8　堀先輩を直撃

月曜の昼休み。カズは堀達郎を無人の美術室に呼び出していた。
堀達郎は怪訝そうな顔つきで尋ねた。
「で、あのメモはどういう意味なんだ？」
「……文面の通りですよ。先輩」と、カズが冷静に答える。
「僕が脅されてるっていうのか？　何の根拠があって？　だいたい君達は何なんだ？」
明らかに堀はカズ達を警戒している。
美穂子は単に付き添いできただけなのだが、さっきからハラハラしっぱなしだ。2対1だし堀も強そうには見えないからたぶん大丈夫とは思うものの今回は大志が居ない。
「根拠、ですか」と、カズが呟いた。そして生徒の作品を指でなぞりながら続ける。
「脅している側がそう言ってるんですがね」

「なっ……そんな、誰がそんなことを」
「ミドリさんですよ」
「え？　そんなの聞いてない」と、美穂子が堀より先に反応してしまった。
妙な沈黙……。
トホホといった風にカズが首を振りながら気を取り直して問う。
「重複受験の件、ですよね。ミドリさんが先輩を脅しているネタというのは」
カズの言葉に堀の頬がピクリと反応した。それを見てカズが言う。
「黙っているってことは当たりですか」
「ね、ね、カズ君。チョーフク受験って何？」
「……ゴメン森野さん。ちょっと黙っててくれるかな。話の流れが……」
「だって」と、涙ぐむ美穂子。
今にも大泣きしそうなそのリアクションにカズがやれやれといった風に解説する。
「つまり、学校側が進学実績をあげる為に受験料を立て替えてまで優秀な生徒を何校も受験させるってことだよ」
「それっていけないことなの？」
「いや。法律に違反することじゃないけど学校が積極的にやるのはルール違反だと思う。学校にとっては進学実績をあげて宣伝になるんだろうけど一人で何校も受験させられる方は大変だよ」
カズと美穂子のやりとりを聞いていた堀が口を挟む。
「その分、本当にその大学に行きたい人が落ちてしまう訳だしね」
「先輩も分かっているじゃないですか。特進クラスはここ数年その方法で進学実績をあげてきたんですよね？」
「ああ。そういう事だ」
カズは試すような口調で堀を問い詰める。
「じゃあ今年は先輩と高井久美子さんがその役目を？」
「そういうことになるね」

淡々と答える堀の態度には何ら悪びれたところが無い。カズは少しカチンときて意地悪な質問をした。
「やっぱり山吹先生には逆らえませんか。その一方でミドリさんには重複受験を止めろと脅されている。つまり板ばさみですよね。ひょっとして先輩の成績が落ちたのはそれが原因なのでは？」
カズの質問に対して堀はふっと笑いながら言った。
「君はなかなか鋭い。当たりだよ。君の指摘した通りさ。でも、成績が落ちたのはそれが理由じゃない」
「え？」と、カズが目を丸くする。
堀は遠くを見るような目つきで続ける。
「あのミドリって子。彼女みたいなタイプの子が僕に近づいてくるなんて……何か変だなって分かってたさ。それで、逆に彼女の目的が何なのか暴いてやろうと思ったんだ」
さすがに堀もバカではない。ミドリが自分に接近してきたには理由があるに違いないとすぐに気付いたらしい。それでカズは理解した。
「じゃあ先輩は彼女の言うことをきくフリをしてわざと……」
「それもある。山吹先生のやり方に反発したいという気持ちもあった。けど、僕の成績が急に悪くなった本当の理由はね……」
そのあと堀達郎の語った本当の理由を聞いてカズの中で疑問が一気に氷解した。これで勝春の情報と繋がる。そうすれば事件は解決したも同然だ。
カズは堀に向かってぺこりと一礼した。
「先輩。ボク、あなたのことを誤解してました」
それを見てはじめて堀が笑顔をみせた。カズも思わず笑顔になる。
一人だけ仲間はずれになってしまった美穂子がむくれる。
「え～、全然っ意味不明なんですけど！」
堀の口から真相を聞いても美穂子には事件の全体像が全くみえていなかった。だからその反応も仕方がない。
そんな美穂子をなだめながらカズは、どうやってこの事件の幕引きをするか考え始めていた。

9　悩み解消？

放課後に事件は解決する、とカズは宣言した。
それを信じて菊乃と美穂子は六時間目が終わってから約束の場所に向かう。とはいえ正直、菊乃は半信半疑だった。
（カッチーと久美子さんが昨日話し込んでたのは知ってるけど……なんか展開、早っ）
ひょっとしたらまた菊乃たちの知らないところで3人組はこっそり調査をしていたとも考えられる。
「ね、美穂子。そっちは何か展開あった？」
「ん～そうね。カズ君はなんか分かっちゃったみたいだけど」
「そうなの？　じゃ、堀先輩と話できたんだ」
「うん。でもアタシはさっぱり分かんなかった」
やはり美穂子も菊乃と同じような状況らしい。彼らと一緒に行動していても、ついていけないのだ。美穂子はもう諦めているらしいが菊乃にはそれがちょっとくやしかった。
菊乃と美穂子がゆっくり階段を登っていると後ろから声を掛けられた。
「おい。何チンタラしてんだよ」
立ち止まって振り返ると大志が大またで近づいてくるのが目に入った。
大志が階段を上がりながら、ちょっと小ばかにしたような表情をみせた。
「お前らも一応、結果を知りたいだろう？　だったら遅れるなよ」
それを聞いて菊乃が口を尖らせる。
「も、もちろん。知りたいわよ。仲間だもん」
ポケットに手を突っ込んだまま大志がフンと鼻で笑う。
「仲間……ね」

その後に何か言いたそうな感じだったので、菊乃がけん制する。
「仲間でしょ。だから結果を聞く権利があるもん！」
「権利って……お前なぁ」と、言いかけた大志の背後からバタバタと慌しく階段を駆け上がる足音がした。と、思ったら大志が「はぅっ」と、奇声を上げた。そしてみるみるうちに表情を引きつらせる。
「なにやってんの？」と、菊乃が呆れる。
「あれっ？」と、美穂子がきょとんとする。
見ると大志の背後に男子がひとり立っている。子供のスキー板みたいなものを小脇に抱えているみたいだが……。
「て、てめぇ……」と、大志が怒りの表情でゆっくり振り返る。
美穂子が「あ、フンドシ研究会の人！」と言うので菊乃も思い出した。メガネをかけたタヌキのような少年……それは「目黒君」だった。
（なんでゴッキー怒ってんだろ？）
疑問に思って菊乃がよく観察してみる。すると……。
大志のお尻あたりに目黒が抱えていた真っ黒い板の先っぽがめり込んでいる。
「ひ、人のケツに何を……」
怒りを押し殺しながら大志が背筋を伸ばす。目黒は大志に凄まれて階段を後ずさりする。なおも大志が目黒に迫る。
「お前……何だ？　それは？　そんな汚ない物を教室に持ち込むな！」
「き、汚い？」
と、はじめて目黒が口を開いた。そしてワナワナと肩を震わせながら逆切れした。
「こ、これはだね！　卒塔婆（そとば）といってだね。お墓の後ろに立てるものなんだよっ！　知らないの？」
「は？　だからどうした？」
「た、たった今、僕が掘り出したんだ。しかも江戸時代の物なんだぞ！　こんな貴重な物を、汚いだなんて！　な、な、なめないで頂

きたいっ！」
（あ、キレるな）と、菊乃が思った通り大志は強張った顔つきのまま、無言ですっと右足を自らの頭の高さまで振り上げた。そこでいったん停止。そして一気に目黒の頭に向かって「かかと」を振り下ろす。
目黒はとっさに手にしていた板を盾にする。次の瞬間、バキッ！という景気の良い音がして板が粉々に砕け散った。
大志はクルッと目黒に背を向けると何事もなかったかのように菊乃たちの横をすり抜け、スタスタと階段を上がっていく。それを見て美穂子が声をあげる。
「あ、後藤君、お尻！」
その言葉に大志が「？」と、自らのズボンを眺める。確かに明るいグレーのズボンに茶色い泥がべっとり付いている。
「何じゃこりゃぁ？！」
クールに振舞っていた大志がお尻の汚れにうろたえる姿を見て菊乃は思わずふいてしまった。
「マジかよ！　冗談じゃねえぞ。クソッ！　着替えるしか……」
大志は深いため息をつくと急に階段を駆け下り始めた。途中で自分が粉砕した木片を踏みつけていく。見ると目黒が妙なうめき声を出しながら木片を拾い集めている。
「……なんか可愛そうだね」と、美穂子は目黒に同情するが謝らない方も悪い。
この妙な展開に半ばあきれながら菊乃は呟いた。
「まあ、頭を砕かれるよりはマシなんじゃない」
大志が着替えに帰ってしまったので菊乃と美穂子は仕方なく二人で屋上へと向かった。

＊　＊　＊

屋上では勝春と久美子そしてカズが待っていた。そこに菊乃と美穂

子が加わり最後に遅れて堀達郎が現れた。
大志が居ないことに勝春が気がついた。
「アレ？　大志は？」
それを聞いて菊乃が首をすくめる。
「着替えするんだって」
「着替え？　何でまた……」と、カズがまゆをひそめる。
「コトバがお尻に刺さったんだって」と、美穂子が答える。
カズが一瞬、想像する素振りをみせたが考え直して言った。
「……なんか意味不明だけど、ま、いっか。先輩達を待たせるわけにもいかないし」
これからカズが何をしようとしているのかが分からず久美子は勝春のそばで不安げな表情を浮かべている。一方の堀達郎は腕組みしながら冷静に振舞っている。
ひと呼吸置いてカズが口火を切る。
「すみません。先輩たちをこんな所に呼び出してしまって。実は、お話しておきたいことがありまして……」
堀があまり興味の無さそうな顔つきで口を挟む。
「そんなことはどうでもいいよ。それより早く済ませてもらえないかな」
堀に促されてカズが大きく頷く。
「わかりました。ではなるべく簡潔に。実は、ボク達、ある人物から最近、先輩たちの成績が急激に落ち込んでいる原因を探ってくれと依頼されたんです」
「な、何の為に……」と、久美子がか細い声をあげる。
「特進クラスのエースである先輩たちの成績が落ちれば学校の評判も落ちるからです。つまり何者かが意図的に先輩たちの勉強を邪魔しようとしている、と依頼人は考えたわけです」
それを聞いて堀が思わず大きな声を出す。
「おいおい。何だよそれ？　って……まさか！」
「さすが堀先輩。察しがいいですね」

カズの言葉にさすがの堀も絶句する。そして彼はしばらく考え込んでから吐き捨てるように言った。
「あの女もそうなのか？　しかし、ホントにそんな馬鹿なことをする奴がいるなんて……」
意味が分からず茫然とする久美子。それをチラリと見やりながらカズが説明を続ける。
「その何者かは堀先輩には「ミドリ」という女の人を、高井先輩には「アキラ」という男性を近づけて勉強の邪魔をさせた。そういうことだったんです」
「そんな……」と、久美子が泣きそうな顔になる。
それを見て堀が厳しい表情でたずねる。
「高井……まさか、君……その男に」
「大丈夫ダヨ」と、勝春が久美子に代わって答える。
きょとんとする堀を安心させるように勝春が久美子の気持ちを代弁した。
「彼女はネ、堀さんが他の女の子と付き合ってるって思い込んでたんダヨ。それで悩んでる時に「アキラ」とかいう馬面のホストが近づいてきたんだ。でも大丈夫。彼女はあんな男に惚れるような子じゃないヨ」
明らかに堀がほっとするような表情をみせた。その様子を見守りながらカズが言う。
「堀先輩本人の口から成績が落ちた理由を聞いて安心しました。だって勝春の言う通り高井先輩は……」
「待って！」と、久美子がカズの言葉を遮る。
彼女は顔を真っ赤にしながら少しモジモジする素振りをみせた。そして意を決したように顔を上げると堀達郎の顔を見つめながら告白した。
「ゴメンなさい……私、本当は堀君に心配して欲しかったの……だからわざとテストで手を抜いたりアキラさんとデートしたりしてたの」

「あ……」と、堀も顔を赤らめる。そしてややドギマギしながらこちらも同じように告白する。
「ごめん。僕も同じ……その……君の成績が落ちてるのを知って、わざと点を悪くしてたんだ」
「え？　堀君も……わざとなの？」
「そういうこと。あのさ……覚えてる？　一年の時に志望校同じだねって話したの」
「うん。覚えてるよ」
「K大の文学部だよね。一緒にいけたらいいなって」
「そうだね。あの頃はよく文学の話とかで盛り上がったよね」
「ああ。だからさ。もう、山吹先生には悪いけどK大の文学部だけ合格できりゃいいやって思ったんだ。君と二人で」
「……堀君」
久美子と堀は完全に二人の世界に入っている。何のことはない。結局、この二人の成績が落ちた本当の理由はお互いの想いがすれ違っただけの話だった。
盛り上がっていた堀と久美子がカズたちの存在に気付いて照れた。
「あ、ありがとう。君らのおかげだよ」
久美子も堀の隣りで小さくお辞儀をする。
カズが菊乃たちを促す。
「さ、これで事件は解決。もう二人だけにしてあげようよ」
勝春も大あくびをしながら賛成する。
「そうそう。オレたちはもう用済みだからネ」
菊乃が勝春の顔を見て呆れる。
「どうでもいいけどカッチー、またあくびしてる」
すると勝春は「ま、色々あってネ」と、意味深な笑みを浮かべた。
こうして大志を除く四人は堀先輩と高井久美子を残して屋上を後にした。

＊　＊　＊

四人並んで校門に向かいながら菊乃が呟いた。
「でも良かったよねぇ。一件落着で」
「……いや」と、カズが呟く。
「え？　何でよ」と、いぶかる菊乃に向かってカズが厳しい表情で言った。
「かえってはっきりしたよ。やはり何者かが悪意を持ってこの学校を狙っているって事が」
菊乃と美穂子がはっとして顔を見合わせる。
「だネ。まだ「ミドリ」と「アキラ」をけしかけた黒幕が見つかってないんだからネ」
「そう。勝春の言う通り、これで終わったわけじゃないよ」
カズの言葉を聞いて「楽勝ムード」が一転、重苦しい雰囲気になってしまった。
校門を出て歩きながら四人はそれぞれに次の展開に思いを馳せていた。と、その時、四人の進路に何者かが立ち塞がった。
「よお。イケメン君」
はっとして四人同時に声の主を見る。その顔を見て菊乃が驚いた。
「き、昨日の！」
待ち伏せしていたのは昨日、久美子を無理やりラブホテルに連れ込もうとして勝春にボコられた……。
（馬面ホストだ～）
菊乃は恐る恐る横目で勝春の顔を見上げた。しかし、勝春は平気な顔。それどころかまたあくびをしようとしている。
馬面ホストは勝春をなめまわすように見てキモい猫なで声を出す。
「昨日はどうも～いや～大人としてきっちりお礼をしとかないとねぇ」
それを聞いて勝春がジロリと鋭い一瞥をくれる。
「……そっちから来てくれるなんてネ。手間が省けたヨ」
「はぁ？　……このガキッ！」

馬面ホストが勝春の襟を掴もうと一歩前に出た瞬間、路上に駐車してあったワンボックスカーから三人の男たちがいきなり降りてきた。カズが菊乃と美穂子に「下がって！」と指示する。
はじめての体験に菊乃はパニックになる。
（こ、こ、これがいわゆるお礼参りってヤツ？　ヤバイよ！　２対４だよ……）
相手は計四人。見たところ皆、ダークスーツを着ているところからみて馬面の仕事仲間なのだろう。勝春はともかくカズは大丈夫なのか菊乃は心配になった。美穂子はオロオロしながら周りを見回すが校庭の塀と通りに挟まれたこの場所は人通りがまったく無い。
「くぉらぁ！」と、奇声を上げながら馬面が勝春に殴りかかった。
それを合図に残る三人が加勢する。
カズは菊乃と美穂子を守るように一応ボクシング・スタイルで構える。が、すぐにホスト軍団の二人に捕まってもみくちゃにされてしまう。明らかに形勢は不利だ。
菊乃は焦った。助けを呼ぶにも声が出ない。こんな時こそ大志の出番なのだが……。
（なんでこんな肝心なときにいないのよぅっ！）
勝春は馬面のパンチをひらりひらりと交わすがもう一人に動きを封じられてしまう。カズは簡単に転がされて二人がかりでケリを入れられる。
「やめてぇ……」と、美穂子が悲鳴をあげようとしたその時……。
視界の端から黒い物体が飛んできた。
その物体は地面に平行な形で真横に飛び、カズにケリを入れていたホストの顔面にぶつかった！
ゴッ！　という鈍い音がしてホストの頭が変な風に曲がる。
（ゴッキー！）
菊乃の目が輝く。
両足のとび蹴りをホストの顔面にくらわせた大志は、すっと地面に着地し立ち上がりながら、なおも回し蹴りをもう一方のホストにお

見舞いする。
きれいな弧を描いて大志の左足がホストの顔面を狩る。まさに一撃！
大志がすっくと立ち上がった代わりにカズを攻めていた二人が地面に転がっていた。
勝春を羽交い絞めにしていたホストがそれに気付く。そして目の色を変えて「て、てめぇ～！」と、叫びながら大志に突進する。
それを呼び込むように大志が足を高く振り上げる。
（あ、あの技！）と、菊乃が思い出した瞬間、振り下ろされた大志のカカトが突進してきたホストの脳天に炸裂した。
前のめりに倒れるホストを見下ろす大志は息ひとつ乱していない。
大志の足元に転がる仲間たちを見て馬面ホストが唖然とする。そしてヤケクソ気味に「くぉらぁ！」と、大志に向かってダッシュする。
それに合わせるように大志の身体がすっと馬面の方へ寄った。そして空中に身体を投げ出すような形でフッと沈んだと思いきや、頭を下にして側転し、まるで扇子をバッと開いた時のような軌跡を描いてその長い足を馬面にめり込ませた。
見たこともない動きに菊乃はすっかり見とれてしまった。
（何……今のキックは？）
いつの間にか立ち上がっていたカズが「浴びせ蹴りだ！」と、興奮した。
馬面が倒れたところで戦いはあっさり終了。結局、大志が一人一発、合計四発の蹴りでホスト軍団を文字通り蹴散らしてしまった。
あっという間の出来事に菊乃と美穂子は感動すらおぼえた。
大志に近づきながら思わず菊乃が尋ねる。
「ゴッキー超凄くない？　圧勝じゃん？」
「……当然」と、何事もなかったかのように大志がポンポンと制服をはたく。
「ね、でもゴッキーって何でいつもキックばかりなの？」
「……美学」
大志の回答に菊乃は口をあんぐり。

（格好良いんだけど……美学？　何ソレ……）
勝春が大志に礼を言う。
「助かったヨ。さすがダネ！」
カズがお腹のあたりをさすりながら顔をしかめる。
「遅いよ。ていうかどこ行ってたんだよ」
「すまん。ズボンを履き替えていた」
カズがため息混じりに文句を言う。
「やれやれ。でも何でここが分かったんだい？」
「ＧＰＳ。昨日のターゲットがこんな近くに居るのをたまたま発見したからな」
それを聞いて勝春がきょとんとする。
「あ、そっか……ホントだ。こいつ。昨日と同じスーツ着てるヨ！」
そんな三人のやりとりを眺めながら菊乃は、ほっと胸をなでおろしていた。その一方で、さっきから胸の鼓動が止まらない。その原因ははっきりしていた。それは大志が登場してから始まった。
（やば……もしかしてアタシ……）
既に長くなりはじめた三人の長い影。その先にある一番背の高いクールな横顔を見つめながら菊乃は加速していく確かな想いを感じていた。

１０　結果報告

翌日、朝の校長室。
特進クラスの件についてカズの口から簡単に報告をする。
「結局、堀先輩と高井先輩に近づいた連中はただの雇われでした」
それを聞いて校長が身を乗り出す。
「雇われ、ということは何者かがウラにいたということかね？」
カズが頷く。
「そうです。しかし、出来損ないのホストを尋問したんですが肝心

の黒幕が割れませんでした。ミドリという女性も同じです」
勝春があくびをかみ殺して説明する。
「疲れましたヨ。連日連夜のお店通いで。ま、それでミドリちゃんとは仲良くなったんですけど、残念ながら彼女からは何も出てきませんでしたヨ」
カズが校長の顔を眺めながら心配そうに言った。
「しかし、何者かがこの学園を狙っているということははっきりしています。校長。何かあったらすぐに知らせて下さい」
「ああ。分かった。すぐに知らせるとしよう。頼りにしておるよ。ミステリー・ボーイ」
それを聞いて勝春がやれやれといった風に首を振った。
「だから……ボーイズですヨ。ボーイズ。複数形のSをお忘れなく」
「それは失礼した」
「それと。これ領収書ですヨ」
「なんの領収書かね？」
「勿論。潜入捜査のですヨ」
そう言って勝春に渡された領収書の束をみて校長は目を白黒させた。
「こ、これは……うーむ。高いな……」
大志が横目で勝春を睨む。
「調子に乗りすぎだ」
大志の突っ込みに勝春が「へへっ」と、頭をかく。そして大きなあくびをひとつ。
こうしてとりあえずこの事件は解決した。しかし、彼らの知らぬところで早くも次なる事件が静かに進行しつつあったのだ……。

第三話　加美村狩り事件

1　新たなる事件？

なぜか大志は食べる時の姿勢がいい。背筋をピンと伸ばし優雅にお箸を操りながら厳かに黙々と食す。まるで茶道部の部員がお茶菓子を食べる時みたいに大志はコロッケ定食を食べる。

「ゴッキーってさ。何でいつもコロッケ定食なの？」

菊乃が聞いても大志は返事をしない。食べている時はほとんどしゃべらないのだ。

仕方なく菊乃が話題を変える。

「カッチーもカズ君も夕飯とかどうしてんの？」

勝春がナポリタンのピーマンをきれいに避けながら答える。

「ん～まぁ適当だよネ。何？　たまには菊ちゃんが作りに来てくれるとか？」

「あ、アタシはダメだよ。料理とかメチャ下手だし……」

そこで美穂子がカズにアピールする。

「ね。カズ君は何が好き？　私、料理は得意なんだよ」

しかし、肝心のカズは隣席の会話に気をとられていて美穂子の質問には生返事だ。

「……テリヤキ・バーガーかなぁ」

それを聞いて美穂子は複雑な顔をする。料理の腕をふるおうにもさすがにテリヤキ・バーガーでは難しい。

カズはしきりに周りのテーブルを気にしている。菊乃が不思議に思って尋ねる。

「どうかしたの？　さっきから周りばっか気にしてるみたいだけど」

「ん？　ああ、ちょっとね」

そう言ってカズは（ちょっと聞いてみなよ）といった風に視線を隣のテーブルに移した。そして菊乃たちも隣の様子を伺う。隣席は男

子の2人組。たぶん三年生だ。
「……マジかよ。今井もやられたのかよ」
「これでウチのクラスだけで四人だぜ」
「まじかよ！　それ酷くね？」
「だろ？　他のクラスも結構やられてるってウワサだし」
「で、金とか取られたの？」
「二千円ぐらいだってさ。小銭まで持ってかれたらしい」
「せこっ！　でも、そんなんでよく許してくれたよな」
「それでも殴られなかったってよ。案外、いいヤツなのかな？」
そんなやり取りを聞いて菊乃が呆れる。
（カツあげした人が「いいヤツ」って……バカじゃないの？）
食べ終わった大志が手を合わせてから軽く一礼をする。そして一言。
「また何かはじまったようだな」
大志はちらりと隣をながめてからカズと勝春に目配せした。勝春とカズが分かってるといった風に頷く。
「みたいだネ。なんだか事件の匂いがするナ」
「そろそろボクらにお呼びがかかるかもね」
ちょうどその時、校内放送が入った。
〔……以下の三名は至急、職員室まで来てください。2年3組タガワカツハル君、イワタカズナリ君、ゴトウタムシ君……〕
それを聞いて菊乃が気付く。
「あれ？　今、後藤タムシ君とか言ってなかった？」
カズが同意する。
「うん。ボクもそう聞こえた」
皆の視線が大志に集中する。それに気付いた大志が居心地悪そうに咳払いをした。
「そ、そんなバカな。聞き間違いだろう」
そこでもう一度放送が繰り返される。
〔繰り返します。以下の三名は……〕
今度は集中して聞いてみる。

〔……カズナリ君、ゴトウタムシ君〕
「やっぱり～！」と、菊乃が大志を冷やかす。
勝春も「それにしてもタムシは酷いよネ」と、苦笑いだ。
カズは笑いを押し殺して大志の顔色を伺う。
美穂子が気の毒そうな顔をみせる。
何とも言えない雰囲気に対して大志が声を震わせる。
「タ、タムシなどという者は断じて居ないっ！」
カズがゆっくり立ち上がって「さ、行くよ」と、二人を促す。
それを合図に勝春が「ウン」と、力強く頷く。
しかし、大志は立ち上がるどころか腕組みしたままじっと動かない。
それを見てカズが呆れる。
「さ、大志も行くよ。気持ちは分かるけどさ」
勝春は大志の肩のあたりを肘で軽く押す。
「早く行こうヨ。一応、緊急みたいだしサ」
大志は一点を見据えたまま呟く。
「後藤タムシなどという者は居ない。断じて……」
ふてくされる大志を見て菊乃は（そんなことでスネちゃうなんて可愛いトコあるじゃない）なんてことを考えていた。
結局、カズと勝春に説得されて大志も職員室に向かうことになった。
おそらく、校長室で今回の事件について正式な依頼があるに違いない。
呼び出しをくらった3人組よりも菊乃は静かに闘志を燃やしていた。
（よし。今度こそアタシも活躍しなくちゃ！）

＊　＊　＊

部屋に入ってきた三人の顔を見るなり校長は深刻な顔つきで話を切り出した。
「実は大変な事態になっているのだ」
すかさずカズが尋ねる。

「この学校の生徒が暴行を受けているらしいですね」
「むう。さすがに情報が早いな」
「もうウワサになってますヨ。早いトコ手を打たないとまずいですネ」
「ああ。その通りだ。実にここ４日間で１１件も似たような事件が起きておる」
それを聞いてカズが顔をしかめる。
「……多いですね。しかも報告があっただけで１１件。てことは実際にはもっと多いってことでしょうね」
「かもしれんな。いずれにせよ異常な数字だ。なぜうちの生徒達が……訳が分からんよ」
大志が頭をかきながら尋ねる。
「で、警察には？」
「勿論、届け出た。警察も首を捻っておったよ。他の学校ではこんなことはないそうだ」
大志の目つきが鋭くなる。
「つまり、狙い撃ちってことか……」
カズが校長に心当たりを尋ねる。
「この学校が特に狙われる理由は？　例えば何かトラブルがあったとか？」
校長は首を振る。
「いいや。それは無いと思う」
勝春が髪をかき上げながら呟く。
「てことはやっぱり何者かが意図的にこの学校を狙ってるってことですよネ」
「むう。そうとしか考えられん。悪いが早速、君たちに対応を頼みたい」
カズがゆっくり頷く。
「分かりました。では、報告のあった１１件。資料を頂けますか？」
「ああ。コピーを用意してある」

校長に手渡された資料をパラパラめくりながらカズが呻いた。
「これは……幸い大ケガをした生徒はいないみたいですけど……殴られたり蹴られたりナイフで脅されたり……結構、悪質ですね」
「うむ。しかも相手は皆どこかよその生徒らしいのだ」
勝春が横から資料を覗き込む。
「学校同士の抗争って訳でもなさそうですネ」
抗争と聞いて大志が反応する。
「フン。漫画じゃあるまいし。今時、流行らんだろ。そんなもん」
カズがふぅと一息ついてから校長の顔をじっと見た。
「ある意味、本当の敵がいよいよ本格的に攻めてきたってところですかね。ボクたちも気を引き締めてかからないと」
「うむ。そうだな。気をつけてくれたまえよ。相手は暴力的な手段に出ている」
校長の警告を聞いて大志がニヤリと笑う。
「望むところだ」
最後にカズがまとめる。
「今回のミッションは加美村学園を狙った同時多発テロの犯人を捕まえること。で、よろしいですね？」
「ああ。その通りだ。頼んだぞ。ミステリー……」
「ボーイズ」と、勝春が校長の言葉に先回りする。
「そ、そうだったな。また複数形のSを付け忘れるところだった。申し訳ない」
こうして早くも三つ目の事件が発生した。休むまもなくミステリー・ボーイズの任務がスタートする……。

＊　＊　＊

校長の面談は昼休みだけでは時間が足りなかったようで3人組は五時間目の途中で教室に戻ってきた。
五時間目が終わるのを待ち構えていたように菊乃がカズの席ににじ

り寄って質問を浴びせる。
「ね、ね。今度はどういう依頼だったの？　今度はアタシたちもガンバルからさ！」
張り切る菊乃の様子を見てカズが申し訳無さそうに切り出す。
「それが……今回ばかりは一緒に調査ってわけにはいかないんだ」
「え？　何でよ！」と、菊乃が文句を言う。
菊乃の反応に困ったカズが頭をかく。
「それが……今回の事件はちょっと危険なんだよね。だから藤村さんと森野さんに協力してもらうわけには……」
カズの説明に菊乃がむくれる。
「そんなの無いっ！　アタシはヤダ！」
そこへ勝春が近づいてきて菊乃を諭す。
「あのネ、菊ちゃん。マジでヤバイんだヨ。現に暴行を受けた生徒が何人もいるんだ。だから君達女の子を危険な目にあわせるわけにはいかないんだヨ」
それでも菊乃は諦めない。
「だって協力するだけならできるじゃん！　何でよ？　何でダメなの？」
それまで黙っていた大志が「わめくな。バカもの」と、菊乃を睨んだ。
その一言で菊乃は冷静さを取り戻した。確かにヒートアップしすぎていたようだ。
追い討ちをかけるように大志が言う。
「今回の任務にお前らは必要ないんだ」
大志の低い声が菊乃の胸に突き刺さる。何か言い返そうとして菊乃は言葉を飲み込んだ。教室に居た何人かが菊乃たちのやりとりを遠巻きに見ているのに気付いたからだ。
大志は腕組みしたまま、はっきりと言う。
「つまり、ありていに言うと『足手まとい』だ」
菊乃の顔が歪む。

（何もそこまで言わなくても……）
悔しさがこみ上げてきた。
痛い空気が張り詰める中、ふいに美穂子が口を開いた。
「ね。『ありてい』ってなあに？」
途端に緊張感がゆるむ。大志が、ガクッとうなだれて「辞書を引け辞書を」と、呆れる。おかげで菊乃は何とか涙を堪えることができた。もし、あのままの雰囲気だったら確実に泣いていた……。
カズが菊乃を気遣ってくれた。
「また協力してもらいたい時は力を貸してもらうからさ……」
勝春もいつもの笑顔で慰めてくれる。
「そうそう。もしもの時はヨロシク頼むヨ。だから気にしないでネ」
二人が菊乃を気遣ってフォローするのを横目で見ながら大志だけは仏頂面のままだ。
大志のそんな態度を見て菊乃は思った。
（絶対に見返してやる……）
それは心に秘めた静かなる決心だった。

＊　＊　＊

放課後、３人組は真っ直ぐ部屋に戻って作戦会議に入った。
まずは大志が地図を広げる。
「とりあえず発生地点をここに記録しよう」
カズと勝春が手分けして校長に貰った資料に記された事件発生現場に赤いシールを貼り付けていく。その様子を眺めながら大志が呟く。
「やはり近辺の駅に集中しているな」
「それと発生時間もね」と、カズが呟く。
「やっぱ犯人は複数なのカナ？」
勝春の疑問にカズが答える。
「うん。例えば、これとこれ。四つ離れた駅でほぼ同じ時間に発生してるだろ。複数犯とみて間違いないよ」

「なるほどネ。だから「同時多発テロ」って言ったんだネ」
大志が腕組みしてため息をつく。
「やれやれ。いきなりかよ。これじゃ人手が足りんな」
それを聞いて勝春が冷やかす。
「だったら菊ちゃんたちにも手伝ってもらう？　情報収集ぐらいならお願いしてもいいんじゃないカナ？」
「ふ、ふざけるな。誰があいつらなんか！」
「アララ。何かムキになってない？　そんなに菊ちゃんと一緒が嫌なワケ？」
「な……べ、別に」
「二人とも止めなよ。とりあえずボクら三人だけでやらなきゃならないんだからさ」
とりあえずカズが捜査の方針をたてる。
「とにかく勝春は情報を集められるだけ集めて欲しい。ボクと大志は事件発生現場を回って手がかりを掴む」
勝春がこくりと頷く。
「じゃ、オレは早速、校内ネットワークを使って聞き込み調査ダネ」
「校内ネット？　なんだそりゃ」と、大志が変な顔をする。
「ま、人脈みたいなものカナ。友達の友達、またその友達の友達って感じで全学年の７０％はカバーできるヨ」
それを聞いてカズが感心する。
「はは。さすが勝春だね。この学校に入って一週間も経たないのにもうそんな人脈作ったんだ」
「フン。そのへんはお前の専門分野だからな」
「任しといてヨ！」
「じゃあボクは大志と事件現場を回ってみるよ」
「カズ。ちょっと待て」と、大志がすっと立ち上がって、いきなりカズの頭に手を伸ばす。
「な、大志っ？」
大志がカズの髪の毛をグシャグシャにかき回す。

「どうせならもっと絡まれやすい格好にしないとな」
「な、ボクは餌かい？」
「そうだな。もっとオタクっぽい方がいいかもな。どうだ？　何かアニメキャラのグッズでも持つか？」
「いやだよっ」
大志とカズのやりとりを眺めて勝春がニヤニヤ笑っている。
「いいんじゃナイ？　カズに絡んできた奴を大志が捕まえる。いい作戦じゃないか」
それを聞いてカズが不服そうに口をとがらせる。
「それはわかるけど……なんか納得いかないなあ」
大志が首をパキパキ鳴らしながら「よしっ」と、気合を入れる。
「……今回は俺の出番が増えそうだな。よし。さっさと行こうか！」
そんな風に静かに闘志を燃やす大志を見てカズが勝春に耳打ちする。
「なんだか張り切ってるね」
「そだネ」と、勝春も笑って首をすくめる。
こうして三人の作戦が発動することとなった。

2　少女探偵団？

学校からの帰り道、駅に向かいながら菊乃が何やら考え込んでいる。
そんな菊乃を美穂子が心配する。
「ね。菊ちゃん大丈夫？」
菊乃が自分に言い聞かせるように独り言を言う。
「……ん。そうだよね。やっぱ、そうしよう」
「？」
「ね、美穂子。こうなったらアタシらだけで調査しようよ！」
「え～そんなの無理っ！　それにカズ君が危ないって……」と、美穂子は完全に腰が引けている。

「だって、くやしくない？　アタシら『足手まとい』って言われたんだよ」
「それはそうだけど……」
「アタシらだって役に立つってトコ見せてやろうよ。ね？」
そんな菊乃の熱意に負けて美穂子がしぶしぶ承諾する。
「しょうがないなぁ……でも、ホントに危なくない？」
「平気だって！　それよかさ。どっから手ェつける？」
菊乃は張り切っているものの特に考えは無いらしい。仕方なく美穂子が提案する。
「とりあえず……うちの生徒が襲われた駅に行ってみる？」
「そだね。で、どこ？」
「あのね。うちのクラスの荻野さんと小向さん。彼女たちT台の駅使ってるんだけど昨日の四時ごろ知らない人に絡まれたみたいよ」
それを聞いて菊乃が身を乗り出す。
「じゃさっそく行ってみよっ！」
美穂子は内心いきなり出かけるより先に被害者に状況を聞いた方が良いんじゃないかと思ったが菊乃の勢いには敵わない。結局、菊乃に引っ張られるような形で美穂子は付き合わされてしまうハメになってしまった。

＊　＊　＊

とりあえずT台駅で降りてみたものの、どこで何をすれば良いのかがさっぱり分からない。菊乃がため息をつく。
「はぁ……とりあえず来てはみたものの。これからどうしよっか？」
何も考えないで電車に乗ってしまったのは菊乃のせいだったが美穂子は文句が言えない。一応、菊乃の気に障らない程度に言ってみる。
「……とりあえず適当に歩いてみれば何かあるかもよ？」
「ん……そだね」
軽く頷いてから菊乃が「とりあえず」と言いかけて気が付いた。

「アレ？　なんかさっきからとりあえず、とりあえずばっかり言ってるよね？　アタシら」
美穂子が苦笑いを浮かべる。
「うん。そだね…」
時間を持て余してしまうのは良くあることだが、とりあえず何かをやってみるというのは大事なことだ。
そこで二人は適当に歩き出した。
T台の駅前は下町風味満載のごくありふれた町並みだった。夕方ということもあって行き交う人の半分は学生で、残り半分は買い物をして家路につく人々のようにみえた。素朴な感じの商店街を行き交う人々の間を縫うように自転車が走る。そんな光景を眺めながら目的もなくとぼとぼ歩いていると菊乃は自分が何をやっているのか分からなくなってしまった。
（何やってんだろ……アタシ）
　１０分も歩けば駅前の商店街はあっさり終わってしまった。目に付くのはお店の代わりに民家やマンションばかりになってくる。そのうちのひとつ、茶色っぽい小さめのマンションに何気なく目をやると一人のおばあさんが怒っているのが目に入った。なんだろうと思いながら菊乃がスルーしようとした瞬間、おばあさんの「誰がこんなもん捨てるんだろうねぇ」という独り言がふと気になった。立ち止まっておばあさんの様子に気を取られている菊乃を見て美穂子が声をかける。
「どうしたの？」
「いや……ちょっとね」
菊乃の視線の先にはゴミ袋がひとつ。おばあさんがブツブツ言いながらそれを片付けようとしている。
「ちょ、ちょっと待って！」と、菊乃が突然大きな声をあげる。それに驚いたおばあさんが振り返る。菊乃はおばあさんから袋を取り上げて中を美穂子にも見せる。
「ね、美穂子。ちょっと見てこれ！」

訳が分からない美穂子が困った顔をする。
「……これがどうかしたの？」
「美穂子、分かんない？　これ。うちの制服だよ」
「制服？！」と、思わず美穂子の声が裏返る。
菊乃が得意げに美穂子の顔を見る。
「ね。うちの制服。上着でしょ」
「確かに……そうだよね。でも、何コレ？」
半透明のゴミ袋にはジャケットが四着押し込められていた。菊乃が（うぇっ）という顔でそれをつまみ出す。
「何コレ？　ボロボロじゃん！」
美穂子がそれをしげしげと眺める。
「なんか切られてるみたいじゃない？」
「誰がこんなトコに……」
そう言いかけて菊乃がはっと何かに気付いた。
「ね。これってもしかして！」
菊乃にある考えが浮かんだ。菊乃の反応に美穂子が戸惑う。
「え？　え？」
菊乃はおばあさんに向かって「あ、これ回収しま〜す」と、言い残してその場から立ち去ろうとした。美穂子が慌ててそれを追いかける。

二人はマンションのゴミ置き場を退散して、近くの公園に移動した。
一息ついたところで美穂子がゴミ袋を見ながら顔をしかめた。
「ね、これって何なの？　キモくない？」
「何言ってんの！　大発見だよ。よっし。カズ君に教えてやろっと」
そう言って菊乃は携帯を取り出した。そしてカズに電話する。
呼び出し音6回目でカズが出た。
『どうしたの？　藤村さん』
菊乃が得意げに報告する。

「あ、カズ君？　へへ。アタシら手がかり発見しちゃった！」
『え？　手がかりって……ダメじゃないか。危ないって言ったでしょ』
「大丈夫だよ。ていうかこれ見たらカズ君も驚くよ」
『驚くって……何を見つけたんだい？』
「それは見てのお楽しみ。ね、今から来れる？」
『それはいいけど藤村さんは今どこにいるの？』
「T台駅」
『え、近いな。分かった。今からそっちに向かうよ』
「場所はね……えっと、駅前の商店街ぬけて、神社？　みたいなトコの隣に公園があるんだ」
『了解。じゃ、そこで待ってて』
「ん。じゃあ待ってる」
そう言って菊乃が電話を切ると美穂子が「カズ君、来るの？」と、顔をほころばせた。
「ん。何か近くにいるみたいよ」
「マジで！」
美穂子はちょこんとベンチに座るといそいそと鏡やらブラシを取り出した。どうやら菊乃の大発見よりもおしゃれの方が大事らしい。
菊乃は背伸びをしながらふと喉の渇きに気付いた。
「あ～なんかいい仕事したら喉渇いちゃった」
公園の外を眺めるとコンビニが目に付いた。
「アタシ何か買ってくるよ。美穂子もなんか飲む？」
「私はいい」
美穂子は身づくろいに夢中なので菊乃は一人でコンビニに行くことにした。

3　少女探偵団の危機！

コンビニに行って帰ってくるまでほんの１０分足らず。菊乃が公園に戻ってみると美穂子の姿が無かった。彼女が座っていたベンチには菊乃のカバンと美穂子のカバン。そしてゴミ袋がぽつんと置き去りにされている。

（あれ？）と、思って公園内を見回すがそられしき人影は無い。いつの間にか日が暮れ始めていて辺りはすっかり人の気配が消えていた。

「美穂子？　ねえ。美穂子っー！」

大きな声で呼んでみたが反応は無い。

おかしいなと思って菊乃は園内を少し歩いてみることにした。それほど大きな公園ではない。五分もあれば一周できるぐらいの広さだ。歩き始めて、ちょうど菊乃たちのいたベンチの反対側に公衆トイレらしき小さな建物があった。

（トイレなのかな？）

と、思ってそちらの方向に足を伸ばしかける。何気なくスタスタ歩いているうちにふと何かが耳に入った。

（……話し声？）

菊乃の位置からは死角になっているがトイレの方から誰かの声が聞こえたような気がした。嫌な予感がした。

足音を立てないようにそっと建物に近づく。静かに。耳をすませて。ゆっくりと……。切れかかった蛍光灯が瞬く音が耳につく。

「早く脱げよコラッ」

今度ははっきり聞こえた！　男の声だ。

（ウソでしょ……まさか……）

周りに聞こえてしまうかと思うほどに心臓がバクバク鳴った。

（どうしよう……どうすれば……）

こういう時こそ大きな声を出すべきなのは分かっている。しかし、頭がパニくってしまうとそれができない。それでも菊乃は、ありったけの勇気を振り絞って声を出した。

「美穂子っ！」

思ったよりしょぼい声しか出ない。が、反応はあった。建物の影からすっと黒い人影が現れたのだ。
「何だテメェ……」
暗がりの中でよくは見えないが黒っぽいニット帽を深々とかぶった若い男が菊乃を睨みつけている。
「何だよ。連れかよ？」と、別な声がして、ひょっこりともう一人の男が顔を出した。こちらの男は金髪にダボダボの服装。
「一緒にやっちまうか？」と、ニット帽がにやっと笑う。
（やや、やっちまうって何を？！）
金縛りにあったように菊乃の身体が硬直する。身体は動かない。が、思考だけは意外にクリアだ。菊乃は必死で考えた。
（な、何とかしなくちゃ……）
ある考えがひらめいた。
（もうこれしかないっ！）
そう思って、菊乃は男達にくるりと背を向けると大声で叫んだ。
「カズ君～こっちこっち！　ほらカッチーもゴッキーも早くぅ！」
これは賭けだった。本当はまだカズの姿なんて見えていない。ところがその時、たまたま犬を連れた二人連れが公園の敷地内に入ってくるのが見えた。
（ナイスタイミング！）
菊乃はわざと大げさに「早く早く」と連呼した。
そこでチラリと振り返ると男達が慌てているのが目に入った。二人組は口々に「マジかよ」とか「やべぇ」とか言いながらそそくさと退散した。
　菊乃は2人組が公園の裏口方面から去るのを見送ってから急いで建物の影に向かった。
建物の影では美穂子が泣きながらうずくまっていた。
「美穂子……大丈夫？」
菊乃がしゃがんで美穂子の顔を覗き込む。上着は着ていないが着衣に乱れは無い。こんな時に何と言って声を掛けたら良いのか菊乃に

は分からなかった。
「美穂子……何かひどいことされなかった？」
美穂子がフルフルと首を振る。
「ケガは無い？」
美穂子は何度か首を縦に振ってから声を振り絞るように訴えた。
「……レイプされるかと思った」
菊乃はそっと美穂子の頭を抱き寄せた。
「ゴメンね……怖い目に合わせちゃって……」
彼女の震えが一刻も早く収まるように願いながら菊乃は抱きしめる腕に力を込める。
「何だ。ガセかよ」
ふいに高い位置で声がした。聞き覚えの無い声に菊乃がはっとして顔を上げる。
（！　……さっきの2人組）
「てめぇ……ダマしやがったな！」
ニット帽がものすごい形相で菊乃たちを見下ろしている。
その隣で金髪が苦々しそうに口を開く。
「さっきのは散歩のジジイとババアじゃねぇか」
いつの間にかさっきの2人組が戻ってきていたのだ。
「ふざけやがって！」と、ニット帽が手元でカシュッ！　と音をさせた。
何かと思って見ると手には折りたたみ式のナイフを光らせている……。
（ナイフ？！）
すぐ目の前に現れたナイフに菊乃は凍りついた。
「へへ。これでたっぷり遊んでやっからよ……」
菊乃は覚悟した。
（もうダメ……）
……そう思った瞬間、横の方から声がした。
「お前らごときじゃ遊び相手にもならんな」

聞き覚えのある声！　そしてその長身のシルエット！
「あんだテメェ？」
ニット帽がナイフをかざして威圧する。
「下らないパフォーマンスはいいから早くかかってこい。このヘタレが」
「何だとこのっ！」
いきり立ったニット帽が突進、と思いきやゴッ！　と、鈍い音。
金髪が「何だコラッ…」と、キレかかった途端にまたもゴッ！
お約束のハイキック2連発！
その動きは点滅する蛍光灯の明かりの下、ストロボの連続写真のように見えた。
腰が抜けるとはこのことか。菊乃はその場にへたりこんでしまった。
まるで何事もなかったかのように菊乃たちを見下ろす声の主は、一言「ばかものが」と、吐き捨てた。
（ゴッキー……）
地面に座り込んだままの菊乃が目を潤ませて大志を見上げていると、先に美穂子がぱっと立ち上がった。そして、大志に体当たりした……ように見えた。
「ありがと。ありがと。後藤君！」
美穂子は興奮気味に大志に感謝の言葉を浴びせる。
「くっ、くつくな！」と、大志が身体を反らせて美穂子の密着を避けようとする。それに構わず美穂子は大志の手を握りしめて離さない。
「や、やめ、うあ……」
どうみても大志が嫌がっているようにしか見えない。にしても異常なリアクションだ。美穂子がくっついてくるのを本気で嫌がっている。
いつの間にか現れたカズが大きな声で美穂子を制止する。
「森野さん！　ごめん。大志にあんまりくっつかないで！」
それを聞いて美穂子がはっと我に返る。

「カズ君……」
カズの姿を見て美穂子がまた目に涙をためる。
「怖かったよぉ！」
美穂子が今度はカズに体当たりする。よしよしとカズに頭を撫でてもらいながら泣きじゃくる美穂子。それを茫然と見つめながら菊乃がゆっくりと立ち上がる。
（美穂子ったら……でも、さっきのゴッキーのリアクションって……）
そう思って菊乃は大志の方を見る。美穂子の密着攻撃から逃れられた大志が何やら呻いている。それどころか、しきりに首の辺りを掻きむしっている。
「ゴッキー何やってんの？」
疑問に思って菊乃が尋ねると大志の代わりにカズが事情を説明した。
「大志はね……ダメなんだよ。生理的に。女の子に触れられると酷いジンマシンが出てしまうんだ」
「……はぁ？」
菊乃には意味が分からなかった。カズは何を言っているのだろう？
「大志は昔からそうなんだ。アレルギーの一種みたいなものなんだ。何でだか分からないけど……多分、女の匂いがダメなんじゃないかな」
追い討ちをかけるようにカズの一言一言が、確実に菊乃の正常な思考を侵していく。
（アレルギー？　何ソレ？　カズ君、何言ッテンノ？）
菊乃は目の前が真っ暗になっていくような気がした。まるで頭の中の血液がすべてズルズルと落ちていくようにテンションが下がっていく。脱力感？　というより、どうしようもない「やるせなさ」が急速に菊乃の身体を重くする。
（ゴッキーが女性アレルギー？　そんな……ウソでしょ……）
菊乃は倒れそうになるのを必死で堪えた。いっそのこと倒れた方がマシかもしれない。まさに天国から地獄。このショックは計り知れ

ない精神的ダメージを菊乃に与えた。たぶん、目を開けたまま気絶するというのは、こういう状態のことをいうのではないかという気がした……。

＊　＊　＊

カズは美穂子と菊乃をそれぞれタクシーに乗せて送り出した後、厳しい顔つきで公園に戻った。

公園内の公衆トイレの脇では大志が美穂子たちを襲った2人組に厳しい尋問をしているところだった。意識を取り戻した2人組は並んで正座。それを見下ろす形で大志が質問を浴びせている。さっきまでナイフを振り回していた連中が、しかられた犬みたいにおとなしくしている。

カズが戻ってきたところを見て大志が吐き捨てる。

「ダメだ。こいつらは雑魚だ」

カズは黙って大志の隣に立つと菊乃が発見したゴミ袋を金髪の鼻先に突き出した。

「これに見覚えはない？」

金髪がビクッと反応してゴミ袋を見つめた。そしてフルフルと首を振る。

カズはそれを見下ろしながら冷たく言い放った。

「本当に？　もし何か隠しているようだったら後悔するよ。一生」

その言葉に2人組がおびえたような目つきを見せた。かなりビビっているところを見ると大志の蹴りを心底おそれているのかもしれない。

金髪は必死で訴える。

「マジでホントっす！　オレら先輩に言われて……いやマジで。タカツキ先輩に命令されて……」

大志が睨みを利かす。

「ほお。そいつが加美村の生徒を襲えと指示した訳だな？」

ニット帽がしどろもどろに答える。
「いえ。その。襲うとかそーゆうんじゃなくって、その、制服集めて来いって言われて」
「制服？」と、カズと大志が顔を見合わせる。
カズが改めてゴミ袋を2人に突きつける。
「だからこれがそうなんじゃない？」
金髪が顔を背けながら苦しい言い訳をする。
「そ、それ、オレらじゃないっす。マジ、ホントっす。はじめてなんスよ。今日言われたばっかっすから」
それを聞いて大志が舌打ちする。
「チッ。こいつらだけじゃねえのか」
「みたいだね。どうする大志？　次はこの人達に指示したタカツキっていう先輩を締め上げることになると思うけど」
「だな。よし。お前らそいつに電話しろ。今すぐだ」
大志の命令に金髪とニット帽は顔を見合わせて、ニット帽の方がしぶしぶと携帯を取り出した。不良が正座したまま携帯というのも間抜けな格好だ。しばらくして電話が繋がる。
「あ、先輩っすか。ハイ。ツヨシっす。……ええタツジも一緒っす」
金髪のタツジが心配そうにニット帽のツヨシと先輩のやりとりを見守っている。
「あ。いえ。まだ1枚も……ハイッ、スンマセン。ハイッ。でも……」
どうやら怒られているらしい。ニット帽の背筋がピンと伸びてくるのが妙に滑稽だ。
そこで大志が突然、ニット帽の携帯を取り上げた。そして電話口に向かって相手を挑発した。
「おい。このヘタレ野郎。お前ちょっと出て来いよ」
その言葉で相手が逆上したのだろう。大志が（うるせえな）といった風に携帯を耳から遠ざける。そして頃合を見計らって宣戦布告する。

「とにかく今から来い。相手になってやるから。で、場所はだな……」
大志はこの公園の場所を告げて電話を切った。そして不敵に笑う。
「さて。何人集められるかな？」
そんな大志を見てカズが心配する。
「一人で大丈夫かい？　ボクも残ろうか？」
「いや。お前は帰って勝春と分析でもしててくれ」
「分かった。無理はしないでよ」
これ以上この2人組を拘束していても意味が無いので大志は開放してやることにした。
「よしお前らは用済みだ。帰っていいぞ」
大志の言葉に二人がカクカクと首を縦に振る。そしてフラフラと立ち上がると痺れる足を引きずりながら大志たちの前から姿を消した。
それを見てカズが尋ねる。
「ちょっと、やりすぎじゃないの？」
「なに。あの後1発ずつ足にお見舞いしてやっただけだ」
「でも相当、怯えてたじゃない」
「そうでもないさ。ちゃんと自分の足で歩いてるじゃないか。明日の朝どうなるかは保証できんがな」
　大志のローキックがどれほど強烈かはカズもよく知っていたので骨は折れてないにしてもしばらくは足がはれ上がってしまうことは容易に想像できた。
「女を襲うようなクズには当然の報いだ」
そう言って大志がため息をついた。
「へぇ。意外にフェミニストなんだね。女性アレルギーでも」
「……フン」
「てっきり藤村さんが襲われたから怒ってるのかと思ったよ」
「な！　お前まで言うかっ！」
カズにからかわれて大志は少し顔を赤らめる。
「チッ。いいから早く帰れ。奴らが来るぞ！」

その後、カズが先に帰ってしまったので大志は独りで公園に残ることになった。
待っている間、大志は公園の真ん中に陣取り精神統一をする。
２０分ほど経って、やたらと雑音の多いバイクの音が近づいてきた。と、思ったら公園の敷地内に原付バイクが数台なだれ込んできた。その数６台。二人乗りのものもあるので総勢８人。どいつもこいつも悪そうな連中だ。
「ほお。短時間にしてはよく集めたな」と、大志がその様子を眺める。
その表情に焦りや恐怖は微塵も無い。むしろワクワクしているような雰囲気さえある。
ゾロゾロとバイクを下りてきた連中が大志の前にずらりと並ぶ。中にはバットを持っている者もいる。その中で、真ん中の一番頭の悪そうなモジャモジャの天然パーマの男が甲高い声でどなった。
「おひっ！　てめぇか？　さっきの電話は？」
ポケットに手を突っ込んだまま大志が冷静に口を開く。
「お待ちしてましたよ。タカツキ先輩」
この状況でまったく動じない大志の態度に天然パーマがキレた。
「ブチ殺す！　かならずブチ殺すっ！」
大志が鼻でせせら笑う。
「フン。たった８人か。なめられたもんだ」
それを聞いて天然パーマが「じゃけんなっ！」と、殴りかかってきた。
そして、それを合図に両者がぶつかり合った。
普通、町中の公園で乱闘騒ぎなど起こそうものならすぐに警察に通報されてもおかしくはない。しかし、５分もしないうちに騒動が収まってしまったので、辺りはまた元通りに静かになった。

まるでキャンプで「ザコ寝」しているように地面に転がる8体の不良少年。それを見下ろしながら大志がパンパンと服のホコリを払う。辛うじて失神を免れた者たちのうめき声が嫌な合唱となって低い位置から聞こえた。大志は地面に這いつくばる天然パーマの所まで歩み寄り「おい。何、気絶したフリしてるんだ？」と、モジャモジャ頭をワシ掴みにして無理やり顔を引き上げた。
「い、痛ででで……」と、天然パーマが顔をしかめる。
「お前には聞きたいことがあるからな。手加減したはずだが？」
天然パーマはうっすら目を開けて呻いた。
「う……！　か、カンベンしてくらしゃい」
「お前、口臭がひどいぞ。それになんだ。その歯は？」
「しゅ、しゅいましぇん」
只でさえ歯がほとんど無いのにビビっているせいか何を言っているのか、さっぱり分からない。大志は髪を掴んだまま無理やり天然パーマを立たせた。
「とりあえず場所を変えるぞ。ついて来い」
こうして大志は天然パーマを連れて公園を後にした。

4　犯人の狙いは？

大志と別れた後、カズはタクシーでマンションに戻った。リビングでは勝春が携帯を片手にＰＣとにらめっこしている。
「電気ぐらいつければいいのに」と、カズが照明のスイッチを押す。ぱっと明かりが点いて勝春はキーボードを叩いていた手を止める。そしてカズに向かって軽く手を上げる。
「……そっか。情報ありがとネ。ウン、また何か分かったら教えてヨ」
勝春が電話を切るのを待ってカズが尋ねる。
「そっちはどう？　情報、集まってる？」

「思ってたより多いネ。いちいちメモとってらんないからこうやって直接ＰＣに打ち込んでるくらいサ」
「多いって何件ぐらい？」
「今のところ２１件だネ」
「２１件！　それは酷いな」
「ダロ？　入力が追いつかないぐらいだヨ。見るかい？」
「うん」と、カズがＰＣを覗き込む。
勝春が画面を指差しながら説明する。
「ほらネ。やっぱりこの三日間に集中してるだろ？」
勝春のまとめたデータには事件の発生日時や被害者の名前・学年、それから犯人の特徴が記されている。カズは画面をスクロールさせながら呻いた。
「うーん、これは……やっぱり犯人は複数犯か」
「そうだネ」
勝春が汚いものでも見るような目つきでカズの手にしていたゴミ袋を見る。
「ところでサ。それ何？」
「ああ、これね。藤村さんがＴ台駅の近辺で偶然発見したんだ」
「Ｔ台駅？　そういえば何件かあったネ。何か事件と関係あるのかナ？」
そこでカズはゴミ袋を開いて中味を検証することにした。菊乃の報告通り袋の中には上着らしき衣類が４着入っていた。見た感じ加美村学園の制服のようだが、どれもボロボロに切り裂かれている。
「うわっ酷いネ！　ボロボロじゃないか」と、勝春は顔をしかめる。
「そうだね。わざと切り刻んでるみたいだけど……幸い、血は着いてないみたいだ」
勝春が上着のひとつを摘み上げながら言う。
「まさか……これが目当てだってことはないよネ？」
「いや。そうかもしれない」
「マジで？　何の為だヨ？」

「ほら……胸のところ。ここにあるべきものが無いでしょ」
カズに言われて勝春がハッとする。
「そっか！　エンブレムだネ？」
カズがこくりと頷いた。
「ね、勝春。ここに出てる被害者をもう一度その線で洗ってもらえないかな？」
「そっか。それは気がつかなかったナ。発生場所とか犯人像とかばっかりに気を取られてたヨ」
「おそらく加美村の生徒たちを襲った連中は、このエンブレムが目的なんだろうね。何らかの理由で……」

＊　＊　＊

その頃、大志は歯抜けの天然パーマを連れて隣の駅の駅前商店街を歩いていた。
天パーの真後ろを歩く大志が低い声で尋ねる。
「おい。本当に間違いないんだろうな？」
「ひ、ひゃい。ホントでひゅ」
相変わらず天然パーマの言葉は聞き取りにくい。
「お前、マジで歯医者に行った方がいいぞ……」
「ひ、ひゃい。しゅみましぇん」
不自然に歯が無いせいか天パーの返答はふざけているようにしか聞こえない。
「どうでもいいが、よく考えろ。歯は大事だぞ」
天パーの案内で二人は、とあるパチンコ屋の前まで来た。
天パーは、「あっちでひゅ」と、パチンコ屋の三軒となりの小さな建物を指差した。
「あそこが換金所か。よし。行くぞ！」
大志は天パーのすぐ後ろに立ち、ぴったりマークしながら換金所に向かった。途中、道ゆく人々が二人の姿を見て一様に目を丸くした。

無理も無い。見るからに問題のありそうな天然パーマとやたら背の高いツンツン頭が「電車ごっこ」みたいに密着して通りのド真ん中を歩いているのだ。

換金所というのは、客が出玉と引き換えに得た景品を店外で換金する施設なので、防犯上、客と接する窓口には目隠しがされている。その為に中の様子は伺えない。

大志に促されて天パーがブカブカのポケットから加美村学園のエンブレムを数枚取り出す。そして窓口の手前に設置されている引き出しのような小箱にそれを置いた。すると引き出しがすっと分厚いガラスの向こう側に引っ張られ、しばらく沈黙。その後、引き出しがこちら側に押し出されて元の位置に収まる。その中には数枚の1万円札が……。

「どうも」と、天パーがそれを手にしたところを大志が後ろから取り上げる。

「1、2、3……8万円。1枚につき1万円か」

天パーは抵抗しても無駄と分かっているのかお金を取られても文句ひとつ言わない。

大志は半ば呆れ顔で天パーに尋ねる。

「確かにボロい商売だな。一体、こんなバイトどこで知ったんだ？」

「う、うらシャイト……」

「シャイト？　もしかして学校裏サイトのことか？　ちょっと見せてみろ」

言われるままに天パーが携帯を取り出してHPにアクセスする。そして「これでひゅ」と、その画面を大志に見せる。

天パーの話によると、このサイトにはこのあたりの学校でワルとされている連中が好んで利用する掲示板があるらしい。中味がろくでもないことは容易に想像できた。が、実際に「カミムラ狩りぼしゅう！きぼうするヤツは←へメール！」という、ひらがな重視の書き込みを目の当たりにすると、さすがの大志も表情が険しくなった。

「で、お前もこれに応募した訳だな？」

「ひゃい。しょうでちゅ」
「とうとう赤ちゃん言葉かよっ！　ったく。にしてもこんなのを真に受けたバカが少なからず居ることは間違いないようだな」
つまり、加美村学園の制服についているエンブレムをこの換金所に持っていけば１枚１万円で引き取ってくれるというのだ。それをこの学校裏サイトで宣伝することでこの事件の黒幕は実行犯を集めたに違いない。
「てことはあの換金所の中に黒幕がいるってことか……」
とはいえ換金所を襲撃する訳にはいかない。それでは強盗と間違われてしまう。仕方が無いので大志は換金所の中にいる人間が出てくるまで張り込むことにした。
「おい。お前。パンと牛乳買って来い」
そう言って大志は先ほど取り上げた８万円から１枚万札を抜いて天パーに持たせた。
「いいか。コロッケパンだ。うまいのを頼む」
「ひ、ひゃい。分かりまひた」
「それ買ってきたら解放してやるからな」
その一言で天パーが嬉しそうな顔を見せる。意外に素直に大志の言うことを聞く。
天パーは１万円を握り締めて商店街の雑踏に向かってダッシュした。そして、１０分ほど経って息を切らせながら戻ってきた。が、なぜかどっさり入った袋を両手に持っている……。
「何個買ってきたんだ？」と、大志が天パーを睨む。
「じゅ、１４個でひゅ！」
「たわけ！　大食い選手権じゃないんだぞ！」
「しゅみましぇーん」
結局、大志は２つだけコロッケパンを取って残りは天パーにくれてやった。
「お前はもう帰っていい。ただし、大ケガしたくなければ加美村狩りは止めることだな。仲間にも宣伝してまわれ。いいな？」

大志にそう言われて天パーは何度も頭を下げながら夜の町並みに消えていった。
　大志は、もしかしたら天パーのようにエンブレムを換金しに来る奴が他にもいるかもしれないと考えたが、換金所には一般客がパラパラと訪れるだけだった。
そのまま何事も無く、二時間近く待たされることになってしまった。
そしてようやくパチンコ屋が閉店し、店員が二人、換金所にやって来た。
彼らは換金所の裏に回り、しばらくして中の人間と一緒に出てきた。
おそらく、景品やお金を店の金庫に戻すのだろう。大志は待った。
換金所から出てきた男が一人になるのを。
2人組の店員は店に戻り、換金所から出てきた男が一人になったところで、大志は行動を開始した。
「そこのアンタ。話があるんだが」
そう大志に声を掛けられて、換金所から出てきた若い男がぽかんとした顔で立ち止まった。この男、何となく目はうつろで、つやの無い髪が肩までのびていて汚い感じがする。男は大志の顔をしげしげと眺めてから口を開いた。
「……お金なら無い。……店長が持ってった」
ずいぶん反応が鈍い奴だなと思いつつ大志が首を振る。
「違う。強盗じゃない。だいたい学校の制服を着て強盗するバカがどこに居る？」
「……ああ……そっか」
やはり反応が鈍い。
「俺が聞きたいのはこのエンブレムのことだ」
大志は自分の胸についているエンブレムを指して相手の出方を伺う。
が、この長髪の男、頭の回転が相当に悪いようで、すぐには理解できないらしい。
「……ああ。それ。それね」
「お前が掲示板に書き込んだんじゃないのか？」

長髪の男からはすぐに返事が返ってこない。どうやら大志の言葉を理解するのに１０秒、自分が発する言葉を選ぶのに５秒ぐらいかかるらしい。
「……けいじばん？」
大志に問い詰められてもきょとんとしているところをみると本当に分かっていないのかもしれない。少しイラつきながら大志が再度、質問する。
「だから！お前がエンブレムを１枚１万円で買うからって人を集めてたんじゃないのか？」
「……知らない……てか頼まれた」
「頼まれた？　じゃあお前は言われた通りに換金してただけってことか」
「……うん」
どうやらウソはついていないようだ。大志はしばらく考えてから長髪男に言った。
「では、集めたエンブレムはどうするんだ？」
「……交換する。頼まれた人と」
「いつ交換するんだ？」
「……あした。一時」
「場所は？」
「……わからない」
「は？　場所が分からなきゃ待ち合わせできんだろうが！」
「……携帯に、電話。かかってくる」
「何だ。そういうことか。よし。じゃあ明日の１２時半にお前、この駅に来い」
「……嫌だ……めんどくさい」
その途端、シュッと風を切る音がして、大志の左ハイキックが長髪男の顔面でぴたりと寸止めされた。が、長髪男はぽかんとした表情。そして５秒後に「……わ、何すんだ！」と、後ずさりした。やっぱり反応が鈍い。

うんざりしながら大志が足を下ろす。
「とにかく明日12時半だ。分かったな」
「……い、行く」
大志は念のために長髪男の携帯番号を控えていったん引き上げることにした。この男で本当に大丈夫かという不安はあったものの今のところ手がかりはこれしかない。
長髪男と別れ、家路につくために大志がタクシーを拾った時にはすでに日付が変わっていた。

5　黒幕は誰だ？

翌日、朝一番にカズと勝春は校長室を訪問した。
カズがこれまでに判明した事実について報告すると校長は頭を抱えた。
「何てことだ。信じられん。いったい誰がそんなことを……」
カズが冷静に提案する。
「いずれにせよ上着を着て出歩かないように至急、通達を流してください」
「……わかった。すぐに通達文を作って全生徒に連絡する」
そこで勝春が口を挟む。
「でも、衣替えの前で良かったですヨ」
それを聞いて「なぜかね？」と、校長が顔をしかめる。
「勝春の言う通りです。今は上着を着るかどうか任意だから上着を着ていた生徒だけが標的になってしまいました。が、これが全校生徒となると被害が何倍にもなっていたかもしれません」
「そうか、そうだな。この事件が解決するまでは上着の着用を禁止せねばならんな」
そう言ってガックリうなだれる校長をカズが慰める。
「大丈夫ですよ。事件が解決するまでの辛抱です。今日、大志が黒

幕との接触を図ります。これが成功すれば……」
「そうか。期待しておるよ」
加美村学園の生徒だけを狙い撃ちするという卑劣な行為を許すわけにはいかない。
いよいよ黒幕との対決は近い……。

＊　＊　＊

始業前に教室に戻ったカズと勝春は、菊乃と美穂子の姿を見て驚いた。
「森野さんも藤村さんも大丈夫なの？」
「そうだヨ。無理しない方がいいヨ」
二人にそう言われて菊乃がゆっくりと首を振る。
「いいの。美穂子のこと心配だったし、事件のことも気になるから」
美穂子は潤んだ瞳でカズに訴えかける。
「私は家にいるよりカズ君の顔見てた方が安心するから……」
「森野さん……」と、言いかけてからカズはハッとして言った。
「それなら勝春に診てもらった方がいいかも。やはりＰＴＳＤのケアは専門的に……」
大真面目にそう言うカズを見て美穂子がやや幻滅したような顔で尋ねる。
「ＰＴ何とかって……なにソレ？」
「ＰＴＳＤ。心的外傷後ストレス障害だよ。つまり犯罪の被害にあった人が心に傷を負うことさ。だから勝春に……」
おそらく美穂子が欲しかったのはそんな回答ではなかったのだろう。珍しく美穂子が厳しい視線をカズに向ける。が、カズはまるで気がついていない。「もう、いい！」と、急に不機嫌になってしまった美穂子の態度にカズは「？」と、戸惑っている。
そんな二人の温度差を感じながら菊乃は思った。
（ひょっとしたらカズ君て頭はいいけど女の子の気持ちとかには超

鈍感？）
険悪なムードを嫌って勝春が話題を変える。
「まあいいじゃナイ。美穂子ちゃんも元気出てきたみたいだしサ。後は大志に任せようヨ」
そう言われて菊乃は大志がいないことを疑問に思って尋ねた。
「あれ？　そういえばゴッキーは？　遅刻じゃないの？」
「ウン。ちょっとネ。今日は別行動」
「別行動？　ひょっとして昨日の……」と、菊乃の表情が曇る。
「そうなんダ。今日は学校休んで単独行動なんだヨ」
「ゴッキーひとりで大丈夫かな」
大志のことを本気で心配する菊乃を見てカズがきっぱりと言い切る。
「大丈夫だよ。大志の実力を信じなよ」
「……うん」
カズと勝春は大志のことを信頼しきっているようだが菊乃にはどうしても気がかりだった。もしも大志に万が一のことがあったらどうしようという不安。そこに入り混じる複雑な思い。それは昨夜聞かされた大志の女性アレルギーの件だった……。

＊　＊　＊

１１時半すぎにマンションを出た大志は学校には寄らずに真っ直ぐ駅に向かった。
反応の鈍い長髪男との待ち合わせは昨日のＴ駅に１２時半。なのでまだ余裕がある。
駅についてから大志は用を足そうと思って構内のトイレに入った。
大志が男子用に入ると奥のほうで他校の生徒が固まって立ち話をしていた。よく見ると、見たことがあるような加美村の生徒が他校の生徒に挟まれてモジモジしている。
大志は大して気にも留めず便器の前に立ってチャックを下ろす。
ふいに他校の生徒の声が聞こえてくる。

「なあ。頼むよ目黒。同中じゃんか」
目黒？　と、聞いて大志は思い出した。
（なんだ。あの失敬なフンドシ研究会か。それなら、なおさら関係ない）と、大志はシカトを決め込んだ。
一方、他校の生徒に挟まれてうつむいていた目黒は大志の姿を発見して目を輝かせた。彼はしばし考えて大きく息を吸い込んだ。そして、きっぱりこう言った。
「はっきりいって……断る！　このお金は古い史料を買うために有賀先生から預かった大切なものなんだ！」
そう言いながらも目黒は（振り向いてくれないかなぁ）という風にチラチラと大志の様子を伺う。が、肝心の大志は知らん顔だ。しかし、勢いでタンカを切ってしまった以上、もう引き下がれない。目黒は鼻の穴をふくらませていつもの決め台詞を言い放った。
「だから……な、なめないで頂きたいっ！」
「はぁ？」と、他校の2人組が怪訝な顔をする。
「なめてんのかコラ！」
目黒たちのやりとりにはまるで興味が無いといった風に大志はチャックを上げるとゆっくりと手洗い場に向かった。そして悠然と手を洗い始める。それを見て、あれ？　おかしいなといった感じで目黒が目を白黒させる。彼は大志に助けてもらうつもりだったのだ。
「こいつ。ふざけやがって」
「個室に押し込んでボコるか」
と、他校の2人組は目黒の頭を小突く。目黒が「ひぃぃ」と、情けない悲鳴をあげる。
その時、大志が蛇口をしめながら「うるせえぞ、タコ」と、不機嫌そうな声を出した。
他校の生徒がそれに気付いて大志を睨んだ。
「なんだオマエ？　やんのかコラ？」
と、もう片方の生徒も大志にけんか腰で突っかかる。
それに対峙しながら大志はハンドタオルで丁寧に手を拭いた。

「……アホか」
大志の一言を合図に2人組が一斉にこぶしを振り上げて大志に向かってきた。
大志は手をフキフキしたまま、すっと右足を引くと、次の瞬間、豪快な弧を描いたハイキックを放った。そのダイナミックな蹴りを見せ付けられて、突っ込んできた2人組は急ブレーキ。そして勢いあまって尻餅をついてしまった。
大志の蹴りは始めから当てるつもりの無い威嚇にすぎなかった。が、2人組はすっかり戦意を喪失してしまったようだ。
茫然とする2人組を見下ろしながら大志はポケットにハンドタオルをしまうと何事も無かったかのようにトイレを出て行った。
信じられないといった顔つきで2人組が呟く。
「何なんだよ……あの蹴り」
「あんなの当たったら……死ぬな。確実に」
そんな二人の間を目黒が「ごめんよ」とすり抜ける。そしてクルリと振り返って一言。
「加美村学園を、な、なめないで頂きたい！」
言いたいことだけ言って目黒はトイレからそそくさと逃げ出した。

＊　＊　＊

トイレでひと悶着あったものの大志は予定より早く約束のT駅に到着した。
T駅は改札がひとつしかない。それに昼過ぎということもあって構内は閑散としていた。構内の立ち食い蕎麦屋で遅い朝食を取り、改札を出て長髪男を待つ。
「奴め。約束を忘れてるんじゃないだろうな」
時計を見て大志が顔をしかめる。約束の時間を五分過ぎている。大志は昨夜、控えた番号に電話をする。
……出ない。5回、6回と呼び出し音が鳴る。１０回、１１回……

だんだんイライラしてくる。１５回を越えたところで大志が（意地でも出させてやる！）と、思った時、背後からアホみたいに陽気な着メロが流れてくるのに気付いた。大志が振り返ると、向こうから昨日の長髪男が歩いてくるのが目に入った。
長髪男は大志と目が合うと「……やあ」と、手を上げた。彼の首からぶら下がった携帯はずっと能天気なメロディを鳴らし続けている。
「で、出ろよっ！」と、思わず大志が突っ込む。
「……だって君の姿がみえたから」
「はぁ。調子狂うな、まったく」
長髪男は大志の顔をのんきに見上げて何かを言わんとする。
「なんだ？　人の顔をジロジロ見て」
「……君。背ぇ高いね」
昨日気付けよ！　という言葉が出かかったが我慢して大志が尋ねる。
「そろそろ連絡があるんじゃないか？」
「……そろそろだね」
まるで他人事のように長髪男は返事をする。そして寝グセ全開の頭をボリボリかきながら大あくびをした。まったくのマイペース。さすがの大志もこの手のタイプには手を焼いてしまう。気を取り直して大志が長髪男に念を押す。
「いいか。電話があっても俺と一緒だとは絶対に言うな」
「……え？　何で？」
「バカかお前は。……もういい。とにかくいつも通りにやればいい。俺は適当に離れて見てるから」
大志がそう言い聞かせていると長髪男の携帯がまた鳴り始めた。しかし、長髪男は電話に出ようとしない。イライラしながら大志が「なんで早く出ない？」と、長髪男を急かす。すると男はニカッと笑って答えた。
「……この曲、好きなんだ」
ずっこけそうになるのを必死で堪えながら大志は長髪男を小突いた。それでようやく男が電話に出る。もたもたとスローな動きで男は携

帯を操作する。そして携帯を耳にあてたまま、再び、ぼーっと立ち尽くす。しかもウンともスンとも言わないので相手の話を聞いているのかさえ怪しい。大志がイラつきながら見守る中、長髪男は電話を切る寸前に「……わかった。行く」と、1回だけ口を開いた。

「おい。場所は聞いたんだろうな。大丈夫か？」

長髪男の反応の悪さに大志は心配になった。まるで小さな子供に「はじめてのおつかい」を頼むような心境だ。

「……じゃあ行く」

そう言って長髪男がとぼとぼと歩き出す。３０ｍほど離れてその後を大志が追跡する。

長髪男は、まるではじめて来た町を散策するようにのんびりと歩く。その分、見失う恐れはないものの大志はじらされっぱなしでイライラを募らせていた。

（あのバカ、さっさと歩けよ……）

１０分あまり歩いただろうか。昨夜とは反対側の駅前を抜け、団地がひとかたまりになっている場所に出た。両脇をコンクリに固められた川に沿って細い道を進み、小さな橋の上で長髪男は立ち止まった。大志は距離を置いて橋の手前で待機する。

長髪男が橋の下を覗き込んだりのんびり空を見上げたりしていると、やがて橋の向こう側からスーツ姿の中年男性が歩いてくるのが目に入った。

（あいつか？）

大志の緊張が高まる。橋の上となると周りに隠れるところが無い。敵はそれを見越してこんな場所を取引現場に選んだのかもしれない。中年男性は長髪男に声を掛けて橋の中央で立ち止まった。そして長髪男がポケットから何かのかたまり……おそらくは集めたエンブレムを渡す。中年男性がそれを数え始める。

（今だ！）

大志はダッシュした。大志の足音に気付いて中年男性がはっと顔を上げる。そして逃げようとするところに大志が追いついた。

「待ちやがれ！」と、大志が中年男の背中に手をかける。すると意外なことに男はくるりと振り返ると大志に向かって攻撃を仕掛けてきた。男のパンチを避けて大志がニヤリと笑う。
「ほお。やる気か？　望むところだ」
中年男は見た目４０歳ぐらい。少し小太りで髪の毛が半分白い。どうみてもそのへんにいるようなオヤジにすぎない。だからといって大志は容赦しない。狙いを定めた左のハイキックを放つ。
ズシッ！　と、手ごたえはあった。が、男は右腕一本でそれをガードした。
「何っ？」
中年男に蹴りを止められて大志は驚いた。
（こいつ……）
すかさず中年男が大志の足元を狙ってローキックを打ってくる。右の軸足を蹴られてはたまらないので大志は後ろに飛んでそれを回避する。
なおも中年男の回し蹴りが大志を襲う。
大志は辛うじてそれをやり過ごし、反撃の右足ミドルキック！
が、これも中年男が膝を高く上げてガードする。
そして男が右パンチを繰り出そうと前かがみになった瞬間、大志はバク転しながら右足のつま先で男のアゴを蹴り上げた！
その勢いで中年男は尻餅をつき仰向けに倒れた。
大志のサマーソルト・キックが見事に決まったのだ。
大志はゆっくりと中年男に近づき、屈みこんで持ち物を調べた。免許か何か身分の判るものがあればと思ったからだ。
「さっきの身のこなし……こいつ。タダモノじゃない。いったい何者なんだ……」
そう呟きながら大志が中年男の上着のポケットを探っていると、ふいに男が目を開けた。（？！）と、大志が反応するより早く男はいつの間にか手にしていたスプレー缶を大志めがけて噴射した。
「グッ！」と、素早く手でガードしたものの少し目に入ってしまっ

た。
刺すような痛みが大志の左目を蝕む。その間に中年男は大志を突き飛ばし、起き上がって走り去った。
「野郎っ！」と、大志もそれを追いかけようとするが片目のせいか足がふらついた。
中年男の後姿がどんどん遠ざかっていく。大志は中年男の消えた方角をいまいましそうに睨みつけながら吐き捨てた。
「クソッ！　当たりが浅かったか……」
無理に追うことはしない。おそらくこの先に車を停めているのだろうということは容易に想像できた。ここは駅から離れすぎている。それに目潰しのスプレーを用意していたぐらいの人間だ。こういうケースを想定して何らかの準備をしているはずだ。
「……だ、だいじょうぶ？」と、長髪男が恐る恐る声を掛けてきた。
「少し目をやられた。この辺に公園はないか？　できれば目を洗いたい」
「……あるよ。こっち」
長髪男の案内で大志は団地内の公園に移動した。そして洗い場で左目を重点的に洗い流す。（このピリピリするような痛みは唐辛子か……）
なかなか痛みが取れない。大志が熱心に目を洗っているとポケットで携帯が鳴った。
「……モーツァルトかよ」と、大志が濡れた手で携帯を取り出す。発信者の番号が表示されているのを確認して大志が電話に出る。この携帯はさっきの中年男からくすねてきたものだ。
『どういう事だ！　今、通達がまわってきたぞ！』
すぐにピンときた。おそらくカズが校長に言って上着を着て出歩くなという通達を回させたのだろう。
（ということは、この男は学校関係者……）
『また失敗とはな！　とんだ無駄金じゃないか。あんたそれでもプロか？』

しばらく喋らせておいた方が得策だと思って、大志はわざと低い声でぼそっと「いや、それは……」と、口ごもった。
『まったく！　こっちは時間が無いんだ。とにかくもうひとつの計画は大丈夫なんだろうな？　頼むよっ！』
そこで電話は切れた。しかし着信履歴にはしっかり番号は残っている。これだけでも大きな手がかりだ。
大志は目のケアもそこそこに学校に戻ることにした。取り合えず長髪男には二度とエンブレムの換金に応じないよう十分に言い含めておく。
「お前の換金もこれで終わりだ。あの男は二度と現れんだろう。もし、あの男から連絡が合った場合は必ず俺に連絡しろ。いいな？」
「……わかった」
「一応、裏サイトの掲示板にはエンブレムの交換は中止だと書き込んでおけ。それでも換金しに来るバカがいたらその時も連絡しろ。俺がボコボコにしてやるから」
「……うん。そうする」
長髪男はあまり利口そうな人間ではないが、さすがにお金にならないことはやらないだろう。それに加えてあと何人か加美村狩りに加担した連中を痛い目にあわせれば噂にもなる。そうなれば加美村狩りも自然に無くなるはずだ。

6　可能性

大志が学校に戻った時すでに授業は終わっていた。
大志が持ち帰った重要な手掛かりに勝春とカズが目を輝かせた。
「さすがだネ。おつかれさん！」
「この携帯は本部に送って解析してもらおう。それで色んなことが分かるはずだよ」
まだ痛むのか大志が左目を気にする素振りをみせる。それを見てカ

ズが心配する。
「どうしたの？　ケガかい？」
「いや。ちょっと催涙スプレーを食らった」
「……珍しいネ。油断したんじゃない？」
「まあな。大した事はないんだが、まだちょっと涙が……」
三人がそんな会話をしながら階段を上っていると上のほうから来た菊乃たちと出くわした。身体がぶつかりそうになった。それを避けようとした拍子に大志がバランスを崩す。
「ぐ、まだ目が……」と、大志が呻いたのを見て菊乃が思わず手を差し伸べる。そしてハンカチを大志の左目にあてた。それは無意識に行われたごく自然な行為だった。
珍しく大志が「スマン」と、素直に礼を言う。
「あ…」と、菊乃が反射的にハンカチから手を離す。
大志が「おっと」と、それを落とさないように自分の手を添える。
一瞬、菊乃の手の甲に大志の手のひらが触れた。手を引っ込めながら菊乃がぽつりと呟く。
「アタシの方こそ……ありがとう」
菊乃の視線と大志の視線が交錯する。そんな光景を横で見ていたカズが「あ」と、何か言いかけて言葉を飲み込む。ちょうどそこへ他の生徒達が階段を下りてきたので三人は上へ、菊乃たちは下へと向かった。
大志はハンカチで目を押さえながらゆっくりと上へ。
菊乃はドキドキを隠すように胸を押さえながら下へ。
そんな二人がお互いに意識し合っていることは周りから見ればミエミエだった。
美穂子は菊乃の耳元に囁きかける。
「良かったね。ちゃんとお礼言えて」
「ん……そうだね」
昨日の夜、美穂子が大志に直接お礼を言ったのに対して菊乃は「女性アレルギー」のショックで言いそびれていた。面と向かって助け

てもらったお礼を言いたい。それは今、思わぬ形で実現した。が、大志にちゃんと伝わったかどうかは分からない。
（これでゴッキーがアレルギーじゃなければ素直に喜べるんだけど……）
菊乃は複雑な気持ちでちょっとだけ美穂子に笑顔を見せた。

＊　＊　＊

一方、3人組はいったん教室に戻り、簡単に情報を整理してから校長に報告することにした。
大志の報告からするともう一息で今回の事件は収束に向かうと思われた。
「……そういうわけで俺は今日明日、換金所に張り込んでくる。ノコノコと換金しにきたバカをボコボコにしてやらんとな」
「じゃ、オレは掲示板だネ。加美村を狙うヤツが二度と出ないようにあっちこっちに書キコしまくるヨ」
「そうだね。大変だけど念には念を入れた方がいいね。じゃあボクは中年男から押収した携帯の履歴を調べるよ。もしかしたら誰が加美村狩りに応募してきたか分かるかもしれないしね」
「よし。これで一応、メドはついたな」と、大志がハンカチを目にあてたまま背伸びをする。
「じゃ、報告しに行きますかネ」と、勝春が立ち上がる。
三人は教室を出て校長室に向かうことにした。
カズが勝春にそっと耳打ちする。
「ね、気付いてたかい？」
「エ？　何がダヨ？」と、勝春が不思議そうな顔。
「ハンカチだよ。変だと思わない？」
「あ、そっか。そういえばそうだよネ」
カズが小声で続ける。
「アレルギー。出てないよね。ということはもしかして……」

「もしかするかもヨ」
数歩先を歩いていた大志が振り返る。
「何だお前ら。さっきから後ろでコソコソと」
カズがちょっとおどけた表情で「いや。何でもない」と、首を振る。
その隣りでは勝春がニコニコしている。
「ちぇ。何だよ。まったく」
大志はスタスタと先を歩く。カズと勝春は顔を見合わせながらしばらくは黙っていることにした。なぜなら女の子のハンカチを顔に当てていることに大志本人が気付いていないのだから。

第四話　校内賭博事件　上

1　祝勝会

加美村狩り事件が解決したお祝いに今日は五人で祝勝会をすることになった。

お祝いといってもそこは少々過疎っている近所のレストラン。お酒もなければ派手な演出も無い。身内だけのごくささやかな夕食会だ。そんな中でも勝春はさすがに自ら幹事をかってでただけあって一人テンションが高い。

「サァ！　みんな！　どんどん好きなもの頼んでネ。今日は大志のおごりだヨ～！」

「……何で一番働いた俺のおごりなんだ？」と、大志が不満そうな顔をする。

「いいジャン！　太っ腹なトコ見せてやんなヨ！」

この会は勝春とカズの提案で実現した。表向きの理由は危険な目にあってしまった菊乃と美穂子を励ますこと。そしてもうひとつ、裏の理由は席順に隠されていた。ひとつのテーブルに3人2人で向かい合うのだが、まず菊乃を挟む形で大志と勝春がその両脇を固める。そして対面側にはカズと美穂子が並ぶ。このところギクシャクしはじめた関係の修復というのが本当の目的、ともいえる配置だ。

美穂子はカズと隣り合わせになって少し嬉しそう。だが今までのようにストレートな喜び方は見せない。一方、菊乃は大志の隣の席ということに躊躇いの表情を見せた。それに対して大志は菊乃が隣に座ると分かった瞬間、微かにそれを意識するような素振りを見せたが、その後はつとめて冷静を装った。菊乃と大志の間にはお互いが相手の存在を認識しているのにわざとそれに気付かないフリをしているような空気が流れていた。

「ね。森野さんは何にする？」と、カズはいつになく積極的に美穂子に話しかける。

美穂子は美穂子で、そんなカズの態度に少々、面食らっている。
「え？　……まだちょっと」
「ボクはエビフライとハンバーグのセットにするよ。森野さんも同じのでいい？」
「あ、わたしエビはちょっと……」
「そっか。じゃあラザニアとか軽めの単品にしてデザートをドーンといこうか？」
「そ、そうだね」
そう答える美穂子の笑顔にはまだ余裕が無い。何しろあんな怖い目にあってしまったのだ。ここ数日、美穂子と菊乃の表情が固いのも無理はない。それを心配してカズと勝春は二人を元気付けようとしているのだ。
「オレは断然、ステーキだネ。大志はコロッケでいいんダロ？」
「いや。ここのはカニクリームだから食わん。……邪道だ」
大志が難しい顔をしてコロッケごときに「邪道だ」というものだから、それを見て菊乃は思わず吹いた。
「プッ……なんで？　カニクリームだって美味しいよ？」
美穂子もつられて笑い出す。
「ププッ……じゃ、ひょっとしてカレーコロッケもダメなの？」
女の子二人に笑われて大志が顔を赤らめる。
「……も、勿論だ」
自然とこみ上げてくる笑いには不思議な効果がある。カズと勝春が笑いの輪に加わることでさらに場は和やかな空気に満たされていった。

結局、3時間ほど楽しくすごした後で会はお開きということになった。お勘定は先に大志が済ませてきた。そこで勝春が皆を代表して礼を言う。
「いやぁ悪いネ。でも、8万も儲かったから平気だよネ？」
それを聞いて大志がきょとんとする。

「８万？　何のことだ？」
「アレ？　だって歯抜けの天然パーマから没収したんじゃなかったっけ？」
「ああ、あれか。あれならコンビニの募金箱に突っ込んできた」
「ハ？　マジで？」と、勝春が目を丸くする。
カズが苦笑する。
「悪銭身につかず。汚い金は持ちたくないんだよね。大志は」
「マァ、大志らしいけど……ちょっと悪かったカナ」と、勝春は反省する。
が、肝心の大志は大して気にも留めずさっさと店を出てしまった。
「ホントにいいのかなぁ」と、気にする美穂子に向かって菊乃が言う。
「いいんじゃない。今更、ワリカンとか言ったら怒るんじゃないかな」
「そう？　でも……」
「だったら、後で別な形でお礼した方がいいと思う。その方がゴッキーのメンツもたつだろうし」
それを聞いて勝春とカズが「へぇ」といった風に感心した。
「菊ちゃん、よく分かってるネ」
「ボクもその通りだと思う。藤村さん、大志の性格が分かってきたんじゃない？」
二人に褒められて菊乃は照れ笑いを浮かべた。
「や、そういうワケでも……」
勝春たちの笑顔を見ていると自然と心がなごんでくるような気がして菊乃は幸せな気持ちになった。
（まるでずっと昔からの仲間と一緒にいるみたい……）
それは美穂子も同じなようで彼女の表情にも以前の明るさがだいぶ戻ってきた。そんな風に心も満タンになって菊乃たちはレストランを後にした。

＊　＊　＊

改札口の向こう側で菊乃と美穂子が三人に向かって「ありがと」「またね」と、元気よく手を振る。カズと勝春は、「また明日」「気をつけてネ」と、二人の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。大志だけは一歩下がった位置で腕組みをしながらそんな様子を黙って眺めていた。

「さ。ボクらも帰ろうか」

「そうダネ」

そう言って帰ろうとするカズと勝春を大志が呼び止める。

「おい待てよ」

二人が足を止めて振り返る。大志が少し怒ったような口調で尋ねる。

「……どういうつもりだ？　お前らも分かってるはずだろう」

カズは大志の顔を見ながら冷静に答える。

「分かってるよ。事件が片付いたらこの学校ともお別れだってことぐらい」

「だったらなぜ情がわくようなことをする？　今までこんなことは無かったはずだ」

勝春が軽くため息をつく。

「そうだネ……確かに今回は例外的だネ。でもサ。今回は彼女たちに協力してもらってる手前、何らかのお礼がしたいっていうのがあったんダ」

カズが神妙な顔をしてフォローする。

「結果的にボクらのせいで怖い目に合わせてしまったからね。それに何ていうのかな。たとえ短い間の付き合いだったにしても、彼女たちにはボクらの感謝の気持ちを覚えておいて欲しいっていうか……」

「つまり、思い出作りってわけか？」と、大志のコメントは冷ややかだ。

「ま、まあ、そういうところだね」と、カズの表情が強張る。

「下らんな。しょせん俺たちは流れ者だ。下手に関わる方が、かえって傷つけることになると思うがな……」
大志とカズのやりとりを聞いていた勝春が「アレ？」と、何か思い出した。
「そういや大志。菊ちゃんにハンカチ返してないよネ？」
「うっ。そ、それは……」と、痛いところを突かれて大志が口ごもる。
「駄目ジャン。覚えてたならさっさと渡せばいいのに。せっかくのチャンスをサァ」
勝春に突っ込まれて大志がしどろもどろになる。
「いや、しかしだな、その、あの場で、ハンカチはちょっと、それに、タイミングが……」
カズが（ほらね）といった風に追い討ちをかける。
「ほら、そういう大志だって同じじゃないか。藤村さんに対する態度。いつもと違うじゃない」
「そ、それはだな」と、言いかけて大志は言葉を飲み込んだ。否定すればするほど墓穴を掘ってしまうような気がしたからだ。大志はポケットに忍ばせたハンカチの感触を確かめながら、心の隅にひっかかっている気持ちと菊乃の存在の関連性について考えてみた……。

2　深刻な事態

「またも重大な事件だ」と、校長は眉間に深いシワを寄せて呻いた。
「どういうことですか？」と、カズが続きを促す。
「ウム。実はだな。校内で賭博をしているグループがあるという噂が漏れ伝わってきたのだ」
賭博と聞いて勝春が目を丸くする。
「校内でトバク？　賭博ってギャンブルのことですよネ？」
「そうだ。それも組織的に行われているらしい。表面には出てこんがな」

大志が腕組みをしながら呟く。
「組織的ってことは……友人同士で昼飯を賭けるとかのレベルではないということか」
「ウム。その通りだ。実体は分からんが、一説には何十人もの生徒が参加しておるということだ」
校長の言葉を聞いてカズが唇を噛む。
「もしかしてこれも何者かが裏で……」
「それは微妙なトコだネ。ギャンブル好きな連中が勝手に集まってんのかもしれないしサ」
勝春の楽観的な感想に対してカズは冷静に分析する。
「いや。それはどういう方法で賭博をしてるかにもよると思う。果たして高校生だけでそんな大規模な組織作りができるかどうか……だから裏で大人が入れ知恵してる可能性もゼロではないはずだよ。それに大志が聞いたもうひとつの計画っていうのも気になるし」
カズのいう「もうひとつの計画」とは、大志が加美村狩り事件の黒幕から奪った携帯に電話してきた謎の人物が口にした言葉だ。
カズの分析を聞いて校長は唸った。
「ムムゥ……それは分からん。が、これが表ざたになってしまうと我が学園の評判は地に落ちてしまうだろう。正直言ってこれ以上、生徒が減ることは死活問題なのだ。最悪、閉校も考えねばならん」
加美村学園を取り巻く環境が深刻化していることは校長も憂慮しているようだ。
大志がこれまでの経緯をおさらいする。
「はじめの柔道部事件にしても進学実績水増し事件にしても、もしマスコミに報道されていればこの学校のイメージは確実にダウンしただろう。これもパターンが似てるな」
「そうだネ。裏で操ってる人間は、後でマスコミにリークすることを前提に先に事件を起こしているような気がするヨ」
勝春のコメントにカズが同意する。
「そうだね。前回の加美村狩りにしても事件が公になれば生徒は激

減するはずだし、黒幕の目的はこの学校の存続を危うくすることであることは間違いない。ということはそうなる前に事件を解決しないとまずいって訳か」
校長が悲痛な面持ちで懇願する。
「君らの力で何とかしてもらえんか……」
カズと勝春が力強く頷く。大志は首をパキパキと鳴らして気合を示す。
敵はいよいよ本格的にこの学園を陥れようと攻撃を仕掛けている。否が応でもミステリーボーイズたちの緊張も高まる……。

＊　＊　＊

二時限目の休み時間に菊乃がカズにそっと耳打ちした。
「きのうはごちそうさま」
「あ、いやボクたちの方こそ。遅くまで引き止めちゃって申し訳ない」
「で、ちょっと話があるんだけどいいかな？」
「いいけど？　ボクだけ？」
「そ。カズ君にこっそり聞きたいことがあるんだ」
そう言って菊乃は大志や勝春に見つからないようにカズを教室の外に連れ出した。
廊下の突き当たりには扉があって、その先には非常階段がある。菊乃は非常階段に出て、周りに知り合いがいないことを確かめてからカズにお願いをした。
「ゴッキーに昨日のお礼がしたいんだけど、プレゼント……何がいいか一緒に考えて！　お願いっ！」
「……ああ、そういうことか。それはいいけど。何でもいいんじゃない？　気持ちがこもってれば」
「でも、せっかくだからゴッキーが喜ぶものの方がいいじゃない。ね、何かない？」

「大志の喜ぶプレゼントねえ……「筋力トレーニングの機械」とか「刀」かなあ」
「……や、それは無理」
「じゃあ、手作りで小物なんか作ってあげれば？　ストラップとか」
「分かった。それで考えてみる。で、どうやって渡せばいいと思う？」
「どうやってって……「ハイ、プレゼント」でいいんじゃない？」
菊乃は確信した。やっぱりカズは女心がまったく分かっていない。
「だから……普通に渡しても受け取ってもらえないかもしれないから相談してんの！」
「あ、そうだ。だったら、ちょうど来週、大志の誕生日だから、そのお祝いってことにすればいいかもよ」
「来週？！　来週って……いつ？」
「９月２１日」
「え！　マジで？　ウソでしょ……」
菊乃の反応を見てカズが首をかしげた。
「どうしたの藤村さん？」
「まさか同じだなんて……」
「え？　ひょっとして藤村さんも同じ日なの？」
「ん……」と、菊乃が頬を染める。
「そうなんだ。おめでとう！　でも偶然だね」
「ホント偶然。超あり得ない……」
「いや、そんなことないよ。だって人間、５０人集まると必ず同じ誕生日の人が一組できるからね」
「え？　そうなの？」
「そうだよ。確率論的にね。なんなら証明してみようか？」
「や、それはいいけど……そっかゴッキーと同じなんだ」
思わぬ偶然に胸がときめいてしまうことを菊乃は押さえきれない。運命的な何かを感じる、といったら大げさかもしれない。が、その時の菊乃には何か不思議な縁で結ばれているような気がしてならな

かった。頭の片隅には「大志の女性アレルギー」というものも残っていたが、それも何とかなるという希望の方が大きかった。それどころか（それって浮気できないってことだからアタシにとってはラッキーかも）と、都合のいい解釈すら菊乃の中には芽生えていた。誕生日が同じという偶然。その事実が菊乃に勇気を与えてくれた。

＊　＊　＊

昼休み。五人揃っての作戦会議。いつものようにカズが仕切る。
「さて。早速、今回の分担を決めたいところなんだけど、今回の事件はまだまだ分からないことが多すぎるからね。まずは全員で情報収集をしなくちゃならないね」
情報収集と聞いて勝春が胸を張る。
「じゃあ、オレの出番だネ。早速、校内ネットワークを利用して……」
勝春の言葉を聞いて美穂子がすかさず「校内ネットワークって何？」と、尋ねる。
そこでカズが勝春に代わって説明する。
「勝春の築いた人脈のことだよ。これで校内の７０％の情報はカバーできるらしい」
「へぇ」と、美穂子が感心する。菊乃も驚く。
「へ？　だって転校してきてまだ一ヶ月もたってないのに？」
「まあネ。友達の友達はみ～んな友達だヨ！」と、勝春がにっこり笑う。
「ただ……」とカズが少し表情を曇らせる。「勝春のネットワークをフル活動させるのは勿論だけど今回は秘密組織が相手だからね。広く浅く情報を集める方法では苦戦するかもね」
「その通りだ」と、大志が口を挟む。「校内で賭け事をやるなどもってのほか。おそらく賭け事をしている連中は自分がメンバーであることを隠しているはずだ」

確かにそれは一理ある。絶対に秘密厳守でなければ校内で堂々と賭けをすることはできないはずだ。
勝春がしばらく考えて提案する。
「でもサ。メンバーを集める為には勧誘しないとならないよネ。てことはそこが狙い目なんじゃないカナ？」
カズが頷く。
「なるほど。賭ける人間が多ければ多いほど元締めの儲けは大きくなるはずだから勧誘は続いている可能性があるね」
そこで美穂子がいつもの質問攻撃。
「モトジメって何？」
話のコシを折られてもカズは嫌な顔をせずに教えてくれる。
「元締めっていうのはね「胴元」とも言うんだけど、要するに賭けの主催者ってことだよ。主催者は賭けをする時に掛け金を集めるよね。で、そのうちの何割かを取って、残りを当たった人の配当金にするんだ」
「へぇ、そうなんだ」と、菊乃も疑問に思っていたので納得する。
カズが調査の方針についてまとめる。
「ポイントはどうやってお金をやり取りしてるのか……その方法を突き止めることだね。で、そこから元締めの正体を割り出す。元締めを押さえれば組織は解体できるはずだからね」
勝春が大きく頷く。
「その為にはまず賭けに参加してるメンバーを見つけることだネ。任せといてヨ！」
大志が勝春の顔を見ながら言う。
「そうだな。メンバーさえ見つけてしまえば後は勝春の得意分野だからな」
それを聞いて美穂子が妙な顔をする。その顔つきは何か変な想像をしている証拠だ。菊乃が美穂子に突っ込む。
「美穂子、何か変なこと考えてない？」
「いや……ちょっとね。カッチーが机叩きながら「さぁ吐け！」と

かやってるトコ想像しちゃったから……」
美穂子のボケに四人がずっこける。勝春が苦笑しながら美穂子に説明する。
「あのサ。刑事ドラマじゃないんだから……」
大志もやれやれといった感じで説明に加わる。
「つまり、勝春には誰とでも仲良くなる特技があるってことだ。それで相手をたらしこんで情報を聞き出すという寸法だ」
「何だヨ。「たらしこむ」って嫌な言い方ダナ～」
勝春の特技については菊乃もうすうす感付いていた。特進クラスの事件の時に勝春がターゲットとあっという間に親しくなってしまったのを間近で見ていたからだ。
昼休みが終わりそうになったところで作戦会議は終わった。
こうして五人はすぐに手分けして情報収集にあたることとなった。

3　恋の病

放課後、夕暮れ間近の西の空を眺めながら菊乃は途方に暮れていた。はりきって情報収集をはじめたものの具体的にどう動けば良いのか分からず、調査はすぐに行き詰ってしまったからだ。クラスの親しい友人たち、それと別なクラスの知り合い数人に「校内で賭け事してる人知らない？」と聞いて回っただけで聞き込みはあっさり終わってしまった。勿論、成果はなし。
（なんかアタシって友達少ないのかも……）
菊乃は少し落ち込んだ。こうしてみると意外に自分の交際範囲が狭いことに気付かされる。特に部活をやっているわけでもなく、いつも美穂子とつるんでいるうちに知らず知らずのうちに交友関係が限られてしまったのかもしれない。
（どうしよ。他の学年なんてもっと知らない人ばっかだし……）
菊乃が自動販売機前のベンチで独り考え事をしていると、「菊ちゃ

ん！」と後ろから声を掛けられた。振り返ると勝春が立っていた。
「どうしたの。そんなシケた顔してサ」
「うん……なんか全然成果なくって」
「ま、焦ることないサ。大志も言ってたジャン。今回はそう簡単に情報は集まらないかもってサ」
「でもね。なんかアタシって友達少ないのかなぁなんて気がしてさ」
「ハハ。どうしたの？　随分、弱気だネ」
「アタシ、カッチーみたいに顔広くないし」
「別に友達は数じゃないでしょ。例えばサ。携帯の電話帳に何十人登録したところで、本当に話したい時に話せる人は何人いるヨ？人間、身体はひとつしかないんだから、親友なんてそんなにいっぱい持てないヨ」
「そっかなぁ……」
「あんまり深く考えないことだネ。本当の友達っていうものは、どんなに離れてたって仲間なんだからサ」
勝春の笑顔と夕焼けに染まったピンクの雲を見ていると菊乃の心も随分軽くなった。
「ありがと。やっぱカッチーは癒し系だね」
「そりゃどうも。いいホメ言葉だヨ」
そんな勝春の笑顔につられて菊乃の表情も明るくなる。
（やっぱカッチーには人を元気付ける才能があるんだなぁ。それが天然てトコがまた凄いんだけど）
菊乃は気分転換に思いっきり深呼吸をした。そして、明日は質問を変えてもう一度、知り合いに聞いて回ろうと思った。

＊　＊　＊

次の日の昼休み。会議の席上で情報交換を行った。
まずは美穂子が独自に集めた情報を披露する。
「2年3組の福見くんはね。競馬が大好きなんだって。毎朝スポー

ツ新聞買って研究してるみたい」
「ほお」と、大志がやる気のない声をもらす。
「それからね。2年4組の辻内くん。株とかに興味あるんだって。なんだっけな。確か「ゲイ・トレード」とかいって……」
「ほお」と、またしても大志が適当な相槌をうつ。そして美穂子の間違いを指摘する。
「それを言うなら「デイ・トレード」だろう。一日で何回もトレード、つまり株の取引をして利益をあげることだ」
「え？　そうなの？」と、美穂子が真顔で大志の顔を見る。大志は呆れ顔で突っ込む。
「男色家を交換してどうする？」
「え、なになに？　ダンショクカってなぁに？」
話についていけず美穂子は少し焦った。
そこでカズがトホホ、といった表情で美穂子に説明する。
「あのね。森野さん。さっき「ゲイ」トレードって言ったでしょ。つまり、男色家っていうのは男が好きな男の人のことだから……」
「あっ！」と、言って美穂子は絶句した。自分が何を言ってしまったかやっと理解できたらしい。
結局、美穂子が集めてきた情報の大半は、賭け事を好みそうな生徒に関するものだった。一通りそれを聞いてからカズが感想を述べる。
「ありがとう森野さん。ただ、ギャンブル好きが必ずしも賭け組織のメンバーとは限らないからね。候補には挙げられるけど」
褒められたようなそうでないような気がして美穂子は複雑な顔をした。確かに切り口は間違っていないと菊乃も思う。が、カズが言うことも分かるような気がする。ギャンブル好きな生徒を片端からあたっていけばいつかはメンバーに当たるかもしれない。が、それでは対象が絞りきれない。もう少しプラスアルファの情報が必要なのだ。
次に大志が報告をする。
「俺は不良っぽいヤツを選んで片端から聞き込みをやってみた。ま、

もともとこの学校には分かり易い不良ってのは少ないんだがな。だが、あいにくこれといった情報は得られなかった」
大志の聞き込みというのがどういうものかは菊乃にもだいたい想像はできた。
（聞き込みっていうより脅迫に近いんじゃ……）
勿論、そんなことは口が裂けても言えない。ようやく大志の顔をまともに見れるようになったばかりなのだ。
カズの方も大した成果はなかったらしい。
「ボクは顔見知りが少ないから主にネットで調べてみた。こないだの学校裏サイトとかを中心にね。でも当たりはなかったよ」
そこで大志が尋ねる。
「校長にきた情報源はあたってみたのか？」
「勿論。メールでの内部告発だったんだけどね。解析してみたけど無駄だった」
となると期待されるのは勝春の情報網だ。しかし、勝春の口は重い。
「それがサ。イマイチなんだヨ」
「どうしたの？　勝春らしくないじゃない。いいから聞かせてよ」
と、カズが続きを促すが勝春の歯切れは悪い。
「それがネ。情報は多いんだけどサ。全然ウラが取れなくて……ちょっと苦戦してるんダ」
「フン。情報化社会の落とし穴だな」と、大志が嫌味っぽく言う。
「そっか。やっぱり簡単にはいかないな」と、カズも珍しく弱気だ。
最初の作戦会議でカズが危惧していた通りになってしまった。やはり秘密の組織というだけあって、賭け組織のメンバーはみんな口が堅いのだろう。そうでないとすぐにバレてしまうはずだ。
そこで菊乃が恐る恐る口を開いた。
「もしかしたら……関係ないかもしれないんだけど、今朝聞いた話があるの」
「どうぞ。何でもいいから話してみて」と、カズが半分投げやりな口調で続きを促した。

「あのね。今日アタシが話を聞いたのは、一年の時に同じクラスだった女の子で友美って子なんだけど、同じクラスの彼氏が最近、変なんだって。例えば、デート中なのにしょっちゅう携帯チェックするようになったって。別に着信があるわけでもないのに」
菊乃の報告にカズが反応した。
「そ、それで？」
「でね。友美がそのことで怒ったらプレゼントでごまかされたんだって。結構、高いアクセサリー貰っちゃったから許したって言ってたけど」
カズの顔が途端に活き活きしてくる。
「藤村さん……それ、当たりかも！」
「え？　そっかなぁ」と、菊乃の方が困惑する。
カズは興奮気味に尋ねる。
「その子、他に何か言ってなかった？」
「うーん。どうかなぁ……あ、あと新聞ばっか読んでるって。スポーツ新聞」
そう答えながら菊乃もピンとひらめいた。
「そっか！　スポーツ新聞！」
大志がゆっくりと首を回しながら呟く。
「携帯チェック、高価なプレゼント、スポーツ新聞、確かに材料は揃っているな」
勝春も菊乃の情報に関心を示す。
「なるほどネ。そっちからアプローチしたのか。やるネ、菊ちゃん！」
相変わらず話についていけない美穂子がだダダをこねる。
「なになに？　ひょっとして私だけ？　やだやだ！　分かるように説明してよ～」
まぁまぁ、とカズがそれをなだめながら断言する。
「おそらく携帯だよ。賭けの方法は」
「ダネ」と、勝春が頷く。

「藤村さんの情報から推測すると、メンバーは携帯で特定のサイトにログインして賭けているんだろう。多分、その友美って子の彼氏は携帯でオッズをチェックしてたんだと思う」
「オッズてなぁに？」と、美穂子がいつものように語句説明を求める。
「賭け率のことさ。例えば、Ａの勝ちに１．５倍のオッズがついてたとするよね。その時、Ａが勝てばＡに賭けてた人は掛けたお金の１．５倍の配当を受け取れるってことなんだ」
いつもながらカズの説明は丁寧だ。美穂子は「なるほど」と感心する。
「でもサ。高価なプレゼントしたってことは一発当てたらデカイってことだよネ？　どんな賭けなんダロ？」
勝春の疑問に大志が答える。
「恐らくは何かのスポーツ、それもある程度勝敗がつきやすいもの……野球じゃないか？」
「ボクもそう思う。たぶんプロ野球だろうね。ただ、一試合ごとの勝ち負けじゃ大きな配当は期待できないだろうからセ・リーグ三試合の結果をまとめて当てるとかじゃないかな」
カズが推理するように、もしも三試合の結果を的中させることを賭けの対象とするなら勝ち負けの三乗、つまり８通りの組み合わせができる。これならある程度の配当も期待できる。
がぜんやる気の出てきたカズが勝春に声を掛ける。
「勝春！　出番だよ！」
「わかってるヨ」と、勝春もすかさず返事をする。
やる気を取り戻したカズと勝春を見守りながら菊乃はダメもとで報告した自分の情報が思わぬ効果をもたらしたことに喜びを感じていた。そしてチラリと大志の表情を盗み見た。すると菊乃の視線に気付いた大志が小さく一言「……でかした」と、言った。
（デカシタ？　……それって褒めてる？）
その一言で菊乃の鼓動がひときわ大きくなった。

「ところで、なぜその情報に注目した？」と、大志が聞くので菊乃はちょっと考えてから答えた。
「口が堅いってことは、本人に聞くより周りの人に聞いたほうがいいかなって。で、彼氏がいる子にしぼって聴いてみたらどうかなって思ったの」
「女の方が男の変化に気付き易いってことか。なるほど。女ならではの発想だな」
（ゴッキーが褒めてくれた！）
大志が話しかけてくれた。そして褒めてくれた。ただそれだけで菊乃の胸はいっぱいになっていく……。

4　本部からの警告

勝春のターゲットは2年2組の「久保田実」。菊乃の話に出てきた友美の彼氏だ。
勝春の作戦は単純明快。まず、通学の時に同じ電車に乗り、野球の話題をふってアプローチする。そこから親しくなろうというものだった。
その辺り、勝春も手馴れたもので、事前に久保田の住所を調べた上で早起きして駅で待ち伏せ、そして電車で隣をキープするところまですんなり進める。そして、久保田が駅のキオスクで買ったのとは違う種類のスポーツ新聞を持って話しかける。
「……四連敗中じゃ今日もオリックスの負けはガチだネ」
つり革につかまって熱心に新聞を読んでいた久保田が驚いて勝春の方を見た。
〔はじめは独り言のように呟き、相手が反応したら親しげに話しかける。その際には出来る限りなれなれしく……〕
それが勝春のセオリーだった。この時のポイントは1．会話を途切れさせないこと、2．相手にＹＥＳと言わせるような問いかけをす

ること、の二点だ。
「オリックスってサ。打線がダメだよネ？」
勝春の顔に見覚えのない久保田は当然（こいつ誰だっけ？）といった顔をする。
「日ハムとの相性も悪すぎなんだヨ。昨日も日ハムに負けてるしネ？」
あまりにも勝春が親しげに話しかけてくるものだから久保田も思わず「あ、ああ」と、応えてしまう。すかさず勝春は次の質問をする。
「昨日、ロッテは勝ったンだっけ？」
「あ、ああ。勝った」と、久保田が頷く。
「ソフトバンクは五連勝かァ。調子いいよネ？」
「そ、そうだね」
こんな調子で勝春は久保田にＹＥＳと言わせる質問ばかりを五つ続けた。この方法は心理学に基づいている。つまり、わざと「ＹＥＳ」を五回以上言わせることで相手に親近感を持たせるのだ。
　そして勝春の目論見どおり、学校につくまでの間に久保田と仲良くなることに成功した。同じ制服、同じ趣味ということが分かれば、仲良くなることはさほど難しいことではない。しかし、勝春はそれをいとも簡単にやってのける。
２組の教室のところで「じゃあネ」と、久保田と別れる勝春を先に登校していたカズが見つけてにっこり微笑む。
「さすがだね。いつものことながら感心するよ」
「まあネ。もしかしたら彼、オレも「賭け組織」のメンバーなんじゃないかって思ってたかもネ」
「賭け組織の事は何か言ってた？」
「いや。それは言わなかったヨ。野球の話をしただけサ」
「やっぱり口が堅いんだな。仲間かもしれないと分かっててもロに出さないなんて」
「ダネ。けど時間の問題だヨ」
「頼むよ。もっと仲良くなって組織の秘密を聞きだしてね」

＊　＊　＊

本部から緊急招集がかかったということで三人は放課後すぐにマンションに戻った。
勝春としては久保田とより親密になるために放課後を有効に使いたかったところだが、本部からの召集では止むを得ない。
リビングではすでにカズがＴＶ会議の準備を終えて勝春と大志を待っているところだった。
「あれ？　大志は一緒じゃないの？」と、カズが呆れる。
「アイツ、また遅刻かヨ。マスターに怒られるゾ」
そういう矢先に大志がバタバタと室内に駆け込んできた。
「遅いよ、大志！」と、カズが大志を咎める。
「すまん。さ、早くはじめてくれ」
カズがスイッチを入れるとＴＶのモニターにカーテンが映し出される。
『全員揃っておるかね？』
カーテンには誰かのシルエットが投影されている。相変わらずマスターは姿を見せない。音声だけなのはいつものことだ。
「はい。勝春と大志も居ます」
『よろしい。では早速だが……先日の押収品の分析結果が出た』
押収品というのは前回の事件で大志が黒幕と思われる中年男から奪った携帯電話のことだ。
「で、見えざる敵の正体は、やはり学校の関係者でしたか？」と、カズが尋ねる。
『そうだ。詳しい情報は後で送る。後は君達で対処したまえ』
「了解。任せて下さいヨ！」と、勝春が軽く敬礼する。
そこで大志が口を開く。
「しかし……それだけ伝えるのにわざわざ緊急招集はかけんでしょうが。他に何かあるのでは？」

『うむ。察しがいいな。実は君達に警告しておかなくてはならない事態が発生した』
「警告？」と、カズが神妙な顔つきでメガネに触れる。
『今回の案件、やはりＮＳ機関が関与しておるようだ』
「エヌエス機関？！」と、大志の表情が強張る。
『そうだ。これまでの報告を見る限り一連の事件は一概の学校教師の仕業ではない』
カズがメガネを直しながら言う。
「でしょうね。つまり、加美村学園の崩壊をもくろむ教師がＮＳ機関に依頼してこれまでの事件を引き起こしていた、ということですね」
『その通りだ。あの携帯電話の持ち主はＮＳ機関の幹部の物と判明した』
「どうりで……クソッ！」と、大志がいまいましそうに吐き捨てる。
「弱ったネ。バックにＮＳ機関がついてるなんてサ……」
『それともうひとつ悪い知らせがある』
「これまで良い知らせなんてありましたかね？」と、大志が嫌味っぽく言う。
『まあ、そう言うな。これは現時点で判明している情報なのだが、敵は君達の存在に気付いたようだ。それで最強の「刺客」を送り込む準備をしているらしい』
「シカク、ですか……」と、呟いてカズが静かに目を閉じた。
「フン。望むところだ」と、大志は逆に闘志を燃やす。
「それは厄介ですネ。で、どんなヤツなんです？」
勝春の質問にマスターは淡々と答える。
「名前は「イワン・オトコフスキー」。年齢は君達と同じだ」
「同い年？　フン。なめられたもんだな」
『大志よ。油断するでない。情報ではかなりのやり手だぞ』
その名前を聞いてカズが首を捻る。
「でも何で外人なんだろ？　そいつは何者なんです？」

『名前から分かる通りロシア人、それも元ロシア軍の超エリートだ』
「ロシア軍？！」と、三人が同時に驚きの声をあげた。
『１５歳で少尉にまで昇進した極めつけのエリートだ』
カズが信じられないといった表情で尋ねる。
「有り得ない……でも、そんなエリートがなぜ？」
『問題はそこなのだ。なぜ元ロシア軍のエリートが刺客として送り込まれるのか？　君らの疑問はもっともだ』
「何か特別な事情でも？」と、大志が怪訝な顔をする。
『そ、それがだな。そのぅ……つまり……』
珍しくマスターの歯切れが悪い。何か言いにくいことでもあるのだろうか？
『つ、つまりだな。その、彼の性癖に問題があってだな、軍隊を追い出されたらしいのだ』
「セイヘキって……」と、意外な理由にカズが絶句する。
『ま、何と言うか、その、それが危険な理由でもあるんだが、ま、君達も気をつけてくれたまえ』
大志が半ば呆れて言う。
「なんです？　はっきり言って下さいよ」
『……そうだな。彼の性癖。その、つまり徹底的な「男色」なのだよ』
「ああ……」と、カズが脱力する。
「ホモかよ……」と、大志がゲンナリする。
『あなどってはならんぞ！　彼は筋金入りのホモ・セクシャルだ。何しろ彼の所属した部隊は全員、無理やりその世界に引きずり込まれたという伝説があるぐらいだからな』
勝春が顔を引きつらせながら呟く。
「む、無理やりですか……それも凄いですよネ」
『良いかね。絶対に彼と二人きりになってはいかん。力ずくでやられてしまうぞ』
「やられるって何を……やれやれ」と、カズが首を振る。

最強の刺客「イワン・オトコフスキー」！
マスターの話を聞いただけでは全くイメージがわかない相手だ。が、この刺客がどのような妨害工作を仕掛けてくるのかは未知数だ。
ＴＶ会議の回線を切りながらカズがボヤく。
「何なんだろうね。最強の刺客って。何が最強なんだか……」
「なんか緊張感に欠けるよネ……」
「いかん。頭が痛くなってきた……」
そうはいっても敵は本気で攻撃を仕掛けてこようとしている。ということは決戦の日は確実に近づいているのだ……。

5　鍵は図書館にあり！

翌日、始業前に大志が突然、菊乃のそばに寄ってきて言った。
「……休み時間は全部空けておけ」
いきなり大志にそんなことを言われて菊乃は動揺した。
（な、な、何で何で？　えぇーっ？）
心の準備もあったものではない。
「勝春とカズは別な調査で手が離せん。俺とお前でターゲットをマークする」
（なんだ。調査か……）
菊乃は内心がっかりした。でもそこは気の持ちようだ。少なくとも今日一日は二人きりになれる。

しかし菊乃が思い描いていたのとは裏腹にターゲットのマークは楽ではなかった。
まず自分たちの授業が終わったら速攻で隣の教室に飛んでいかなくてはならない。
次に怪しまれないようによその教室の中を監視しなくてはならない。これが結構大変だ。とても二人きりを楽しむ余裕などない。それに大志は調査第一で菊乃がドキドキしていることなどまったく気がつきもしない。そんな具合でマークしたところ……。
1～2時間目休み時間。特に動きなし。ターゲットは宿題の複写？
2～3時間目休み時間。友達と談笑。携帯チェック×2。
3～4時間目休み時間。友達とトイレ。大志がついていくが特に目立った行動なし。
そして昼休み。やっと動きがあった。ターゲットは食堂に行こうという友達の誘いを「俺、先に図書館寄ってから行くよ」と、断っ

た。そして一人で教室を出ると階段に向かった。

ターゲットの久保田を尾行しながら大志が呟く。

「昼飯も食わないで図書館だと？　とても読書好きには見えんが」

菊乃も疑問に思った。

「なんですぐ図書館なんだろ？　お昼食べてから行けばいいのにね」

「先に行かないとならない理由でもあるのかもしれん」

久保田は階段で四階まで上がり図書館に入っていく。それに続いて大志と菊乃も図書館に足を踏み入れる。

お昼休みに入ってすぐに図書館に来る人はほとんどいないので室内はガラガラだった。大志と菊乃は二手に分かれて久保田を観察する。

ターゲットの久保田は真っ直ぐに本棚に向かう。そして文学全集のコーナーで探し物をはじめた。

相手に悟られないように注意しながら大志がギリギリまで近づきその様子を伺う。菊乃は別な角度から離れて久保田の動きを見守る。

結局、久保田が本を選ぶまでには五分もかからなかった。彼は分厚い本を脇に抱えて貸し出しコーナーに向かおうとした。

（やだ。こっちに来る！）

久保田が近づいてきたので菊乃は慌てて本を選ぶフリをする。

が、久保田が歩きながらチラリと菊乃の方を見る。

（ウソ！　気付かれた？）

恐る恐る相手の表情を盗み見る。久保田が菊乃を睨んだように見えた。が、それは菊乃の思い過ごしだった。彼はそのままスタスタと貸し出しコーナーに向かうと手続きをはじめた。

（良かった……でもなんでアタシの顔を見てあんな顔したんだろ？）

そう思って菊乃が周りを見回す。そしてはっと気が付いた。

「な！　何これ？」

久保田が変な顔をしていたのはこのせいかもしれないと思った。

そこにひょっこり大志が現れる。

「奴が今借りようとしてるのは『森鴎外全集の４巻』だな。本棚を確認してきた……ん？」
大志も菊乃の後ろの本棚を見て絶句する。
「なんじゃこりゃぁ！」
菊乃が背にする本棚には汚い字で大きく「郷土史研究会　目黒専用」と書いた紙がデカデカと張り出されている。
……郷土史研究会。それは大志と因縁のあるあの目黒の所属する部だ。ただし部員は変わり者の目黒ただ一人。その変人ぶりはある意味有名になっている。
「ア、アタシ、仲間だと思われちゃったみたいね……」と、菊乃の顔が引きつる。
「何なんだ。この馬鹿げたコーナーは」と、大志が呆れる。
本棚のうち上の三段に古そうな本がびっしり。下の二段には資料のようなものが乱雑に押し込められている。
大志が「スペースの無駄だな」と、吐き捨てた。
一方、久保田は貸し出しカウンターで貸し出しの手続きをとっている。そして貸し出し係の女性と二言三言言葉を交わすと本を抱えてさっさと図書館を出て行こうとした。
それを見て大志が「行くぞ！」と、菊乃を促した。

ところが、その後の久保田の動きにも怪しいところはなかった。彼は図書館を出て真っ直ぐ教室に向かい、自分の席に戻ると本をカバンにしまって弁当を取り出した。その後、それを持って食堂へ。途中、自動販売機で飲み物を買い、食堂では友達を探して合流。そして普通に昼ごはんを食べ始める。
そこまで見届けてから大志が言った。
「普通に飯食ってやがるな……勝春の情報では何か動きがあるはずなんだが」
「……アタシらもお腹減ったね」
止む無くそこでターゲットのマークは中断した。菊乃は教室へ戻り

美穂子とお弁当を、大志は食堂で久保田を監視しながら食事を済ませることにした。

＊　＊　＊

放課後、ターゲットの久保田が彼女と下校するのを見送って大志がボヤいた。

「なんだ勝春の奴。全然、動きなんてないじゃないか」

「そだね。残念だけど」と、菊乃もため息をつく。

「しょうがない。俺も今日は帰る」

「え？　帰っちゃうの？」

「ああ。疲れた」

「……」

菊乃はがっかりした。普通、女の子が「帰っちゃうの？」と言って（まだ一緒に居たいのに）と目で訴えたら男は帰るのを少しはためらうものだ。なのに……。

（やっぱ全然、脈ナシなのかなぁ……）

すっかりへコんでしまった菊乃の気持ちなどまったく気付く様子もなく、

「お疲れさん。じゃあな」と、大志は軽く手をあげる。

それを「待って」と、呼び止めることができない。

呼び止める理由が見つからない。

（黙って見送るしかないなんて……寂しすぎる）

その大きな背中を見ていると菊乃の胸がしめつけられる。

大志が校門に向かって十メートルほど進んだところで、後方から女の子2人組が菊乃を追い越して大志に駆け寄った。そして大志を呼び止める。

片方の子が一生懸命何かを訴えている。「彼女にしてくださいっ」という部分だけ聞こえてきたところをみると、多分、告白してるのだろう。

（何？　あの子達。人がこんなに落ち込んでる目の前で）と、菊乃がむっとする。
が、予想通り大志にはまったく相手にされない。
大志はぶっきらぼうに「俺、女嫌いだから」と、言い残して2人組を置き去りにした。
（オンナギライ……）
確かにそう聞こえた。
それは菊乃にも分かっていたことだ。前回の事件でカズに聞かされた「女性アレルギー」という事実。否が応でもそれが思い出される。
（……やっぱそうなんだ）
校庭に落ちた大志の長い影がどんどん遠ざかっていく。それはまるで2人の心の距離を象徴しているようにも思えた。

6　新たなる転校生

翌日、菊乃が登校すると始業前の教室がいつになくざわついていた。
（何だろう？）と、思いながら席に座ると美穂子がすぐに寄ってきてその原因を教えてくれた。
「また転校生が入るみたいよ！」
「また？　でもウチのクラスばっかり……変じゃない？」
「だよね。カズ君たちのときもビックリしたけど」
確かに妙な話だ。私立の高校にそうそう転入してくる生徒がいるとは思えない。しかしそれは菊乃にとっては大した問題ではなかった。なぜなら菊乃の頭の中は大志のことで一杯だった。昨日の帰りに見せつけられた大志の女嫌いぶりが目に焼きついて離れない。大志は女性アレルギー……でも自分は特別だという勝手な思い込み。そのことは激しい自己嫌悪となって菊乃を苦しめた。

（どんな顔してゴッキーに会えばいいんだろ……）
大志に会ってしまうと涙が出てきそうな気がしてならない。
教室内の浮き足立った空気の中で、菊乃はひとり取り残されてしまったような心境で思いをめぐらせていた。
やがて始業のチャイムが鳴り、担任が転校生を伴って教室に入ってきた。
その瞬間、「おおっ！」というざわめきが教室内に広がった。
「が、外人かよっ！」と、隣の男子が声を上げたのを聞いて菊乃は何気なく教壇の方を見た。確かに、担任の隣に立っているのは外国人の少年だ。
隣の席で美穂子が「王子さまみたい……」と、感激している。
それを聞いて菊乃は「そっかなぁ」と、顔をしかめる。
（確かに金髪、色白で王子様みたいだけど……マッチョすぎ）
菊乃がそう思ったぐらいだから転校生の体格は一目見てかなりがっしりしている。決して太っているわけではない。が、まず首が太い。腕もハリウッド映画のアクション・ヒーロー並みに太い。顔はハンサムで申し分ない。鼻筋が通った顔立ち、そのくせ外国人臭くないのだが……正直、菊乃のタイプではない。
担任にあいさつを促されて転校生はきおつけの姿勢で声を張り上げた。
「イワン・オトコフスキー、デス！　ヨロシク、オ願イシマッス！」
体育会系のノリに一瞬、皆が引いたものの、日本語が出来ると分かってほっとした空気が流れた。
ぽぉっと転校生に見とれていた美穂子がぽつりと呟く。
「イワン・オトコズキ？」
美穂子には「イワン・男好き」と聞こえたらしい。菊乃が苦笑しながら訂正する。
「オトコズキじゃないでしょ。オトコスキーだよ」
すると教壇の上の転校生が二人の会話に気付いた。
「ＹＯＵ、間違ッテルヨ！「オトコズキー」ジャナイヨ。「オトコ

フスキー」デス。」
（え？　今の聞こえたの？）
驚いて菊乃が転校生を見る。それほど大きな声を出した覚えはない。
それに菊乃たちの席は真ん中あたり。大した地獄耳だ。
　新しい転校生の登場に好奇の目が集まる中、ミステリーボーイズの三人だけは冷静だった。この転校生が刺客であることは予めマスターから聞かされている。
前列のカズは頬杖つきながら冷めた目で刺客の姿を眺める。
窓際の席で勝春は外の景色を眺めるフリをしてにやりと笑う。
最後列の大志はパキパキと指をならしつつ敵の戦闘力を測るように壇上を観察する。
三人の反応はそれぞれ異なるが、内に秘めた思いは同じだ。
……こんなヤツには負けない！
ここからがミステリーボーイズの本領発揮だ。

＊　＊　＊

　昨日に続いて今日も作戦会議はやらないと聞いて菊乃は休み時間に勝春に尋ねた。
「ね、調査は進展してんの？　会議やらなくて大丈夫なの？」
すると勝春が周りの様子を少し気にしながらそっと教えてくれた。
「まぁ一応はネ。進展してるヨ。実はサ。カズは別件の調査で忙しいんだ。学校内部の黒幕の目的を探るためにネ」
「く、黒幕？　それって誰？　もう名前わかってんの？」
「シッ！　声が大きいヨ。……それはまだ言えないんだけどこの学校の教師であることは分かってるンだ」
　勝春は菊乃を教室から連れ出して誰も居ない他所の教室に移動した。
そこで勝春が調査の進捗について菊乃に報告する。
「オレの方の調査もまずまず順調だヨ。新しい情報が結構、入って

きてネ。今ンところ分かったのが、まず賭け組織のメンバーになる為にはメンバー2人の推薦を受けなくちゃならないんだ」
「2人の推薦。それって……難しくない？」
「ダネ。おまけに秘密を漏らしたメンバーは強制脱会。で、そのメンバーを推薦した2人も連帯責任でべらぼうな罰金を払わされる」
「だからみんな異常に口が堅いんだ」
「そういうことだネ」
「そうなんだ。でもさすがだね。カッチーは誰とでも仲良くなれるもんね」
「いやあそれほどでも……あるヨ」
「自分で言うかい！」という菊乃の突っ込みに勝春が笑顔で応える。そんな勝春のさわやかな笑顔を見ていると菊乃はほっとする一方でうらやましく思った。
（いいなぁ……誰とでも仲良くなれるなんて。たぶんカッチーは恋愛で悩むなんてことないんだろうな……）
ふいに菊乃が表情を曇らせたので勝春が笑うのを止めた。そして菊乃の顔を覗き込みながら尋ねる。
「どうしたの菊ちゃん？　何か悩みでもあるんじゃナイ？」
「え、……そんなことないよ」
菊乃はわざと目をそらした。目を合わせてしまうと勝春に心の内を読まれてしまう気がしたからだ。菊乃は特進クラス事件の時に勝春の話術を見せつけられていた。
（カッチーに隠し事はできないな……）
「大志のことダロ？」
ズバリ核心を突かれて菊乃は「違う」と言えない……。
「ハハ、正直だよネ。菊ちゃんは。顔に出てるヨ」
そう言われても実際に鏡で自分の顔を見るわけにはいかない。
（まずい……これって完全にカッチーのペースだ）
そう思って菊乃がおそるおそる勝春の顔を見る。
その屈託のない笑顔！

その笑顔がクセモノなのだ。身構えようとしてもそれができない。まるで北風と太陽のおとぎ話のように、勝春の微笑には見るもののガードを自然に下げさせる力がある。

「良かったら話を聞くヨ。喜びとか幸せとかはなかなか共有できないかもしれないけど、悩みや不安の八割は誰かに話すことで楽になれるからネ」

その八割という数字にどんな根拠があるかは分からない。が、自信たっぷりな勝春の口ぶりに疑う余地は無い。勝春はニコニコと笑みを絶やさず菊乃の言葉を待っている。菊乃の心が揺れる。

（素直に話しちゃった方が楽になれるかな……）

誕生日を口実に大志に何かプレゼントすることは決めた。が、その一方で、大志の女性アレルギーという事実が菊乃を不安にさせる。考えれば考えるほど悪い方悪い方へと想像力が働いてしまう……。

「ね。カッチーだから相談するんだけど。ゴッキーって……その、ゴッキーってさぁ……」

うまく言葉が出てこない。

「分かってるヨ。菊ちゃんの言いたいことは。大志の「女性アレルギー」のことでしょ？」

菊乃は黙って頷く。やはり勝春は人の心理を読むのがうまい。菊乃が切り出そうとしている話をすでに予測しているらしい。

「事実だヨ。でもそれは心理的なものだからネ。本当に女性が嫌いなわけじゃないんダ」

「そうなの？」

勝春の言葉をどう解釈して良いのか菊乃は迷った。

（それはいいこと？　悪いこと？）

「そうだネ。まあ、専門的なカウンセリングとか催眠療法とか、やろうと思えば出来なくはないんダ……でもね。それはやりたくないんだヨ」

「どうして？」

「もっと自然に……そうだネ。自分自身で気がつくことが大事だと

思うんだ」
「自分自身で……気付く？」
「そう。大志自身がネ。いつか自然に好きな子に出会って、もっとその子と触れ合っていたいっていう自分の中にある感情に気付くこと、ダネ」
「……そんな事、ホントにできるのかな？」
菊乃の問いかけに勝春は目を細めてこっくり頷いた。
「あのネ。誤解して欲しくないんだけど、大志のアレは病気じゃないんだ」
「病気って……そういう風には思ってないけど……」
「そっか。ならいいんだけどサ。大志の場合、今までに女の人のぬくもりを感じたことが無かったんだよネ。母親も含めて」
（え……それってどういう意味？）
しかし、勝春はそれ以上のことは教えてくれなかった。菊乃が大志の生い立ちや家庭環境のことを詳しく聞きたがっても勝春は、「まあ色々あるんだヨ」としか言わない。そしてチャイムが鳴ったことを口実に菊乃の質問は、はぐらかされてしまった。

7　図書館の攻防！

昼休みにカズだけ別行動と聞いて美穂子は早めに食事を切り上げてカズを探しに行った。「多分、図書館だネ」という勝春の言葉を信じて美穂子は図書館に向かう。
そしてそこでカズを発見する。カズは熱心に調べものをしていた。それを見て美穂子が尋ねる。
「カズ君、何見てんの？」
「ああ森野さんか……江戸時代の地図を見てるんだ」
「江戸時代？　なんでまた？」
「まあ。ちょっとね。で、郷土史研究会の資料を借りてるんだ」

それを聞いて美穂子が青ざめる。
「え？　郷土史研究会って……カズ君まさか」
美穂子がまるで変態を見るような目つきをするのでカズが慌てて否定する。
「い、いや。特に興味があるってわけじゃないんだ。けど、事件解決にどうしても必要なんでね」
美穂子は疑り深そうな目つきで言う。
「事件て？　ギャンブル事件の？」
「いや。それとは別だよ。そっちは勝春に任せてあるから。ボクの調査は別件さ」
美穂子が訳が分からないといった風に首をかしげる。
ちょうどそこへ大志と菊乃が遅れて合流した。
大志が「お、やってるな」と、カズに声を掛ける。そしてカズに耳打ち。
「……どうだ？　いけそうか？」
「うん。思ったより材料は揃ってるね」
カズの言葉を聞いて大志が目黒専用のコーナーを眺めながらバカにしたように笑う。
「こんなゴミみたいなもんが役に立つとはな」
すると突然、背後で「失敬な！」という声がした。
大志たちが振り返ると目黒が顔を真っ赤にして仁王立ちしている。
「ゴミとは何だゴミとは！　だいたい君達は人の本を勝手に……」
大志が鼻で笑う。
「ゴミをゴミと言って何が悪い？」
「あ～またゴミって言ったな！　き、貴重な資料なんだぞ」
「たわけ。そんなに大事なら金庫にでもしまっとけ」
大志と目黒の大きな声が館内に響く。
すると「静かにしなさいっ！」と、背後で突然、大声を出す人が現れた。
誰かと思って皆が振り返ると白衣の女性がこちらを睨んでいる。

菊乃には見覚えの無い人だった。菊乃が美穂子にそっと尋ねる。
「ね、あの人誰？」
「菊ちゃん知らないの？　図書館の管理人さんだよ」
それで思い出した。そういえばこういう人がいたような気もする。年齢は二十代半ば。でも、化粧っ気がなく地味な感じ。あまり印象に残らないタイプだ。その管理人さんが目黒と大志の仲裁をする。
「ここは図書館なのよ！　何を大声出してるの？」
すぐさま目黒が言いつける。
「この失敬な連中がうちの大事な資料を勝手に……」
そこでカズが口をはさむ。
「まあ、勝手に資料借りたのは悪かったよ。でも、これって図書館に寄贈されたものなんでしょ？　だったらボクらが見てもいいんだよね？」
確かにカズの言う通りだ。図書館に置いてある時点で目黒専用というのはどう考えてもおかしい。痛いところを突かれて目黒がトーンダウンする。
「そ、そりゃそうだけど。ただ……見たいなら見たいと一言、言ってくれれば」
そこに大志のよけいな一言。
「どうせお前しか読まないんだろうが。スペースの無駄だ」
「な、なにをぅ！」と、いきり立つ目黒を管理人さんがいさめる。
「止めなさい目黒君。ここの本は皆のモノよ。そもそもあなたしか見れないっていうならここに置いておく意味がないでしょ」
ところが管理人さんに叱られてしょんぼりすると思いきや目黒は意外な反応をみせた。
「ふふーん。それがそうでもないんだな」
妙に余裕な目黒の口ぶりに大志とカズが「？」と、顔を見合わせる。目黒は鼻の穴を膨らませながら自慢する。
「まあ確かに今まで部員は僕だけだったんだけどね。新入部員が入ったんだ！」

美穂子が目を丸くして菊乃に耳打ちする。
「信じらんない……郷土史研究会に入部する変態がいるなんて！」
そんな事を言われているとはつゆ知らず目黒は鼻歌まじりでせっせと本を積み上げた。皆が黙ってその様子を見守る中、目黒は山積みした本を「よっこらせ」と、両手で抱えながら言った。
「てことで。僕は新入部員にこの本を読ませなきゃなんないんだ」
いったい何冊重ねているのだろうか。それでは前が全然見えないんじゃないかと思われた。そこで一応、騒ぎが収まったので管理人さんが「静かにね」と、念押しして部屋に戻ろうとする。これで一件落着かと思われたその矢先、大志が何を思ったのかすっと目黒の背後に回り、ふっと身を沈めて「ひざカックン」をしたのだ。
（何やってんの？！）と、菊乃が驚いたその瞬間、目黒がバランスを崩した。
「うぁっ！」と、甲高い声をあげて目黒がヨタヨタと千鳥足になる。そして山積みの本に視界をさえぎられた目黒はそのまま本棚に激突。その勢いで転倒。まるで古いコントのようなリアクションを見せつけられて菊乃たちは口をあんぐり……。
しかも目黒が仰向けにひっくり返った場所は運悪く女子のスカートを覗き込むようなポジションになっていた。スカートの中を見られた女子は「ギャーッ！　変態っ！」と、反射的に目黒の顔を踏んづける。
「ぷぎっ！」と、目黒が妙な悲鳴をあげる。
無理も無い。体重、０．１トンはあろうかという巨体に顔を踏まれてしまったのだ。見ているこっちまで痛くなるようだ。
　その騒ぎを聞きつけて管理人さんが「何やってんのっ！」と、血相を変えてこっちに引き返してくる。そして目黒の哀れな姿を見て「……何これ？」と、唖然とする。そして現場に居合わせた生徒達に尋ねる。
「誰か説明して。どうやったらこんな風になるの？」
管理人さんと目が合っても誰も正直に言えるわけが無い。菊乃と美

穂子は顔を見合わせて気まずい顔。カズは机で本を読んでいるし、原因を作った大志は大志で知らん顔。唯一、スカートの中を覗かれたミス０．１トンが訴える。
「こいつが私のパンツを見ようとしたんですっ！」
それを聞いて目黒が「冗談じゃない」と、顔をさすりながらむっくり起き上がる。
「僕にだって選ぶ権利はある。な、なめないで頂きたいっ！」
目黒の言葉にミス０．１トンが激高する。
「どういう意味よっ！」
周りが「あっ」と、思う間にミス０．１トンの張り手が炸裂する。
「パーン」と、景気の良い音が図書館にこだまする。
さすがに管理人さんもまずいと思ったのか二人の間に割って入ろうとする。
「だ、ダメよ。ぼ、暴力は……」が、強烈な一撃を顔面に受けた目黒は完全に目がイッている。まるで映画のスローモーションのように身体を捻りながらぶっ倒れる。目黒の派手な「やられっぷり」に館内がざわつく。さらに、続々と人が集まってきて収拾がつかなくなってきた。
その輪の中心で管理人さんがオタオタする様子を遠目に眺めていた大志がニヤリと笑ったように菊乃には見えた。
（ひどくない？　いくらなんでも……）
確かに目黒はむかつくヤツだけど、さすがにやりすぎなんじゃないかと菊乃は思った。
しかし、大志は何ら悪びれた風でもなくポケットに手を突っ込んでその場を立ち去ろうとした。大志にしてはずいぶんひどいことをするなと思った菊乃は一言言ってやろうと大志の後を追う。

図書館を出て一人スタスタと廊下を歩く大志を呼び止める。
「ちょっとゴッキーってば！」
「何だ？」と、大志が振り返る。

「いくらなんでもやりすぎじゃない？　何であんなことしたの？」
「別に。ヤツには貸しがあるからな。それを返してもらっただけの話だ」
「何それ……」
好きな人があんなことをするところを見て菊乃は少なからずショックを受けていた。ゲンメツしたというほどではないにせよ、ちゃんとした理由が聞きたい。その一心で菊乃は食い下がる。
「それじゃわかんないって。ね。何で？」
菊乃がムキになって聞くので大志はやれやれといった風に頭をかきながら答える。
「……まさかあそこまで酷くなるとは思わなかった。本当は軽く騒ぎを起こすだけで良かったんだがな」
「え？　わざとなの？」
「あの管理人の注意を引き付けるだけで良かった」
「ちょ、ちょっと……意味がわかんない」
「最初にヤツともめてる時に勝春が管理人室に潜り込もうとしているのが見えた。それをフォローする為に時間稼ぎをしただけだ」
「カッチーが？　何の為に……って、まさか管理人さんが？」
「そういうことだ。勝春は証拠をつかむ為に管理人の部屋に侵入しようとしたんだろう」
「ウソでしょ？　何で管理人さんを疑ってるの？」
「ちょっと考えれば分かることだ」
勝春と大志は図書館の管理人さんを疑ってる！
どういう根拠があってそういう結論に到ったのかは分からない。が、勝春をフォローする為に大志は止む無く目黒を利用した。で、思ってた以上に目黒がドンクサくて大騒ぎになってしまった。それが分かっただけでも充分だ。
理由がわかったので菊乃はホッとした。結果はともかく、大志が何の理由も無くそんな酷いことをする人でなくて良かったという安堵感の方が強かった。大抵の場合、好きな人がすることは何でも良

い様に解釈したくなるものなのだ。
「おい。小銭持ってないか？」
大志がいきなりそんな事を聞くので菊乃は動揺した。
「え、な、何で？」
「あいにく万札しかなくてな。アホの相手をしたら喉が渇いた」
「あ、じゃアタシがおごるね。こないだのお礼もあるし」
「こないだのお礼？」と、大志は妙な顔をした。食事会のことは覚えていないらしい。
（マジで覚えてないの？　それじゃお誕生日のプレゼントの口実が……）
大志がスタスタと先に歩き、菊乃がその後をちょこちょこついて行く。そんな具合で自動販売機コーナーに移動して缶ジュースで喉をうるおす。
コーラを豪快に一気飲みする大志の喉の動きを眺めながら菊乃はプレゼントの件をどう切り出そうか考えた。菊乃の視線に気付いた大志が少し戸惑ったような表情をみせる。
そこで菊乃が気付いた。
（やだ……チャンスじゃん）
しかし「二人きり」を意識しすぎてしまうと、かえって言葉に詰まってしまう。それは大志も同じようで、しばらく気まずいようなハニかむような微妙な沈黙が流れた。そして、お互いに何とかしなくてはという焦りで発した「あのさ」という言葉がかぶってしまった。
「な、何よ？」
「そっちこそなんだ」
「先に言ってくれる？」
「お前が先に言え！」
「男の方からでしょ。こういう時は」
「な、何を根拠に……」
菊乃があまりにきっぱりと「男が先」と言い切るものだから大志は思わずそれに従ってしまう。

「仕方ないな……そ、その。なんだ。これを返してなかったことを思い出しただけだ」
そう言って大志がポケットからハンカチを取り出す。
「何それ？」と、言いかけて見覚えのあるハンカチに菊乃が気付く。
「あ、洗ってあるからな！　一応」
（ハンカチひとつ返すのに何ムキになってるんだろ？）
不思議に思いながらも菊乃がそれを受け取る。が、妙に湿っていてふにゃりとした触感が！
「何かヘロヘロなんだけど……」
菊乃が変な顔をするので大志が視線を反らしながら答える。
「洗ったんだが……だいぶ経ってしまった。それにずっとポケットに入っていたからな」
普通はキレイな状態で返すところなのだろうが、あのマンションにはアイロンなど無いことは容易に想像できた。
「しょうがないわね。でも、いいよ。使ってくれたんだもんね」
自分に返す為に大志がハンカチをずっと持っていてくれたということが分かって菊乃は少し嬉しくなった。
「と、ところでそっちは？　何を言おうとしたんだ？」
「あ、それは……いいや。また今度で」
「何ぃ？　何だそれは！」
「もうすぐ昼休み終わっちゃうし」
そう言ってから菊乃はくるりと大志に背を向けるとさっさと歩き出した。
「おい。待てよ！　気になるだろうが……」
そんな大志の言葉を背に受けながら菊乃は聞こえないふりをした。
（もう少し引っ張ってやろっと！）
何だか少しだけ自分のペースに大志を引き込んだような気がして菊乃はこっそり笑みをもらした。

8　賭け組織の正体

勝春は午後からの授業には出てこなかった。
同じようにカズも教室には戻ってこなかった。
そして6時間目が終わると同時に大志が菊乃と美穂子に声をかけてきた。
「図書館に行くぞ。勝春が呼んでいる」
「え？　カッチーが？」と、菊乃が大志を見上げる。
「どうやら確たる証拠をつかんだらしい」
大志の説明に美穂子が目をぱちくりさせる。
「え？　もう解決？　わたしたち何にもしてないよ？」
「もともとある程度のメドはついていたからな」
当然だとでも言いたげな大志の口ぶりに、いつものことながら菊乃は置いてきぼりにされているような気がしてならなかった。
（なんでゴッキーたちはこんな簡単に事件を解決できるんだろ？）
そんな疑問と釈然としない思いを抱いたまま、菊乃は黙って大志についていく。

＊　＊　＊

図書館の前で勝春が待っていた。
なぜかメガネをかけている勝春を見て美穂子が首をかしげる。
「あれ？　勝春君て目、悪かったっけ？」
「いや。そういうわけじゃないんだけどサ。この方が気分出るかな～なんて」
そう言って勝春は「似合う？」と、顔の角度を変えてみせる。
「ふざけ過ぎだ」と、大志が渋い顔をする。
「いいジャン。カズの代わりに謎解きするんだからサ」
「下らんな。探偵ごっこじゃないんだぞ」
「相変わらず硬いネ。大志は。ユーモアが無い」

「ユーモアだと？　よけいなお世話だ」
そんな2人のやりとりを聞いて菊乃はだんだん不安になってきた。本当にこれから事件を解決しようという緊張感に欠けるような気がしたのだ。
「ね。ゴッキーもカッチーも止めなよ。早くしないと人が来ちゃうよ」
菊乃に指摘されて勝春が「そだね。ごめんヨ」と、片方の目を閉じて謝る。
大志はわざとらしい咳払いをして「さっさと行くぞ」と、襟を正す。そして一向は勝春を先頭に一番乗りで図書館に入り、真っ直ぐに管理人室に向かった。

管理人室といっても館内の一角をうすい壁で囲っただけの簡単な造りで、ちゃんとした部屋とは言い難い。それに壁の一部は本の貸し借りをするカウンターも兼ねているので外から中を覗くことは可能だ。勝春が堂々とカウンターの中に入っていくと管理人さんが「あら。勝春君」と、顔を上げた。
「先日はどうも。ごちそうさまデス」と、勝春が声をかけると管理人さんは「いいのよ」と、頬を染める。
そのやりとりを見ただけで菊乃はピンときた。
（カッチーったらいつの間に……）
菊乃があきれていると管理人さんが冷めた目つきで言う。
「どうしたの？　お友達？」
「まあネ。というより証人みたいなもんですヨ」
「証人？　何の？」
「校内賭博事件の犯人を追及するためですヨ。管理人さん」
管理人さんが息を飲むのが分かった。彼女は作り笑いを浮かべながら必死に言葉を探す。
「な、何のことかしら。え？　犯人って……賭博って、何よ」
勝春は言葉を選びながら説明する。

「実はオレたち、校内で賭博をしてる連中がいるって聞いて調べてたんですヨ。で、実際に賭博にのめりこんでる生徒を何人か特定することに成功しました」
勝春は胸ポケットから折りたたんだ紙を取り出した。
「で。これなんですけどネ。これがリストです。賭けに参加してる生徒の名前とアドレス」
管理人さんは勝春が差し出したリストを恐る恐る受け取る。
「そ、そうなの。へぇ、そんなことをしてる子たちがいるなんてね……」
「思ってた以上に方法は単純ですよネ。携帯でアクセスしてメールで注文。でも、問題はどうやってお金をやりとりするかってことなんですよネ」
そう言いながら髪をかきあげる勝春の視線を避けるように管理人さんはうつむいた。そこで勝春は追い討ちをかける。
「考えましたネ。本を使ってお金をやりとりするなんてネ！」
それを聞いて菊乃と美穂子が同時に「あ！」と、声をあげてしまった。
（そっか！　そういうことだったんだ！）
そこで大志が口を挟む。
「疑わしい生徒をマークしていて気付いた。文学全集の４巻を借りたかと思えば次は生物学の本。本当に興味があって借りてるとは思えなかった」
勝春がゆっくりと管理人さんとの間合いを詰めながら大志の言葉を受け継ぐ。
「お金のやりとりはメールで指示するんでしょうネ。本を指定してお金を入れさせたり渡したり。てことはあなたしか居ないんですヨ」
管理人さんがぎょっとして顔を上げる。
「何で？　何で私しか……誰かが図書館を悪用してるだけかもしれないじゃない？」
勝春はニコッと笑ってそれを否定する。

「それはないですヨ。だって関係ない生徒が偶然に本を手にしてしまうリスクがあるでしょ。授業中に現金を本に仕込めるのは管理人さん、あなただけですヨ」
「証拠は？　……たぶんもう調べてあるんでしょうけど。一応、聞いておくわ」
「お察しの通り、そこのパソコンを調べさせてもらいましたヨ」
「そうなの？　いつの間に……」
「今日の昼休みですヨ」
「昼休み？　……って！　まさか？」
大志がニヤリと笑う。
「えらい騒ぎにしてしまって申し訳ない。あれは想定外だ」
二人に追及されて観念したのか管理人さんは含み笑いを浮かべて首をふった。
「残念ね。いいバイトだったんだけど」
「バイト？」と、勝春の顔つきが変わる。
「そうよ。このシステム。別に私が考えたわけじゃないわよ」
勝春と大志が顔を見合わせる。そして大志が険しい顔で尋ねた。
「誰かに頼まれたのか？」
「そうよ。私は言われた通りにしてただけ」
「チッ！」と、大志が舌打ちする。「やはりそうか。この事件も……」
大志の呟きを聞いて菊乃が顔をしかめる。
（この事件も？　何が起こってんの？　この学校で……）
勝春が深いため息をついて「ヤレヤレ」と、イスに腰を下ろす。そして切なさそうな目で管理人さんを見つめた。
「……もうこんなことは止めてもらえますよネ？」
「分かってるわ。覚悟はできてる」
悟ったような表情でそう言う彼女の様子を見て美穂子が尋ねる。
「辞めちゃうんですか？」
「そうね。校内でこんなことしてたんだもん。辞表を出すつもりよ」

彼女の答えを聞いて美穂子が勝春に尋ねる。
「ね、賭博って犯罪なんでしょ？　管理人さん、逮捕されちゃうの？」
「ん～オレらは警察じゃないからネ。それにそれが目的じゃないから……できればこのまま証拠を完全に消して欲しいナ」
「確かに」と、大志が厳しい表情で言う。
「今これを公にされることの方が問題だ」
「だよネ。ま、これに参加してた生徒にも反省はしてもらわなきゃなんないけどサ。
勝春と大志の言動に管理人さんが戸惑う。
「どういうこと？　私はてっきり……」
「管理人さん次第ですヨ。あなただけが逮捕されるだけならともかく、これに関わった生徒全員の将来にも影響があるかもしれない。その辺をよく考えてくださいナ」
勝春の言葉には厳しさと優しさの両方が含まれているように思えた。
（そっか、カッチーは生徒達のことも考えてるんだ……）
何だか人情モノの刑事ドラマを見ているようなシーンに菊乃までしんみりした気持ちになってしまった。
「そうね。よく考えてみるわ。でもケジメはつけなきゃ、ね」
そう言って無理に笑う管理人さん。そういう彼女もまた勝春の言葉をかみ締めているに違いない。

結局、図書館を利用した賭博事件はデータを完全に消し去ることで極秘裏に処理されることとなった。こうして事件は一応の解決をみたわけだが菊乃にはどうしても釈然としない思いが残った。
図書館を出ながら菊乃は考える。
（こんなんでいいのかなぁ……ホントは何かウラがあるんじゃないかな？）
そんな菊乃の気持ちを美穂子が代弁する。
「ん～何だかあっけなかったね。なんでだろ？　やっぱカズ君が謎

解きしてないからかなぁ」
「へ？　美穂子ちゃん、それってどういう意味なのカナ？」
「だってカズ君の推理なら説得力あるけど……勝春君の推理だとね～。なんか軽いっていうのかなぁ」
「そりゃ差別だヨ！」と、勝春が苦笑する。
大志が美穂子を睨む。
「こう見えても俺達はお前らの知らないところで結構、苦労してたんだからな」
「あぁ、そうなんだ」と、美穂子が首をすくめる。そして何かを思いついたらしく一人で納得したようにウンウンと頷きながら言う。
「つまりアヒルみたいなもんって言いたいんでしょ？　後藤君は」
「何言ってんだお前？」と、大志が怪訝な顔をする。
そこで美穂子は得意げに説明をする。
「アヒルは優雅に泳いでるように見えるけど水の下では必死で水をかいてるんだよね～」
美穂子のあまりの勘違いぶりに3人が顔を見合わせる。
誰が突っ込むべきか？　という空気が流れて、結局、菊乃が突っ込むハメに……。
「み、美穂子。それ、白鳥だから！」
「え？　……ホント？」
この場合、素直に笑って良いものかどうかの判断が難しい。さすがの勝春も半笑いで顔を引きつらせる。大志はやれやれといった風にため息をもらす。菊乃は菊乃で美穂子が傷つかないようにフォローしなければならない。
（この場にカズ君がいれば良かったのにな。カズ君なら絶妙なフォローもできるのに……）
4人がワイワイガヤガヤとそんな風に廊下を進んでいると、菊乃の目に前方からこちらに向かってくる男子生徒の姿が映った。
（あ！　あれって……転校生のイワン君！）
最初に気付いた菊乃が美穂子の肘に手を触れて教える。

「ほら。あっちから転校生が来るよ」
「あ、ホントだ。イワン・オトコスキー君だ」
　イワンは周りを威圧するように廊下の真ん中をのっしのっしと歩いてくる。このままだと菊乃とぶつかってしまうので、菊乃は大志の後ろに隠れるような形でイワンの行く手をあける。
（イワン君て……何か超怖いんだけど）
菊乃の胸がなぜだかドキドキする。しかしそれは良い方のドキドキではない。得体の知れない不安といった方が正しい。
（なんでだろ？）
なぜ自分がソワソワしているのかが分からずに菊乃は少しイラついた。
イワンは進路を変えずに真っ直ぐにこちらに向かってくる。一歩、また一歩。イワンとの距離が縮まる。
（もうちょっと……早く行ってくれないかな）
菊乃はイワンの顔を見ることができない。すると、すれ違い様にイワンがぼそっと「邪魔スルナヨ」と、言ったのが聞こえた。
それを聞いて大志と勝春がピタっと足を止める。
急に2人が止まったので菊乃は大志の背中に、美穂子は勝春にぶつかりそうになった。大志と勝春は振り返ってイワンの後ろ姿を眺める。そして勝春が「言ってくれるネ」と、肩をすくめる。大志は無言でイワンの後姿をにらみつける。
イワンはまるで後ろに目があるかのように数歩進んだところでピタリと立ち止まった。そしてクルリと急に振り返るとニヤリと不敵に笑みを浮かべた。
「ガッカリサセナイデクレヨ。ミステリーボーイズ」
菊乃がはっとする。
（ミステリーボーイズ？！）
厳しい表情の大志と勝春。
余裕をみせるイワン。
ほんの数歩の距離で対峙する3人。緊迫した空気が張り詰める。

菊乃と美穂子が慌てて2人の後ろに隠れる。
そこで大志がおもむろに口を開く。
「何なら試してみるか？」
「イイネ。見セテクレヨ」
「ちょ、ちょっとまずいヨ」と、勝春が大志をなだめようとする。
が、大志は勝春を押し止め、一歩前に出た。
「お互いに了解していれば問題なかろう」
やる気マンマンの大志の様子を見て菊乃はあせった。すぐに周りに誰も居ないか確認する。幸い他の生徒の姿は無い。
「行くぞ！」と、大志がすっとイワンに接近、そして左のハイキックを放つ。イワンはまったく構える気配がない。
バシッ！　という音がして大志の左ハイキックが決まった……かに思われた。が、イワンは軽く首を傾げたような形で大志の左足を首で受け止めている。
「何っ？」と、大志が呻いた。
手ごたえはあったはず。なのにイワンは倒れるどころか微動だにしない。そして次の瞬間、イワンが動いた！　と思った途端、大志の左足に激痛が走った。
見ている者たちには何が起こったのかまったく理解できない。
イワンは大志の左足を自らの右脇に抱え、それを軸に身体を回転させながら大志を引き倒した。
「ドラゴン・スクリュー！」と、勝春が呻いた。
何のことか分からず菊乃と美穂子が茫然としている間にもイワンは寝技で大志を攻め立てる。イワンは大志の左足を自分の両足で挟み込み両手で捻り上げる。
「ぐっ！」と、大志が苦悶の表情を浮かべる。が、そこは大志も負けてはいない。すぐさま空いている長い右足を利用してイワンの顔面を攻撃する。さすがのイワンも顔面に何度もケリを入れられて体勢を崩す。大志はすかさず身体を反転させて左足を引っこ抜いてイワンから離れる。そしてスックと立ち上がると次の攻撃に備えた構

えをとる。一方、イワンは鼻血を流しながらゆっくりと立ち上がる。
「……ナルホド。結構、ヤルジャナイカ」
「……フン。貴様もな」
お互いに戦闘体勢のまましばらく睨み合いが続く。
菊乃がたまりかねて「やめてっ！」と、大きな声を出す。
勝春も止めに入る。
「これ以上やったら人が集まってきちゃうヨ！」
「そうだな。今日のところは……」と、大志が珍しく息を切らせている。
「……ソウダネ。続キハマタ今度」と、イワンが右腕で鼻血を拭う。そしてクルリと背を向けると階段方面へと歩き出した。恐ろしくタフな男だ。
イワンの後ろ姿が見えなくなるまで大志はファイティング・ポースを取っていた。が、イワンを見送った途端、緊張が解けたのか左ひざをガクっと床に落とす。
「グッ……左足に力が入らない」
「大丈夫？」と、菊乃は大志のそばに駆け寄り身体を支えようとする。
「寄るな！　自力で立てる」と、大志は菊乃の手を払いのけた。ひどくイライラしているようにみえる。
「でも……」
心配そうな顔をする菊乃に向かって大志が無理に笑おうとする。が、足が痛むのかすぐに顔が歪む。
「凄い間接技だったネ」と、勝春も心配そうに大志の様子を見守る。
「ああ。恐らくあれはサンボだ」
「どうりで……やはりタダモノじゃないよネ」
「さすがに本場仕込みのサンボは強烈だな」
2人の会話を聞いていた美穂子が場違いな一言。
「散歩？」
「サンボだ！　お前は、どんな耳をしている？」

大志に一喝されて美穂子が口を尖らせる。
「だってホントに知らないんだもん。カズ君ならやさしく教えてくれるのに！」
「おい勝春。お前が代わりに説明してやってくれ」
「え？　オレがかい？　弱ったネ。こりゃ」
そう言いながら勝春が頭をかく。勝春のつたない説明で、一応、サンボというのはロシア伝統の格闘技で関節技が豊富なことで有名ということは菊乃にも分かった。だが、なぜ転校生のイワンが大志たちを挑発してきたのかが分からない。
「ね。カッチー。ミステリーボーイズって何のこと？」
菊乃の素朴な疑問に勝春と大志が黙って顔を見合わせる。
「いや。マァ……その」と、勝春が口ごもる。
「何か隠してない？　ホントは何か秘密があるんでしょ」
菊乃のさらなる追求に大志が憮然として応える。
「お前らは知らなくていい！」
「何それ……人が心配してあげてんのに」
「よけいなお世話だ」
「よく言うわよね。足、痛そうじゃない」
「ムッ、そ、それはだな……」
大志と菊乃の言い争いがヒートアップしそうなところで勝春が止めに入る。
「はいそこまで。それよかサ。早く足に湿布した方がいいんじゃない？」
「……そうだな。いったん引き上げるか」と、珍しく大志が素直に従うところをみるとかなり痛むのかもしれない。
「オレたちは先に帰るからサ。悪いけど、菊ちゃんと美穂子ちゃんはドラッグストアで湿布買ってきてくれないかな？」
「うん。分かった」と、菊乃も素直に言うことを聞く。
（また誤魔化されちゃった……でも何なんだろ。ミステリーボーイズって？）

勝春の肩を借りながら大志が左足を引きずる姿は痛々しかった。あれほど圧倒的な強さを誇っていた大志と互角、いやそれ以上の強さをみせる謎の転校生イワン。そしてそのイワンが呟いた言葉「ミステリーボーイズ」とは何か？
（なんだろ。なんでこんな不安な気持ちになっちゃうんだろ）
何か嫌な予感がしてならなかった。

＊　＊　＊

その頃、単独行動を取っていたカズは郷土史研究会の部室に潜入していた。
狭い部室内には顧問の教師の机、テーブルが一台、ソファがひとつあった。そのどれもが本や資料に埋もれていて、まるで泥棒に入られた直後の部屋のようにみえた。
そんな中でカズは顧問の机にあるパソコンを熱心に調べていた。時間にして三十分あまり、誰か来ないかヒヤヒヤしながらの作業であったが、そのあたりはカズも手馴れたもので目的はほぼ達成しつつあった。
「なるほどね。そういうことだったのか……」
カズがそんな風に独り言を言いながら納得していると入り口のドアを誰かが開けようとした。鍵をかけておいたので誰かが鍵を開けようとすれば音で分かる。隠れようと思えば隠れられそうな箇所は幾つかあった。が、相手が目黒ならうまく丸め込めるし、仮に顧問の先生が入ってきた場合はカズがつかんだ事実を突きつけるまでだ。
「さて。どっちが入ってくるかな」
ところが……。
「？！」と、カズは息を飲んだ。
とんだ誤算だった。部室に入ってきたのは目黒でも顧問でもない。
「イワン……オトコフスキー」
思わずカズは敵の名前を口にしていた。

カズは混乱した。まさかイワンが直接、ここに現れるとは思っていなかったのだ。
「オ前、ソコデ何ヲシテイル？」
「……言い訳しても無駄なようだね。逆に聞くけどそちらこそ何でここに？」
「部員ニナッタカラダ」
「へぇ。なるほど。目黒が言ってた新入部員ていうのは君の事だったのか」
「オ前モ「ミステリーボーイズ」ダナ？」
「まあね。けど、まさか表立って黒幕と接触してたとはね。ボクの読みでは君は黒幕の正体を隠す為に秘密裏に妨害工作をするんじゃないかと……」
「小細工ハシナイ。邪魔者ハ直接、排除スル」
「なるほど。けど、ちょっとばかり遅かったね。君の出番はもう無いよ」
「スパイ……オ仕置キガ必要ダナ」
「ちょっと、ちょっと！　無駄な争いは止めようよ。こっちはもう真相を……」
カズの言葉を無視してイワンがずいっと数歩前に進みでる。腕力に自身のないカズは思わず後ずさりする。
「き、君もプロだろ？　だったらもう……って！　ええっ？」
と、カズは目をむいた。なぜならイワンが何を思ったのか自らズボンのベルトをゆるめ、ズボンを脱いだのだ。カチャッ、カチャッというベルトの金属音を聞きながらカズはマスターの警告のことを思い出していた。
「ま、まさか……」
さすがにカズは焦った。イワンが何をしようとしているのか、マスターの言葉が事実なら……。
「ひ、ヒィィ」
必死で逃れようとするカズの腕をイワンが掴む。と同時にカズの腕

を捻り上げ、イワンは簡単にカズの後ろを取った。さらにイワンはカズの足に自分の足を絡ませ、ソファに押し倒した。
ソファにうつぶせにされたカズは完全にパニックになっていた。
「だ、誰かっ！」
イワンのがっしりした身体が背中にはりついて離れない。
「き、気持ち悪っ！」
カズがもがけばもがくほど、イワンの腕が、足が、カズの身体に絡みついてくる。
（……もうダメだ）
カズはぎゅっと目を閉じた。

第五話　最後の戦い　上

第五話　最後の戦い

1　窮地

カズは祈った。特に神様を信じている訳ではない。だが、今はそれしかなかった。もしも神様が存在して奇跡の扉をちょっとでも開いてくれたなら……カズは一生、神を信じても良いとさえ思った。

イワンは右手でカズの右腕を固定し、左手でカズのベルトに手をかける。

それを阻止しようとカズがもがく。イワンの顔を引っかこうと左手を背中にまわすが全然、効果は無い。ふと見ると近くに分厚い本がある。左手を伸ばして辛うじて指先に本を引っ掛ける。

イワンがハァハァしながらカズの耳元でささやいた。

「痛クシナイカラ大丈夫ダヨ」

カズが思わず身震いする。そして手繰り寄せた本を左手に握り締め自分の背中に向かって振り下ろす。メチャクチャに振り回すと何発か手応えがあった。イワンの力がゆるんだスキにカズは逃れようとする。が、カズの足はイワンの足にガッシリ挟まれている。

「離せよっ！」

カズは必死に上半身を捻ってイワンから離れようともがいた。そして本の角をイワンの顔にグリグリ押し付ける。

が、イワンはタフだった。少しも効いていない。それどころかイワンは強引にカズの左腕を変な方向に捻った。

「痛ッ！」

カズの左腕から力が抜けて最後の望みが指からこぼれ落ちた。

そして両腕にダメージを食らったカズに抵抗する気力はもはやなかった。

「……クソッ！」
これからイワンが何をしようとしているのか……想像したくもない。
カズが弱ったところでイワンは再びレスリングの試合のようにカズのバックを取り、とうとうカズのズボンを脱がせにかかった。カチャカチャという金属音がしてカズのベルトがイワンの手によって引き抜かれる。
（いよいよダメか……）
カズが諦めかけたその時、ガチャガチャっという音がしてバーンと誰かがドアを開けた。
「な、ここにいたんだ！　オトコフスキー君たら！」
その甲高い声を聞いてカズは我に返った。そしてもう一度、残された力を振り絞ってイワンの手から逃れようと試みた。
「うわぁあああ！」
カズは自分でも驚くほど大きな声を出した。
それを聞いて部屋に入ってきた人間が
「何何何？　だ、誰？」と、驚く。そして部屋の灯りを点ける。
やはりその声の主は目黒だった。が、今のカズにとっては神に見える。
目黒が目を丸くする。
「ええっ？　オ、オトコフスキー君、ズボンは？」
それを聞いたイワンが「ＮＯ！」と、叫ぶ。そしてぱっとカズから離れると慌てて股間を手で隠す。
下半身丸出しのマッチョな外国人少年が恥ずかしそうに前を隠す姿にカズも驚いた。
「恥ズカシイダロ～！　見ルナヨ～！」
意外な反応にカズは唖然とする。これがさっきまで人のズボンを下ろそうとしていた奴の反応なのだろうか？
「え？　え？　オトコフスキー君？　な、何やってんの？」
目黒は目の前の光景が理解できずに混乱しているようだ。

「バカヤロー！　見ルンジャネーヨー！」
イワンは股間を隠しながら目黒にむかってどなる。どうやら本当に恥ずかしがっているようだ。
（とにかく今のうちだ！）と思ってカズはすばやく立ち上がり、入り口に向かってダッシュした。目黒を押しのけてドアの向こうへ！
そして全力で走る。ベルト無しのズボンが下がりそうになるが構わず走る。決して後ろは振り返らない！
カズに突き飛ばされた目黒はぽかーんと口を開けている。そしてカズの後姿を見送りながら呟く。
「あ、もしかして……彼、入部したいんじゃないかな。ね、オトコフスキー君？」
「知ルカ！　ボケ」
「そっか。きっと照れくさいんだな。なんだよ。入部したいならそう言ってくれればいいのに」
「コノ間抜ケ！　オ前ノセイデ「スパイ」ヲ逃ガシテシマッタジャナイカ」
イワンはパンツとズボンをはきながら文句を言った。
「ハハ、ボケとか間抜けとか、そっかオトコフスキー君は汚い日本語の使い方がまだ分かってないんだよね～」と、目黒が引きつった顔で言う。
「……チャント分カッテルヨ。アホタレ！」
とりつくしまもないイワンの様子に目黒はただひきつった愛想笑いを浮かべるしかなかった。

＊　＊　＊

急いで湿布を買ってきた菊乃に勝春が言う。
「任せたヨ。あいつ自分の部屋で横になってるからサ」
「え？　え？　任せるって？」
「だからサ。その湿布で手当てしてやってヨ」

「アタシが？　でも……」
女嫌いの大志のことだから自分が部屋に入っていったら怒るんじゃないかと思って菊乃は躊躇した。
そんな菊乃の背を勝春が押してくれる。
「早く冷やした方がいいヨ。急いで菊ちゃん！」
「そ、そうだよね」
勝春に促されて菊乃が大志の部屋に入ると大志はベッドで横たわっていた。
「あの……入るね」
菊乃が恐る恐るそう言うと大志が慌てて上半身を起こす。
「な、なんだ？　何でお前が……」
大志の顔を直接見てしまうと照れくさくなってしまうので菊乃はわざとぶっきらぼうに振舞った。
まず、有無を言わさずズカズカと部屋の中に入りベッドの前にちょこんと座る。そして大志のズボンの裾を思いっきりまくりあげて、場所も確かめずにペトっと湿布を貼り付ける。
「つ、冷てぇ！」と、大志が悲鳴を上げる。
「あ、ごめん」
「たわけ！　そこじゃない」
「じゃ、どこ？」
「もっと上……この辺りだ。そうだなここを縦に一枚貼ってくれ」
「だったら最初からそう言えばいいのに」
「お前がいきなり貼ろうとするからだろうが！」
「はいはい、ここね」
「冷た！」
「文句言わないの」
冷たさもひと段落して大志が「ふぅ」とため息をつく。
それを見て菊乃がたずねる。
「でもさ。ゴッキーがこんなに苦戦するなんて……イワン君て強いの？」

「ああ。強いな」
「イワン君て何者？　そもそも何でゴッキーにケンカ売ってきたの？」
「そ、それはだな……」
「ミステリーボーイズ。確かイワン君がそう言ってたよね？」
菊乃の質問に困った大志が大きな声で「おーい！　勝春！」と、リビングの勝春に助けを呼ぶ。
しばらくして勝春と美穂子が大志の部屋に入ってくる。
「何だヨ。けが人は大人しくしてなきゃ駄目ダロ？」
「勝春から説明してやってくれ。こいつ、どうやら感付いているらしい」
「こいつ？」と、自分のことをこいつ呼ばわりされて菊乃が顔をしかめる。
腕組みしながらベッドを見下ろしていた勝春がわずかに真剣な顔をみせる。そして口を開く。
「菊ちゃんも聞いちゃったんだよネ。イワンの言ったこと」
「うん。ミステリーボーイズって何のこと？」
菊乃の質問に対して勝春はやれやれと首をすくめた。そして大志の顔を見ながら小さく頷いた。
「仕方ないネ。隠しておくのもそろそろ限界かなって話してたんだヨ。3人で」
「隠すって何？」と、美穂子が驚く。その素直すぎる反応に勝春が苦笑いを浮かべる。
「ま、美穂子ちゃんは気付いてなかったかもしれないんだけどサ。菊ちゃんにはうすうす気付かれてたみたいだネ」
勝春の言葉に菊乃が大きく頷く。
「説明してよ。ホントのこと」
「分かったヨ。じゃ、ぶっちゃけて話すけど。引かないでネ」
菊乃と美穂子が息を飲む。
「実はサ。オレ達3人はこの学校に派遣されてきたんだ。任務でネ」

意外な言葉に菊乃は戸惑った。
（……任務？）
ところがここでも美穂子の勘違い。
「妊婦？」
ガクッと他の3人がずっこける。一気に緊張感が失せる。
「相変わらずお前は……耳鼻科に行った方がいいぞ」と、大志があきれる。
「え～だってホントに「ニンプ」って聞こえたんだもん！」
「まあまあ美穂子ちゃんも大志も本題からそれるからサ」
2人をなだめてから勝春が仕切り直す。
「で、説明を続けるヨ。あのネ。前にも言ったと思うんだけど、オレ達は校長の依頼で学校内で発生するトラブルを解決してたんだヨ」
（それは前にも聞いた。でも……それだけじゃないはず）
菊乃はじっと勝春の顔を見る。そして次の言葉を待つ。
菊乃の無言の圧力を受けて勝春はいつになく真面目な顔つきで説明を続ける。
「校長はオレらが所属する組織に依頼した。で、オレ達が派遣されてきたんだヨ」
菊乃が素直な疑問を口にする。
「組織って何？」
「組織っていうのはネ。簡単に言えば学校専門のトラブルを処理する機関ってとこかな。オレ達にも全貌は分からないけどネ」
「じゃあ何で校長先生はそんな依頼をしたの？」
「やっぱ菊ちゃんは鋭いネ。確かにわざわざ組織に依頼するからにはそれなりの理由があるんだヨ」
それまで黙っていた大志が口を開く。
「何者かがこの学校を陥れようとしている」
「何それ？！」と、菊乃と美穂子が同時に驚く。
「大志の言う通りサ。オレ達の任務はその何者かを特定して学校を守ることなんダ」

勝春の言葉を聞いて菊乃は思い出した。
柔道部の変態クラブでのバイト事件。あの時、モアイ部長は「誰か」にこのバイトを教わったと言った。
次に特進クラスの事件。あの時、特進クラスのエース格2人に近づいたホストたちは「誰か」の差し金だった。
さらに加美村狩り事件の時もそうだ。あの時も「誰か」がスポンサーになってこの学校の生徒ばかり襲わせた。
そして今回の校内賭博事件。図書館の管理人さんはアルバイトだと言った。これも「誰か」が背後でこの学校を陥れようとしていたのだ。
「でも何で？」と、菊乃が答えを求める。
「それはネ。おそらくこの学校の評判を落としたかったんだと思うヨ」
「そんなの！　……何の為に？　誰が？」と、美穂子がうわずった声をあげる。
「はじめはネ。わざと不祥事を起こして校長の座を狙っている奴の仕業だと思ったんだヨ。でも、真の狙いはもっと違うところにあるみたいなんだ」
「真の……狙い？」
菊乃の問いに大志が答える。
「それは今カズが調べている。で、だいたいの見当はついた」
「マジで？」と、身を乗り出す菊乃に対して大志は冷静だ。
「そう焦るな。あとは証拠を集めて校長に提出するだけだ。それでその黒幕が処分されれば事件は片付く」
そこにカズが息を切らせて入ってきた。
「ふぅ……みんなそろってたんだ」と、カズは深く息を吐いた。
「珍しいネ。カズが運動するなんてサ」
勝春はのんきにそんなことを言う。
が、カズはそれどころではないらしい。
「言ってくれるよ。こっちはイワンに捕まりそうになって大変だっ

たんだから」
「マジかよ！」と、大志が絶句する。
勝春が心配そうにカズの顔を覗き込む。
「マジかヨ？　イワンに捕まったって……まさか」
勝春の言葉にカズがブンブンと大きく首を振る。
「さ、最悪の事態は避けられた。何とか逃げてきたよ」
それを聞いて大志と勝春がホッとした表情をみせる。
「あ、ところでさ。ここまで走って帰る途中にＴＶ局のカメラが何台かあったんだけど何かあった？」
カズが妙なことを言うのでみなが首を傾げる。
「いや。特に何も……」と、菊乃が言いかけた時、唐突に携帯の着メロが鳴り響いた。
誰のだろうと皆がお互いの顔を見る。
「あ、オレのだ。ごめんネ」と、勝春が電話に出る。
そして「えっ？」と短く呻く。
勝春の顔がみるみるうちに強張る様を見て菊乃たちは急に不安になった。
「分かったヨ。うん。ありがとネ」と、電話を切り、勝春は急に立ち上がった。
「ど、どうしたのカッチー？」
菊乃の問いには答えずに勝春は部屋を飛び出した。
カズと美穂子も慌ててその後を追う。
大志もベッドから降りて立ち上がろうとするが足が痛むのか「グッ」と、顔をしかめる。
それに気付いて菊乃が反射的に手を貸す。
「スマンな」と、大志は素直に礼を言う。
菊乃に支えられながら大志がリビングに移動すると、勝春たちがＴＶに釘付けになっている。
「どうした？　何があったんだ？」と、大志が尋ねる。
「……最悪だよ」と、カズが振り返って言う。

「やられたネ」と、勝春の声にも落胆の色がありありだ。
大志と菊乃は顔を見合わせる。そしてゆっくりＴＶに近づき、画面をみつめる。
ＴＶでは見覚えのある光景……そう。まさに加美村学園の校門が映っている。
そして流れてくるナレーション。
『もともとこの噂は一週間ほど前からインターネットで話題になっていました。そして今回、従業員のＳさんの証言でいよいよ疑惑が信憑性を帯びてくることとなりました』
菊乃が眉をひそめる。
「何これ？　噂とか疑惑とか……」
ＴＶの場面が変わって今度はどこかの工場が映し出される。そして画面の端っこテロップが……。
「牛肉偽装。学校給食にも？」と、菊乃がテロップをそのまま口にする。
（牛肉偽装って？　意味わかんないし）
今度は番組のレポーターが工場の前で中継をしている。
『関係者の情報では近々、本社および工場への立ち入り調査が入るとのことです。一方、この牛肉偽装疑惑について「ミート・ポップ社」の加美村社長は次のようにコメントしています……』
ここで画面はＶＴＲに切り替わる。そこに映った人物を見て菊乃は勝春たちが慌てているのかやっと意味が分かった。
「こ、校長先生……」
画面に大きくアップされた顔、それはまぎれもなく加美村学園の校長だ。
「知らなかったヨ。校長が精肉会社を持ってるなんてサ」と、勝春がため息混じりに呟く。
カズはカズでいまいましそうに頭を掻く。
「完全にやられたね。まさかこんな手を使ってくるとは」
「どういうこと？　校長先生が牛肉偽装って？」

菊乃の質問に勝春が力なく答える。
「精肉会社はネ。奥さんの実家らしいヨ。で、校長が社長を兼任してたんだってサ」
「そんなの聞いてない」と、美穂子が怒った顔をみせる。
「敵はそれだけよく調べてるってことサ」
勝春は悟ったような口調でそう言うがカズは悔しさがありありの様子。
「参ったね。せっかく証拠をつかんだのに……肝心の校長がこれじゃ」
大志が足を伸ばした状態でソファにドカッと座る。そして一言。
「電話してみればどうだ？　校長に」
「それがさっきから繋がらないんだ」と、カズが首をすくめる。
「無理も無いネ。たぶん電話が殺到してるんだろ」と、勝春が携帯を眺めながら言う。
「とりあえずメッセージを残しておいたからそのうちかかってくるでしょ」と、カズも半分あきらめ顔だ。
報道によると校長が社長を兼任している精肉会社「ミート・ポップ」は区内を中心に主に学校給食の食材を提供しているという。取り扱い品目はハンバーグ、肉団子、コロッケなど。そのどれもが牛肉１００％といいながら実は豚肉を混ぜていたのではないかというのだ。そんな噂がネットで広がり、さらに従業員が偽装を告発したということで騒ぎが大きくなったのだろう。夕方のニュースを幾つかはしごして分かったことをまとめるとこんな感じだ。

しばらくメールをチェックしていた勝春が「マジかヨ」と、呟く。
「どうかしたの？」と、カズがたずねると勝春はいつになく真剣な表情で言った。
「もたもたしてられないかもヨ。月曜の朝イチで職員会議だってサ」
「それがどうかしたの？」と、菊乃が不思議に思ってたずねる。
勝春は菊乃の方をチラリと見て答える。

「職員会議で校長の解任を決議するんだってヨ」
「えっ？」と、カズが思わず声をもらす。そして顔をしかめる。
「まずいな。ここで校長が解任されちゃったら元も子もない」
大志が低い声で同意する。
「最悪の場合、俺達のやってきた事がすべて無駄になるって事だな」
勝春が時計を見ながら言う。
「タイムリミットは月曜の朝だネ。明日あさってで何とかしないと」
「そういうことだ」と、大志がうなずく。
３人の会話を聞いてさすがの美穂子も不安になったらしい。
「でもね。もし、ニュースが本当だったらどうするの？」
美穂子の言葉に皆が沈黙する。
が、ぽつりと大志が「俺は信じるぜ」と言う。
「なんで？」と、菊乃が大志の顔を見つめる。
そこで大志は言い切る。
「あのコロッケ……あの味は牛肉１００％でなければ絶対に出せない」
それを見てカズが提案する。
「とにかく出来るだけの事はやろうよ。皆の力を合わせて！」
とにかく時間が無い。このまま校長が解任されてしまうと敵の思う壺だ。
状況は圧倒的に不利。が、カズも勝春も大志も諦めてはいない。
いよいよミステリーボーイズの反撃が始まる……。

２　総力戦

カズの計画はこうだ。まず、勝春はそのコミュニケーション能力をフルに活かして内部告発をしたという従業員Ｓを探し出す。ＴＶではモザイクがかかっていたがミート・ポップ社の社員は８０名ほ

どなのでSが誰なのか特定することは可能だろう。だが、それだけでは足りない。Sが嘘の証言をしていることを暴かないとならないのだ。その為には勝春がSに接触してしっぽを掴まないとならない。たった2日でそれが出来るのか？　ここは勝春の真価が問われる。

次にカズと美穂子は工場に潜入する。そこで物的な証拠を見つけ出すことが出来れば校長の無実を晴らすことができるはずだ。

そして足を痛めている大志は菊乃と組んでネットで捜査をする。そこで噂の出所を探り、可能な限り騒ぎを沈静化するよう工作する。

それぞれの分担と役割を決めた後でカズがみんなを奮い立たせる。

「とにかく時間が無い。こうなったら総力戦だ。みんな頑張ろう！」

さすがに今日は遅いので菊乃と美穂子はいったん帰宅することになった。明日、土曜日は朝早くから行動しなければならない。

大志の足の具合が気になったが菊乃は明日に備えて早く帰って寝ることにした。

＊　＊　＊

「昨日の夜に校長から電話があったよ」と、カズが言った。

「ホント？　で、どうだったの？」と、美穂子が心配そうな顔をする。

「豚肉なんて混ぜてないってさ。これは敵の陰謀だって言ってた」

「そうなの……何かかわいそうだね。校長先生」

「うん。何とか校長の無実を証明しないとね」

「そだね。私もガンバルよ」

「それはいいけど……そのリュックは何？　なんだか重そうだけど」

「え？　だって工場に潜入するって言うから準備してきたんだけど。何か？」

「何が入ってるんだい？」

カズが不審そうな口ぶりでそう尋ねるので美穂子はムッとしながらリュックの中身を披露した。

「まずは指紋を残さないように軍手でしょ。で、懐中電灯、ロープ、ビデオカメラ。あ、これはお父さんの工具セット。これがあれば鍵のかかった部屋でも……」
「藤野さんピッキングできるの？」
「ううん。できない」
美穂子があっさり首を振るのでカズが苦笑いを浮かべる。
「それじゃ意味ないんじゃ……」
「だって！　……でも何でカズ君は手ブラなの？」
「ああ、それは特に必要ないから」
「何でよ？　スパイってちゃんと準備しとくものじゃない？」
「いや。工場に潜入といってもちゃんと案内してもらえるから」
「へ？　何それ？」
「校長が工場の人に連絡しておいてくれたからね。ボクらは自由に見ていいってさ」
「何それ？　早く言ってよ～」
そんな調子でカズと美穂子が工場の入り口に到着する。
土日はもともと工場が休みなので門が閉まっている。辺りに人の気配はなく報道関係者の姿も無い。
「思ったより静かだね」と、美穂子がきょとんとした顔で呟く。
「まあ、マスコミもそんなに暇じゃないんでしょ。ほら、あそこに警備のおじさんがいるよ。あの人に聞いてみよう」
カズが言った通り、警備員は2人を簡単に中に入れてくれた。ちゃんと校長が手を回してくれていたのだ。

「とりあえず生産ラインを見ておこうか」
カズの提案で2人は一番手前の建物に向かう。
工場といっても窓がやけに小さいぐらいで特に変わった作りではない。壁の色もベージュで一見すると何の建物かは分からない。
なぜか建物の入り口に古びた自転車が壁に立てかけるように放置してあった。一目見て後輪がパンクしている状態だ。美穂子がしげ

しげとそれを観察してクスッと笑った。
「可愛い～これって持ち主の名前かな？」
美穂子が見つけたのはタイヤを保護するプレート。それはよく名前や住所を書く部分だった。そこには［Ａｓｉｍ］と丸っこい字で書かれていて「ｉ」の点の部分がハートマークになっている。
「ね、カズ君。これ何て読むんだろ？」
が、カズはチラリと美穂子の指差す箇所を眺めただけで、
「さあ。もう行くよ」と、建物の中に入ろうとする。
せっかく面白いものを見つけたのにカズがちっとも興味を示さないので美穂子はちょっと不満顔だ。

警備員に借りた鍵でカズが先に中に入る。
真っ暗、というほどではないが建物内は暗くてしんとしている。天井が高く、やたらと広い印象だ。
それにしても静まり返った工場は不思議な空間だ。動かない機械に囲まれた通路を歩いているとなんだかＳＦの世界に迷い込んでしまったような感覚になる。
「よく手入れしてあるな」と、カズが感心する。
「機械とかピカピカだよねぇ～」
「そうだね。おそらく毎日、念入りに洗浄してるんだろう。そんな会社が牛肉を偽装したりするものかな」
「だよね～。せっかく機械ピカピカなのにね」
相変わらずトンチンカンな美穂子のコメントにカズが困惑する。
「いや。機械がきれいなのと豚肉を混ぜるのは関係ないと思うけど……」
確かに衛生面で問題は無い。が、カズがチェックしようとしているのは他のことだ。
「やっぱり無いな……」
カズは少し焦った。普通なら物的証拠が手に入るはずなのだ。なのにこの工場ではカズの目当ての物が無い。

工場内を歩き回るカズに対して美穂子はのん気に鼻歌を歌いながらブラブラ歩く。
「ねえ。カズ君。せっかくなら何か作ってるところ見たかったね～」
「え？　まあ、普通の工場見学ならそうかもしれないけど今回ばかりはね」
「なんかもう飽きてきちゃったなぁ」
「参ったな。やっぱり無い。他をあたるしかないか」
「無いって何が？」
「ん？」
「さっきから何、探してんの？」
「ああ……冷凍庫だよ」
「レイトウコ？　何で？」
「ここで作ったハンバーグとか肉団子とかが出荷する前に保管されてないかなと思って」
「あ！　そっか！　それを調べるんだ」
「そういうこと。ＤＮＡ鑑定すれば一発だからね」
「ＤＮＡ鑑定ってホントの親子かどうか調べるやつでしょ？　牛の親子関係を調べてどうするの？」
「いや……この場合は親子かどうかじゃなくって、豚肉が混じってないかを検査するんだけどね」
「へえ、そうなんだ。そうだよね～。牛の子供が豚だったらビックリだもんねぇ」
　美穂子のコメントに苦笑いを通り越してカズはずっこけてしまいそうになった。そして気を取り直すようにふぅと息を吐く。
「この会社のウリは食品を作り置きしないことらしいんだ。つまり製造した食品をその日のうちに納入してしまうってことさ」
「余ったらどうするのかな？」
「ボクもそう思ったんだ。少しぐらいは食材が残ってるんじゃないかって。でも土日は給食も休みだからストックが全然、無いみたいなんだよね」

例えば、カズの言うように既に製造した食品の残品があれば、それをＤＮＡ鑑定すれば無実を証明できるはずだ。しかし、学校給食からの注文を受けてその日のうちに製造・納品してしまうこの会社ではあいにくそれが無い。それにＤＮＡ鑑定といっても土日では鑑定してくれる機関も休みに違いない。

カズの目論見は外れた。止む無く２人はミート・ポップ社の本社機能のある建物に向かった。

＊　＊　＊

その頃、勝春はミート・ポップ社の従業員と会っていた。

目的は言うまでもない。ＴＶで嘘の告発をした「Ｓさん」が誰なのかを探る為だ。

こういう時に一番手っ取り早いのはもっとも「おしゃべり」な人達に話を聞くこと。それも会社に忠誠心のない種類の人間、つまりパートのおばちゃん達に好き勝手しゃべってもらうに限る。そしてそこから情報を集めていくのだ。

ファミレスではじめて勝春の顔を見たおばちゃん２人組は「あら」と、ともに頬を赤らめた。

「やだ。可愛いじゃない」と、太った方のおばさんが軽く上目遣い。

「イケ面っていうのかしら。肌とかきれいでうらやましいわぁ」と、化粧が濃いおばさんがため息まじりに呟く。

勝春は「スミマセン。急にお呼び立てしちゃって」と、頭を掻く。

そして早速、話を切り出す。

「実は「いとこ」が来月からそちらの会社に中途採用でお世話になることが決まってるんですヨ。なのにあの騒ぎでしょ。おじさんが心配しちゃって……」

「んまぁ～そうなの～」

こういう時に「いとこ」という存在は便利なものだ。この場合、ただの「知り合い」では物足りないし「兄弟が」となると深刻にな

りすぎてしまう。遠すぎず近すぎず。とにかくこの「掴み」のおかげでおばちゃん達は勝春を簡単に受け入れてくれた。
　ところが問題はなかなか核心に迫らないこと。彼女達のおしゃべりのうち8割は会社の同僚や社員へのグチや不満で今回の事件も半分「お祭り」的なノリで騒いでいるだけのようにも見える。身近で事件が起こった時に、自分がその中心にいなくともやたら大騒ぎする人がよくいる。勝春がひとつ質問するとそれが何十倍にもなって跳ね返ってくる。しかし、勝春は決して嫌な顔をしない。ただ、ひたすらニコニコと話を聞いている。勿論、おばちゃん達の話のすべてを理解しようとしたら頭が腐ってしまう。聞いているフリをしながら頭の中は高速回転で情報をふるいにかけている。
「アレ？」
　ふいに勝春が周りを見回すといつの間にかおばさん達の仲間が増えている。勝春の前後左右の席が女の人で埋まっていて、彼女達の視線が勝春に注がれている！
　驚いて顔を引きつらせる勝春に向かって太ったおばさんが言う。
「皆にメールしといたのよぉ。皆の話を聞けば犯人がわかるんじゃないかしら！」
「は、ハァ……」と、勝春は目の前が真っ暗になりそうだった。
　ただでさえおしゃべりなおばさんがファミレスの半分を埋め尽くしているのだ。これを全部さばくとなると、それだけで丸一日かかってしまう……。

＊　＊　＊

　残る大志と菊乃はインターネットで嘘の告発をした「Sさん」の情報収集を担当していた。
　勝春が「この男はTVのインタビューに出るぐらいだからきっとブログでも事件のことを書いているはずだヨ」と言うので、2台のPCで手分けして片っ端からブログをあたっているのだ。

まず大志が検索エンジンでカズの考えた複数のキーワードを入力、怪しいと思ったものを拾っていく。キーワードは３０個近くあるのでこれを組み合わせるとなるとかなりのパターンになる。
さらに検索でヒットしたものの中から効率よく怪しいものを選ばなくてはならないので結構、大変な作業なのだ。
「おい。ちゃんと読んでるのか？」
大志に咎められて菊乃が伸びをする。
「読んでるよ～。でもなんか飽きてきちゃった」
「我慢しろ。地味な作業だがな」
「だってさ。知らない人のブログを延々と読まされるのってけっこう苦痛だよ」
「捜査とはそういうものだ」
「ね。喉、渇かない？　コーヒー入れよっか？」
「お前はさっきからそればかりだな。ちょっとは真面目にできんのか？」
「どっちかっていうとアタシは身体動かす方がいいな。美穂子と代わればよかったかなぁ」
「ふん。ここに残ると言い出したのはお前だろう」
それもそうだ。確かにケガ人である大志に付き添いたいと菊乃は思っていた。それに二人きりでこの部屋に残れるということに対して、まったく下心がなかったわけでもない。
「そりゃそうだけど……」と、口を尖らせる菊乃の心の内など知る由もなく大志は黙々とＰＣをカチャカチャかき鳴らし続けた。
（ゴッキーってば全然、そういう雰囲気じゃないんだもんなぁ……はぁ……）

＊　＊　＊

ミート・ポップ社の本社建物は３階建てで１階がトラックを横付けする出荷口になっていた。　２階が事務所や応接室。偉い人の個

室もこの階だった。
そして3階が食堂や休憩室、更衣室という造りになっている。
「上から見ていこうか」というカズの提案で2人は3階から順に建物内を探索することにした。
まず目に付いたのは１００人ぐらい入れそうな食堂だ。
今日は勿論だれもいない状態なのでやたらと広く感じられる。
「ね～カズ君。ここって超広くない？」
「そうだね。あれっ、あっちの部屋は卓球台とかビリヤード台とか置いてあるよ」
「ホントだ。いいなぁ～私もこういう会社に入りたいなぁ」
「はは、まあ確かにこういう施設が充実してるってのも良い会社の条件ではあるけどね」
大きな食堂にレクリエーションのための部屋、さらに広々とした休憩スペースなど、都内の工場にしては贅沢な造りになっている。
「ね、ここって休憩する所だよね？　自販機もあるし」と、美穂子が目で訴える。
「そうだね。ちょっと休んでいこうか？」
「だよね！　ちょっと休憩、休憩」
「森野さんは何を飲む？」
「アイスティ！　ミルクで」
「了解」
カズが缶ジュースを2本買って美穂子に1本手渡す。そして適当なソファに腰掛ける。
「ふぅ」と、カズは深くため息をつく。
思ったような成果が上げられず、さすがのカズも疲れていた。
パシュッと缶を開ける音がおおげさに響いた。
「ふぅ」と、美穂子がカズの真似をしてため息をついた。が、カズのため息とは随分ニュアンスが違う。
美穂子はちょこんとカズの隣りに座った。
そしてわざと自分のお尻をカズのお尻にくっつけた。

「ちょ、狭いよ。森野さん」と、カズが顔をしかめる。
これだけ広いスペースがあるのに何でわざわざくっついて座るの？　といった風なリアクションだ。美穂子がどういうつもりでそういう行動に出たかなんてまるで気付いていない。
「だって……ここって寂しいんだもん」
「そりゃそうだけどさ」
やはりカズは鈍感なのだ。女の子の気持ちなんてまるで分かっていない。というより興味のが無いのかもしれない。
密着作戦が不発に終わってしまったので美穂子は面白くない。少し怒った表情で、
「カズ君って冷たい」と、呟いてぷいと席を立ってしまった。
「え？　冷たい？　何で？」
何で美穂子が怒っているのか分からずにカズは困ったような顔をする。
美穂子はそんなカズをソファに残して缶ジュース片手に休憩室内をプラプラ歩いた。
テーブル席が6つ、大きな液晶テレビを囲んだコーナーが1つ、ガラスで仕切られた小部屋は喫煙室らしい。とにかく広い休憩室だ。
そんな部屋の隅になぜか小さな絨毯が敷いてある。
美穂子がそれを見つけて顔をしかめる。
「あんまりキレイな絨毯じゃないなぁ」
なんでこんな所にポツンと絨毯がひいてあるのか？　それも玄関マットみたいな中途半端な大きさの……。
「ね、カズ君。見て見て」
美穂子が手招きするのでカズがソファから立ち上がって部屋の隅までやってくる。そして美穂子が指差す部分に目をこらす。
「絨毯？　どれ……」
「ね。どうせならもっと立派なのにすればいいのにねえ」
「いや……これって……」
カズの目つきが変わる。そして何かを思いついたようにはっとし

た表情を見せる。
「もしかしてこれは！　てことは方角は……」
カズが近くの窓に駆け寄って太陽の位置を確かめる。
「え？　何？　カズ君てば！」
「やっぱり！　そうか。それにさっきの自転車！　やっぱりそうか」
美穂子の問いかけなどまるで無視してカズが推理する。
「自転車って何？　教えてよカズ君」
「ありがとう森野さん！　おかげで何とかなりそうだ！」
「意味分かんないんですけど……」
「後で説明するから。とりあえず早くそれ飲んじゃって！」
「え？　これ？」
カズに急かされて美穂子は缶ジュースを無理やり飲み干そうとしてむせた。
「2階に行くよ！　確か人事部の鍵もこの束の中にあったはず」
「ジンジブ？」
戸惑う美穂子の手を取ってカズは勢いよく駆け出した。

＊　＊　＊

もしもコーヒー1杯で何時間ファミレスで粘れるかの大会があったなら間違いなく優勝はおばさんコンビだろう。
とにかく喋る。喋りまくる。ひとつの話がたびたび脱線する。しかし、そこから話が発展するので終わりがない。エンドレスで喋り続けるおばさん軍団が替わるがわる勝春のテーブルに顔を出しては明らかに事件とは無関係な話題を振りまいていく。まさにお喋りの絨毯爆撃！　これはもはや拷問だ。
「あの。じゃあボクはそろそろ」と、いう台詞を何度潰されたことか……。
しかし、まったくの無駄というわけでもない。少なくともS氏に繋がりそうな情報はそこそこ集まった。

容疑者は3人。おそらくこの3人を順にあたっていけば当たる可能性は高い。
ただ、時間が無い。早く容疑者を特定しないと、さすがの勝春でも3人同時に仲良くなって口を割らせるのは難しい。できれば容疑者を1人に絞ってガセネタをTVで喋ってしまったことを認めさせたい。そしてできれば「嘘をついていました」と白状させることでこの事件がでっちあげであることを証明させたいのだ。
(どうやってここから脱出しようかナ……)
と勝春が思案していると、うまい具合にカズから電話がかかってきた。
「ちょっと失礼しますヨ」と、勝春が携帯を取り出して離席する。
あら、と残念そうな顔をするおばさん達から避難しながら勝春がわざと大きな声を出す。
「分かったヨ!」
『え? まだ何も言ってないけど』と、電話の向こうでカズが不審がる。
「えぇっ? マジで。そりゃ大変だネ。すぐ出るから待ってて」
勝春はオーバーに演技しながらそのままファミレスを出た。
そしてダッシュ!
『ちょっと勝春? なにやってんだい?』
「脱出だヨ!」
勝春は電話を片手にしばらく走ってから身を隠す。
そして息を切らせながら話を続ける。
「ごめんヨ。ちょっと監禁されちゃっててサ。ファミレスで」
『ファミレスで監禁? ああ、聞き込みにいって逆に捕まっちゃったんだね』
「まあネ。で、何か手掛かりは?」
『うん。残念ながら物的証拠は無かったんだけどね。突破口は見つかった』
「さすがだネ! で、オレに何か?」

『今、人事部で従業員のファイルを見てるんだけど、せっかくだからそっちの聞き込みで怪しい奴はいないかなって』
「人事部だって？　それって個人情報ダロ。まずいんじゃない？」
『今回ばっかりはそうも言ってらんないでしょ。校長、っていうか社長の了解も得てるし』
「ま、それもそうだネ。そっか。じゃあ今から言う3人の情報を頼むヨ」
そこで勝春は容疑者3名のフルネームをカズに伝えた。
『了解。じゃあその3人の履歴書をコピーしとくよ』
「で、カズの方はどんな手掛かりを見つけたのサ？」
『詳しくは帰ってから話すよ』
「そう。じゃあオレも今から帰るヨ。それじゃ後で」
この時、時間は土曜の午後4時。月曜の緊急職員会議までは約40時間。
残された時間は少ない……。

＊　＊　＊

それにしても会話が無い。朝の9時から夕方までずっと二人きりだというのに……。
別に大志が怒っているというわけではない。大志は大志で真剣に自分の任務に取り組んでいるだけなのだ。
それは菊乃もわかっているつもりだ。が、さすがにこうも会話が無いと自信が無くなってくる。
「ね……夕飯どうする？」
菊乃は菊乃で一生懸命、話しかけているつもりだった。
しかし、大志から返ってくる言葉はややもすれば冷たく生返事に過ぎない。
「ね。だから夕飯。気分転換に外行かない？」
菊乃の提案に対して大志はＰＣの画面から目を離さずに言った。

「お前、パン買って来い」
「え～やだ。お昼もお弁当だったでしょ」
「コロッケパン3つ頼む」
大志のつれない態度に菊乃がついに爆発した。
「いいわよっ！　買ってきてもいいけど3つともジャムパンにしてやるっ！」
「は？　何を怒ってるんだ？」
「もう付き合ってらんない。アタシ帰る！」
「それは構わんが……まだ結果が出てないぞ」
大志はきょとんとした顔で菊乃を見上げる。
そのリアクションが腹立たしいやら呆れるやらで菊乃はぐっと睨みつける。
「結果って……だから何なの？」
「カズと勝春が有力な情報を持ち帰ってきた時にこちらだけ手掛かりなしでは申し訳ないからな」
「そりゃそうだけど……」
確かに大志の言うことは間違っていない。今は神美村学園がピンチなのだ。皆それを救うために必死で動いている。そんな中で大志の横顔に見とれていたり、勝手に不安になったりしている菊乃の方が悪いに決まっている。
だけど、こればっかりはしょうがないのだ。
頭の中では捜査に集中するべきだとわかっている。なのに……視線は自然に引き寄せられ、胸は勝手に締め付けられてしまう。
「お、お、おいっ！」と、大志が慌てた様子で菊乃の顔を見上げる。
それを見て、菊乃は自分が泣いていることに気付いた。
大志はなぜ菊乃が泣いているのかさっぱり理解できずにあたふたしている。
「ご、ゴメン」と、菊乃が泣き顔を見せまいと大志に背中を向ける。
「な、泣く意味が分からん……が、その、なんだ」と、言って大志が口ごもる。

恐らく、こういう場面で女の子にどのような言葉をかければ良いのかが分からないのだろう。
菊乃は次の言葉を待った。
（次に何て言ってくれるの？）
「……何と言って良いのか……俺。不器用なもんで……その」
半分だけ振り返ってチラリと様子を伺う。恥ずかしがっている大志も悪くない。
「その、なんだ。とりあえず……ガンバレ」
（は？）
唖然とした拍子に涙が止まってしまった。
イラッとくるところを抑えて菊乃は大志に向かって言った。
「頑張れって何を？」
「いや。ま、つまり泣くなってことだ」
「泣いちゃいけないの？」
「そういうわけではない。ただ、俺の前で泣くな」
「それって命令？」
「いや……強制ではない」
菊乃はじっと大志の目を見つめた。
目が合うこと数秒……先に大志が目を逸らした。菊乃の強い視線に耐えられなかったのかもしれない。
大志は苦し紛れに言葉を発する。
「目の前で泣かれるのは苦手だ」
「じゃ、違う所で泣けばいいのね？」
「違う！　そうじゃない。お前に……泣いて欲しくない」
「俺の前で泣くなって言うんなら……ホントにそう思うなら……キスして」
「なっ！」
大志が驚愕する顔を見届けてから菊乃はちょこんと大志の前に正座した。そして、ぎゅっと目をつぶる。
（これは賭け……これでも手を出してこなければホントに……）

1秒、2秒……　時が息を潜めて事の成り行きを見守っている。
3秒、4秒……　この沈黙には様々な思いが凝縮している。
5秒、6秒……　張りつめた空気が痛い。
7秒、8秒、9秒……
（なんで？　なんで来ないの？　アタシはこんなに……）
目を開けるわけにもいかず菊乃は焦った。
そしてその焦りが菊乃を思いきった行動に駆り立てた。
（もぅっ！）
薄目を開けてみる。そして無防備な大志に向かって唇を寄せる。
（やだ。届かな……）
あともう少し！　というところで菊乃はバランスを崩してしまう。
その拍子に思わず反射的に大志の首に両手を回してしまう。
「危な……」と、大志が菊乃の肩をつかむ。
あっという間に唇の距離がぐっと縮まる。息をしてしまうと吐息が触れてしまいそうだ。
（今度こそ……）
菊乃は静かに目を閉じようとした。
と、その時……。
「ただいまっ！　何とかなりそうだヨ！」
と、威勢の良い勝春の声が響いてきた。
「うわっ！」と、大志が慌てて菊乃の肩を押し返す。
「え？」と、菊乃は茫然とするしかなかった。
「あれ？　どうかしたノ？」
勝春がきょとんとした表情で2人の様子を眺めている。
菊乃は心で泣いた。
（カッチーってば……あと5分遅く帰ってきてよぉ）
気まずい空気に気付いた勝春がバツの悪そうな顔を見せる。
「まずかったカナ？」
「ふざけるな。何もまずいことなど無い！」
「いやサ。なんか菊ちゃんオレのこと睨んでるし……」

「き、気のせいだろう！　俺たちは地道に調査してたんだからな。うん」
「そうなんダ。で、ヒットした？　ブログとか？」
「……むぅ。怪しいのは何件かあったが確信を持てるほどのものは……」
　大志と勝春の会話を黙って聞きながら菊乃は行き場の無い怒りを必死に抑えた。
（もう少しだったのに……カッチーのバカ……）
「とりあえず怪しいブログを何件か拾ってＵＲＬを記録しておいた。見るか？」
「そうだネ。一応、こっちも３人までは絞ったんだヨ」
「お、そうか。さすがだな」
「うえ。何だこれ？　こんなにあるのカイ？」
「それだけ食品の偽装が多いってことだ。実に嘆かわしい」
「こん中でサ。日本代表の試合観に行ったって奴いないかナ？」
「日本代表ってサッカーか？　確かあったような……な？」
　大志が菊乃の顔をチラリと見る。が、菊乃は「知らない」と、そっぽ向く。
「ちっ。確か青っぽいＨＰで……これだったか……いや。こっちか」
　大志と勝春が熱心にＰＣを覗き込んでいる様子を横目で睨みながら菊乃はため息をついた。
「これは違うネ。じゃ「車好き」か「釣りが趣味」の奴っていないかナ」
「車か。それならこれはどうだ……」
　しばらくして今度はカズと美穂子が引き上げてきた。
「お、皆やってるね」と、カズが部屋に入ってきた。そして妙な雰囲気に気付く。
　カズは大志の側に寄ってきてこっそり尋ねる。
「何かあったの？　藤村さん怒ってるみたいだけど……」
「さあな。それよかそっちはどうだ？」

大志に言われてカズが答える。
「あ、工場の方ね。うん。何とかなりそうだよ」
「さすがだネ！」と、勝春がにっこり笑う。
「森野さんのおかげでね。貴重な証拠がつかめそうだよ」
「証拠が見つかったのか？」と、大志も目を輝かせる。
「物的証拠って訳じゃないんだけどね。明日、証人になってくれそうな人と会ってくるよ」
「証人？」と、勝春が拍子抜けしたような顔をする。
「言っとくけどただの証人じゃないよ」と、カズは自身ありげに言う。
「証人ネ……昼間にパートのおばちゃん達に会ったけどサ。どうかナ」
「カズがそう言うんなら勝算があるんだろうよ」
やはり大志はカズを信用している。
「まあね。明日、アシムとハマドに会ってくるよ」
カズの言葉を聞いて勝春が聞き返す。
「アシム？　ハマド？　……って外人かヨ」
それには答えずカズは美穂子と顔を見合わせてにんまりと笑った。
そして勝春たちにお願いする。
「勝春と大志は今晩中に「嘘つき告発者」を突き止めて欲しい。で、何とか明日中に吐かせてよ」
「了解だヨ！」と、勝春が親指を立ててＯＫする。
「やってみよう」と、大志は再びＰＣに目を移す。
クライアントである校長がクビになってしまうまで残り時間は３６時間だ。

3　忙しい日曜日

日曜の朝、菊乃は携帯の呼び出し音で目が覚めた。
眠い目をこすりながら「ふぁい。もしもし」と、電話に出る。
電話の主はカズだった。
『おはよう藤村さん』
「あ、おはよ……」
『今日の予定なんだけど。いいかな？』
「ん？　……予定？」
天井を見上げながらぼんやりとカズの話を聞く。
『昨日の夜なんとか容疑者を特定することができたんだ。で、勝春と大志はこれからそいつの所に乗り込むことになった』
「へぇ……そうなんだ」
寝起きで頭が回らない。
『藤村さん今日は大丈夫？　午後からボク達と合流できるかな？』
「あ、うん。大丈夫。午後からね」
『それじゃ1時にF駅で。森野さんにはボクから連絡しておくから』
「うん。わかった」
電話を切ってから菊乃は大きく伸びをした。そしてベッドから起き上がる。
（そっか。今日がリミットなんだっけ……）
ふと時計を見ると9時を回っていた。カーテンの隙間から差し込んでくる光は活き活きとしている。
（天気、良さそうだな）
今日は忙しくなる予感がした。

＊　＊　＊

勝春と大志はターゲットが出てくるのをじっと待った。
情報ではターゲットは日曜の朝に必ず車を洗うという。ただ、その時間が分からないので止む無く二階建ての古いアパートの前で張り込みを続けている。
「出てこないネ。まだ寝てるンじゃないかナ」
「随分、待たせやがるな。今日ぐらい早起きしやがれ」
「ハハ。そういうわけにもいかないでしョ」
「もうすぐ十時だぞ。ガセネタじゃないのか？」
「いや。確かな情報なんだけどネ……ってホラ。アイツじゃない？」
「ああ。間違いない」
２人の視線の先にはアパートの階段を下りてくる一人の若い男の姿が……。
男はだるそうに階段を下りるとひとつ大きなあくびをして道路に出た。そして手のひらで車のキィを弄びながらトロトロとどこかに向かう様子。
「ヨシ。行くヨ！」
勝春の合図で２人は作戦を開始した。

まずはターゲットに気付かれないように後ろから距離を詰める。そして頃合を見計らって勝春が声を掛ける。
「杉本泰三さん、ですネ」
ふいに名前を呼ばれてその男はビクッと立ち止った。そして振り返って怪訝な顔を見せる。大抵の人間は見知らぬ人間にいきなりフルネームで名前を呼ばれると驚いて動きが止まってしまうものだ。
その隙を利用して勝春が畳み掛ける。
「重要な話があるンですヨ。ただ、ここで話すにはマズイ内容なんでネ。あちらの喫茶店に行きましょう」
この場合「行きませんか？」ではダメだ。相手に拒否させないためにはキッパリと言い切ること。その方が効果的に誘導できる。

「な、な、何？」と、杉本がギョロ目をむいて言葉に詰まる。
「さあ。行きますヨ」
「ちょ、ちょっとちょっと！」と、抵抗する杉本。
そこですかさず大志が杉本の腕をむんずと握る。そして無言で睨みつける。上からの鋭い視線に杉本がひるむ。が、大志は一言も発しない。
無言のプレッシャー……これも勝春の戦略だった。一言もしゃべらない人間を同席させることで相手を心理的に追い込むつもりなのだ。
「逃げると不利になりますヨ。つまり法的に弱い立場に立たされる事になりますネ」
「な、お前らいったい……」
「会社側はあなたを訴える事を検討してますヨ」
「な、何のことだよ。全然、意味わかん……」
「損害賠償金。払えますかネ？　あなたに」
「ソンガイバイショウ？　何だよそれ！」
「だから重要な話なんですヨ。さ、ついてきてください」
怖いお兄さんを演じる大志、にこやかな表情で厳しく責める勝春。
訳が分らない杉本はすっかり混乱してしまったらしく、おとなしく2人に連行されることになってしまった。

喫茶店に場所を移して勝春と大志は杉本にプレッシャーを与え続ける。
「実はネ。ミート・ポップ社はあなたを名誉毀損で訴えるつもりなンですヨ」
「ミート・ポップ？　あ、あれはガチだろ？」と、杉本がしらばっくれる。
勝春はニッコリ笑顔を浮かべたまままきっぱりと否定する。
「いいえ。ガセネタですヨ。あれはあなたが意図的に流したデマです」

杉本は目をギョロギョロさせながら言い張った。
「は？　何か証拠でもあるの？　証明できないでしょうが！」
「できますヨ。ＤＮＡ鑑定すればすぐに分りますからネ」
勝春の言葉を聞いて杉本は自らの小心振りを隠すかのようにまくしたてる。
「無理でしょそれは。う、うちの会社の場合は。だ、大体、製品がなきゃ鑑定なんて出来っこないはず！」
「なるほどネ。作り置きが存在しないから、ですか？」
「そ、そうだよ。スーパーとかで売ってりゃ別だよ。商品調べれば一発でしょ。でもうちの会社は給食専門だから。サンプルが無きゃ証明のしようが無い」
「確かにネ。ミート・ポップ社の製品は作ったその日にすべて給食に回される。だから保存料など一切なしが売りでしたよネ」
勝春の言葉を聞いて杉本が徐々に勢いを取り戻してきた。
「でしょでしょ！　だから豚肉が混ざってなかったとは誰も証明できないんだって！」
勝春はゆっくりとティーカップを口に運びながらチラリと杉本の顔を見た。
「ところがネ……それができちゃうんですヨ」
「え？　何言ってんの！　だって……」
「通常ならネ。あなたの言う通り給食で全部食べられちゃうからサンプルはもう存在しないはずなんです。けどネ……」
そう言いながら勝春はニヤリと笑った。そしてカップをお皿に置いてから顔を上げる。
「おとといの金曜日。一校だけあったんですヨ。学級閉鎖がネ」
その瞬間、杉本の表情が強張った。
勝春はゆっくりと説明を続ける。
「ですからネ。１クラス分のハンバーグがまるまる残ってたんですヨ。今、これを検査に出しています。月曜の夜には結果が出るでしょうネ」

これは勝春のハッタリだった。本当は学級閉鎖という事実は無い。検査に出しているというのも嘘だ。が、杉本の自信を喪失させるには充分な手ごたえがあった。
「マジで？　……そんなことって」
明らかに動揺する杉本に勝春は追い討ちをかける。
「遅かれ早かれ、あなたのＴＶでの証言は嘘だったことがバレるでしょうネ」
「ちょ、ちょっと待ってよ！　何で俺なの？　ＴＶに出たのは俺じゃないかもしれないでしょうが！」
「それはないでしょ」
「な、なんの証拠があって？」
「ＴＶ局ですヨ。あなたを取材した人。あれ、ボクの「いとこ」なんですヨ」
「は？」
「モザイクかける前の映像見せてもらったんですヨ。その証拠にすぐあなたを見つけることができたでしょ」
「な、ＴＶ局の奴に……聞いたの？」
「ハイ」
「クソッ！　話が違……」と、言いかけて杉本がはっとする。
勝春はそれを見逃さない。
「話が違う、ですか。ついに白状しましたネ」
「い、い、いや。そ、それは」と、杉本がどもる。
「ま、こちらはすべて調査済みなんですがネ。で、なんであんなデマを流したのかその理由も突き止めましたヨ」
「ま、マジで？」
「お金の為でしょ。つまり、ある人物に依頼された」
「そ、そんな事までバレてんの？」
「とぼけるのは結構ですが……」と、前置きして勝春がトントンとテーブルを指でノックした。そして急に険しい表情で宣告する。
「８００万円。最悪の場合、払って頂くことになりますネ」

「は？　お、俺が？」
「言っておきますケド、一日につき８００万円ですネ」
「な、な、何ィ？！」
「工場の休業で発生する損害だけじゃありませんからネ。あなたのデマで会社が失った利益、専門用語では遺失利益といいまして」
「イシツリエキ？」
「ハイ。この遺失利益も含めますとざっとみて一日あたり８００万円」
「無理っ！　そんなの払えるワケない……」
　とんでもない金額を掲示されたのもあるが勝春が急に厳しい顔をしたことが杉本の心理に影響を及ぼした。今までにこやかだった相手が急に態度を変えると小心な人間はたいてい参ってしまう。
「ただネ。今ならまだ被害が最小限に食い止められるかもしれませんヨ」
　わざと地獄に叩き落しておいてちょっと優しい言葉をかけてやる。これも勝春のテクニックだ。案の定、落ち込んでいた杉本が救いを求めるような表情で勝春にすがってきた。
「ほ、本当に？　なんとかなるのかい？」
「あなたがデマだったことを認めれば良いンですヨ」
「そ、そんな……」
　初めにわざととんでもない要求をしておいて徐々に水準を落としていく。これは交渉を有利に進めるためのセオリーだ。
「損害賠償は何百万単位になると思いますヨ。いくら貰ったかは知りませんけどワリに合わないんじゃないですか？　それに比べれば非を認めるぐらいどうってことないでしョ」
　勝春の誘導尋問に杉本はすっかり参ってしまった。
　ここに到るまでに勝春は巧妙な心理戦を仕掛けてきた。勝春は杉本が小心者と見るやあの手この手で杉本の心理を揺さぶって完全に落とした。これでもう杉本は黙ってこちらの言うことを聞くようになるだろう。

「大志。さっそく手配を」
「わかった。本部に連絡してマスコミに働きかける」
ここまでは作戦通り。あとはＴＶを使って杉本に懺悔させなくてはならない。
いよいよ忙しくなりそうだ。

＊　＊　＊

予定通り午後1時に菊乃はカズ達と合流した。
「藤村さんお昼は？」と、カズが尋ねる。
「まだ。カズ君と美穂子は？」
「私達もまだだよ」と、美穂子が答える。
ちょうど待ち合わせ場所がファミレスということで一向は約束の場所へ移動する。
向かった先はＫ駅から歩いて１０分、大きな通りに面した店だ。
日曜のお昼時とあって駐車場はほぼ満車状態。店内もお客さんでいっぱいだ。

カズを先頭に菊乃と美穂子が店内に入るとすぐに店員が寄ってきた。
カズは「待ち合わせなんです」と、告げてから店内を見回した。
「ね。カズ君。アレじゃない？」と、先に美穂子が目的の人物を見つけたようだ。
美穂子が指差す方向を確認してカズが頷く。
「だね。間違いない」
カズが待ち合わせをしている相手。菊乃は名前しか聞いていない。
確か、アシムとハマドと言っていたが……。
（やっぱ外人だ！）
菊乃にも目的の人物が目に入った。
「ハーイ」と、いった感じでにこやかに手を上げる2人組の外国人。

それも見るからに東南アジア系だ。
美穂子がカズに耳打ちする。
「なんか同んなじような顔してるね」
「それは失礼だよ。外国人から見たら僕ら日本人もみんな同じに見えるんじゃないかな」
カズは美穂子をたしなめながらゆっくり2人組の席に近づく。そして軽く手を上げてあいさつをする。
「お待たせして申し訳ない。アシムさんとハマドさんですね？」
「ハイ。ソウデス」と、小柄な方の外国人が答える。「僕ガ「アシム」デ、コッチガ「ハマド」デス」
すると大柄な方が低い声で勢い良く「ハマドデス！」と、おじぎをする。
「電話させて頂いた岩田です。よろしく」
続いて美穂子と菊乃も順番にあいさつをする。それを見てアシムが微笑む。
「イワータサン。ドッチガ彼女デスカ？」
それを聞いて美穂子が即、反応する。
「やだ！　アシムったら」
「いや。彼女とかではないんですが」と、カズは冷静に否定してしまう。
一瞬、嬉しそうにしていた美穂子がその一言で途端に不機嫌になる。やっぱりカズはそのあたりが分っていない。美穂子がムスッとしてしまったので、ちょっと雰囲気が悪くなる。止む無く菊乃がフォローする。
「と、とにかく何か注文しようよ。アタシお腹空いちゃった！」
とりあえず食べる物を注文してからカズは早速、本題に入った。
「電話で話した通り、あなたたちに是非協力して欲しいんです」
するとアシムは快くそれを承諾する。
「分ッテルヨ。工場、潰レルト困ルカラ。僕タチ、手伝ウ」
「ありがとうございます。では念のために確認させてください。あ

なたたちはイスラム教の信者ですね？」
「ソウデス」と、アシムが神妙に頷く。
「ン！」と、ハマドが小さく頷く。
「やっぱりね。あの絨毯。休憩室にあった絨毯は礼拝の為の物ですよね。ちゃんと方向もメッカの方を向いていたし」
「イワータサン。イスラム教ノコト良ク知ッテルネ～」と、アシムが感心する。
「イスラム教？」と、菊乃が首を傾げる。「それと事件に何の関係が？」
菊乃の質問はもっともだ。なぜカズはそんなことをわざわざ確認するのだろう？
しかしカズはそれに構わず質問を続ける。
「あなた方の他にムスリム（イスラム教を信仰する人）の方は何人働いているんですか？」
「全部デ5人、働イテルヨ。ネ、ハマド」
「ン！」と、ハマドが小さく唸る。
「食堂は利用したりしますか？　結構、立派な社員食堂がありましたよね」
「食堂、美味シイヨ～。トッテモ安イシ。ネ、ハマド」
「ン！」と、今度は力強く頷くハマド。
「あの食堂には工場で作っている物と同じものが出されていると考えて間違いない？」
「イワータサン。ホント良ク知ッテルネ～」と、アシムが尊敬のまなざしをカズに向ける。
「それでは、あなた方もあそこの肉料理を食べているという訳ですね」
「大好キデス。タマニ余ッタ物ヲ貰ッテ帰ルコトモアルヨ。仲間達ミンナ大喜ビスル。ネ～、ハマド」
「ン～……」と、うっとりした表情をみせるハマド。思い出したらお腹が空いてきたのだろうか。

カズのインタビューを横で聞いていて菊乃は段々もどかしくなってきた。
「ね。カズ君。そろそろ教えてよ。何でこの人達が証人なの？」
「ごめんごめん。確認してから言おうと思ってたんだ。でも、これで確信が持てた。やっぱりミート・ポップ社はシロだね」
「そうなの？　根拠は？」と、菊乃がじれる。
「ああ。だって彼らはイスラム教の信者なんだよ。だから豚肉は絶対に食べない」
「？！」菊乃と美穂子が顔を見合わせる。そして「何で？」と、声を揃える。
「聞いたことあるだろ。宗教によっては食べてはいけない物があるんだよ。有名なところではイスラム教の豚肉、ヒンドゥー教の牛肉だよね」
それを聞いて菊乃が「分った！」と、手を打った。
「そっか！　だから豚肉なんか混じってるはずが無いってことね！」
「そういうこと。彼らが作っていることが何よりの証拠だよ」
その時、カズの携帯が鳴った。どうやら勝春からのようだ。
「勝春そっちはどう？　……そっか。やったね！　うん。え、そうなんだ！　よし。それじゃこっちも彼らを説得して連れて行くよ。何々、品川に3時ね。了解」
電話を切ってカズが改まって2人にお願いする。
「今、仲間から電話があってＴＶ局の取材を受けることになりました」
「え？　ＴＶ？　マジで？」と、美穂子が興奮する。
「何か凄くない？」と、菊乃も目を丸くする。
「ボク等の力じゃないからね。これぐらい組織に協力してもらわないと」
（組織って……やっぱりそうなんだ）
前に勝春が言っていた組織。カズも大志もその組織に所属しているという。

今更ながら菊乃は思い知らされた。
（……ミステリー・ボーイズ。やっぱ住む世界が違うんじゃ……）
「ＴＶデスカ？」と、きょとんとしているアシムに向かってカズが説明する。
「これからＴＶの取材を受けて欲しいんだけど顔出しＯＫ？」
「テ、ＴＶニ出ルノ？　僕タチガ……」
一寸、アシムが迷うような素振りをみせる。が、ハマドが突然「イイトモー！」と、ガッツポーズをする。あまりに大きな声が店内に響き渡る。
ちょうどそこへ料理が到着した。
カズが「さ、忙しくなるよ。早く食べよう」と、急かす。
とにかくアシム達の気が変わらないことを菊乃も祈った。

＊　＊　＊

３時十分前に品川駅に到着。そこで勝春たちと合流する。
「ア～！　スギモットサン」と、アシムが杉本を見るなり大げさに指差す。
そして「アナタ悪イ人ネ～。社長サン困ッテタヨ～。嘘ハ駄目ダヨ～」と、杉本を非難した。
「勝春。ＴＶ局の人は？」と、カズが尋ねる。
「テレビＮの報道班の人と待ち合わせしてるンだヨ。もうすぐ来ると思うけど」
「その後、Ａテレビ、Ｔテレビとハシゴする」と、大志が付け加えた。
「へえ。珍しくマスターも頑張ったね」と、カズが感心する。
「散々、文句を言っていたがな」と、大志も苦笑いを浮かべる。
勝春と大志に挟まれてうつむき加減の杉本に対してアシムとハマド、菊乃と美穂子は半分、遠足のノリだ。ＴＶに出られるというので浮き浮きしているのだ。

そんなメンツを前にカズが申し訳なさそうに言った。
「ごめん。ボクはちょっと抜けるね」
「え～何で？」と、美穂子が口を尖らせる。
「さっきメールで連絡があったんだ。頼んでた資料が見つかったてね」
それを聞いて大志が「ほぉ」と、いった風に声をあげる。
「資料というのは例のやつか？」
「うん。これから行って確認してくる。もしそれが本物なら……明日一気に決着だね」
「マジかヨ！」と、勝春の表情が明るくなる。「そっか。じゃこっちは任せといてヨ」
「頼んだよ勝春。それから大志もね。それじゃボクは……」
「私も行く！」と、美穂子がカズの腕をつかむ。
「別にいいけど……森野さんはこっちの方が良いと思うよ。ボクのはちょっと、ね」
相変わらずカズはどこに何の為に向かうのかその目的をはっきりと教えてくれない。しかし菊乃もさすがに慣れてきた。カズが確信を持って行動しているということは事件の解決に必ず直結するはずなのだ。菊乃にもそれが分ってきた。
「ね。美穂子。カズ君に任せとこうよ。多分、ＴＶの取材の方が楽しいよ。めったにあることじゃないし」
菊乃に説得されて美穂子はカズに同行するのを泣く泣く諦めた。が、楽しいとは言ってみたもののその後のスケジュールは相当にハードなものになってしまった。

結局、すべての取材が終わったのが夜の９時。
ゴハンもろくに食べられず、菊乃たちは疲れ果てて家路についた。
（全然、楽しくなかったな。でも、明日は……）
そんな菊乃の気持ちを代弁するように勝春が忙しかった一日をしめる。

「思ったほど楽じゃなかったケド皆お疲れさん！　サァ、いよいよ明日だヨ！　今日は早く寝て明日に備えようヨ」
そして駅で解散。皆それぞれの路線で帰っていく。
いよいよ明日は運命の職員会議だ。これですべてに決着がつくとカズは言った。それは菊乃も信じている。しかし、その一方で、得体の知れない不安が菊乃の胸に張り付いていた。
（事件は解決して欲しい……でも……）
何ともいえない複雑な気持ち。それは菊乃が必死で押し殺してきた結末だった。
（居なくなるなんてこと……無いよね。たぶん……）
明日になるのが怖い。菊乃にとっては、それが正直な今の心境だった……。

4．決戦は月曜日

臨時の職員会議は午前8時からだった。
それに合わせて全員が校門の前に終結する。
「さて。皆、準備はいい？」と、言ってからカズが大きく深呼吸をした。
「勿論サ」「やるだけのことはやった」と、勝春と大志も力強く答える。
菊乃と美穂子も緊張気味に頷く。
今日は臨時休校で学校は休みだ。なので校門は閉まっている。それを大志がこじ開けるようにして5人は校内に足を踏み入れた。
静かな学校。晴れ渡る空。風が微かに5人の背中を押す。
「さあ。行くよ！」
カズの合図で5人は最後の決戦に向かった。
「なんか刑事ドラマみたいだね」と、美穂子が言う。

「それをいうなら警察のガサ入れだろう」と、大志が突っ込む。
いずれにせよ特別な目的を成しえる為に5人並んで校庭を横切っているとなんだか緊張感が溢れてくる。
校庭を横切り、真っ直ぐ校舎へ向かう。そして下駄箱がずらりと並ぶ入り口に差し掛かった時やはり難敵が待ち構えていた。
「……イワン・オトコフスキー」と、大志が呟いた。
まるで5人の行動を予想していたかのようにイワンは現れた。
しかしある意味イワンの妨害は想定の範囲内だ。
足を止めイワンと対峙する5人。
イワンがどんな行動に出るのか一応シミュレーションはしていた。もしも力ずくで阻止しようとするなら4人がかりでイワンを足止めしてカズだけ行かせようという作戦だった。
大志が周りを警戒しながら敵がイワンだけであることを確認する。
「何だ。早起きじゃないか。意外に勉強好きなんだなロシア人は」
大志の言葉を聞き流したイワンがチラリと5人を見る。
「勉強ヨリ、モット好キナ物ガ、アルンデネ」
イワンはそう言ってねっとりとした視線をカズに送る。それを受けてカズが身震いする。
「サテ……」と、腕組みをして壁にもたれかかったイワンがニヤリと笑う。
「通リタケレバ行ッテ良イヨ」
意外な反応にカズが戸惑う。本当に何もしてこないのだろうか？
が、イワンの視線はまっすぐ大志に注がれている。
カズはイワンと大志の顔を見比べて「任せていいのかい？」と尋ねた。
「ああ。ここはどう見ても俺の出番だろう」と、大志が一歩、前に出る。
「ガッカリ、サセナイデクレヨ」と、イワンが大志を挑発する。
「望むところだ」と、大志は胸を張る。
そんな2人を尻目にキョロキョロしている美穂子を見て菊乃が尋

ねる。
「美穂子、何探しんての？」
「ん。ホウキとかモップとか……何か武器になる物ないかなって」
「は？　何言ってんの？　アタシらが相手になるわけないじゃん！」
珍しく勝春が弱気なところをみせる。
「菊ちゃんの言う通りだヨ。大志も相当なもんだけど今回ばかりは相手が悪いかもヨ……」
「じゃ、ボクと森野さんは行くから！」
カズが美穂子の手を引いてイワンの横を駆け抜ける。
が、イワンはそれをスルーした。すでにイワンは戦闘モードに入っているらしい。
「表へ出ロヨ」
「いいだろう。どうせなら広々とした所でやりたいものだ」
まずは大志がイワンに背を向けてUターンする形で校庭に向かう。
勝春と菊乃もそれに続く。
その後をイワンが無言でついてくる。
大またで歩く大志。熊のようにのっしのっしと追ってくるイワン。
戦いの舞台は校庭、になるらしい。

＊　＊　＊

カズと美穂子が乗り込んだ時、会議室では「コ」の字形に並べられた長机に教員が勢ぞろいしていた。その一番奥まった席の真ん中にカズのターゲットである有賀の姿がある。
ひとつ咳払いをしてからカズはゆっくりと皆を見回した。
「なんだチミは？」と、チンチクリンな数学教師が立ち上がった。
「代理ですよ。校長の」
「はぁ？　チミは何を言っておるのかね？」
「ですから委任されたんですよ。ほら、ちゃんと委任状もありますよ」

数学教師はカズの差し出した委任状をしげしげと眺めた。
「……確かにこれは校長の印鑑ですな」
そして他の教員に回覧する。
有賀はじっとカズの方を見ている。そして回ってきた委任状を一瞥して「フン」と、笑った。
「いいだろう。適当に座りたまえ」
「そりゃどうも」そう言ってカズは席を詰めてもらう。
有賀は余裕ありげな態度でカズの視線をやり過ごす。
「さて。ご承知のように大変なことになってしまった。我が校始まって以来の一大事だ。こともあろうに校長がマスコミに叩かれようとは！」
どうやらこの会議は有賀が仕切っているらしい。
カズの調査では有賀の両隣と窓側の机に座る5人が有賀派だということが判明している。しばらくは有賀の演説というより校長への批判が続くと思われる。その間に有賀派の教員がそれに賛同して「校長の解任やむなし！」の流れを作っていく。それが有賀のシナリオなのだろう。
そして緊急職員会議がはじまった。カズの予想通りさっそく有賀が校長解任の提案をする。
「ちょっとよろしいですか？」と、カズが挙手する。
「何かね？　代理人君」と、有賀がアゴをしゃくってみせた。
カズがスックと立ち上がって皆に問う。
「それって校長の会社がクロだという前提ですよね？　もしこれが濡れ衣だったとしたらどうです？」
カズの問いかけに何人かの教員がざわつく。
しかし有賀はまだまだ余裕の表情だ。
「ほう。すると何かね。君は校長の会社がシロだと言いたいのかね？　何を根拠にそう主張するのかは知らんが」
カズも負けてはいない。実に落ち着いた様子で切り返す。
「完全にシロですよ。なんならそこのＴＶ。ちょっとつけてもらえ

ませんか？」
カズがそう言うのでＴＶに近い場所に座っていた教員がスイッチ入れる。
「テレビＮを。ちょうど朝の情報番組をやってるはずです」
というカズの指示に従ってチャンネルが合わせられる。
全員の視線がＴＶ画面に注がれる。
そこで放映されている内容を観て教員たちの間にどよめきが起こった。
この展開は予想できなかったのかさすがの有賀も薄ら笑いを止めた。
「あれはヤラセでした……」と、ＴＶ画面の中でモザイクの人物が告白した。
言うまでも無く勝春に説得された杉本泰三のインタビューである。
続いて外国人風の２人組のインタビュー。こちらはモザイクなしだ。
「イスラム教の従業員。ボク達は豚肉は食べない！」のテロップにアシムが、
「ボク達ハ決シテ豚肉ヲ食ベマセ～ン。ダカラ有リ得ナ～イ」と断言する。
ＣＭの合間にカズが解説する。
「最初にスクープしたのはテレビＦでした。そこでＦテレビの報道が「やらせ」じゃないかということでテレビＮが乗ってきたんですよ。テレビＦとテレビＮは仲が悪いですからね」
ＣＭが終わりスタジオのキャスターが「まもなくミート・ポップ社の記者会見が始まる模様です。それでは現場の大野さん」と、言ってから画面が切り替わった。
そこには見覚えのある顔がアップで映っている。
「こ、校長シェンシェー！」と、チンチクリンな数学教師が素っ頓狂な声をあげた。
教員達が固唾を呑んで画面を見守る中、カズは有賀の様子を観察

していた。明らかに有賀は苛立っている。しきりに身体を揺すってはアゴに手を持っていく。ここまではカズのペースだ……。

＊　＊　＊

何も校庭のど真ん中でやることはないのにとも思えるのだが、当の2人はすっかり決闘モードだ。

校庭のど真ん中、無言で対峙する2人。

どちらかが仕掛けるわけでもない。まるでお互いの力量を測っているかのように、ひたすら相手を観察している。

菊乃が顔をしかめる。

「なんか笑ってない？　2人とも」

おそらく2人とも自分の強さに自信があるのだろう。そして相手の強さもわかっている。もしかしたら闘うことに喜びを感じているのかもしれない。

先にイワンが沈黙を破った。

「来イヨ！」

それを合図に大志が一気に動き出す。

まずは大志の左ハイキック！と、見せかけてのローキックがイワンのふくらはぎに命中した。きれいなフェイントだ。

だが、イワンは一歩も動かない。というよりまったく避ける気が無いらしい。

「オゥッ！」と、漏らした声も痛がっているようには思えない。

続いて大志の右足がイワンの左腕・左肩・左側頭部にパン・パン・パンというようなタイミングで命中した。

またしてもイワンは「オゥッ」と、甲高い声を漏らすだけ……。

本当に効いているのか疑わしい。

大志のケリ自体、牽制のような軽めのアクションではあるが、それにしてもイワンにダメージは無さそうだ。

少しイラっときたのか大志は一歩深く踏み込んで今度は力のこも

った右足の一撃を繰り出す。
大志の右足が鋭い弧を描いてイワンの左上腕にめり込む。
「オゥッ！」
この反応は何なのだろう？　なんだか打たれることを楽しんでいるようにさえ思える。
それでも大志は攻撃を続ける。
今度は大志の左ハイキックがイワンの右頬をバシッと打った。と、同時にその足先がクイッと戻って踵がイワンの左頬を打つ。ちょうど往復ビンタをするみたいに大志は足でそれをやってのけた。
が、イワンはびくともしない。それどころか「はぁはぁ」言いながら何やら興奮してきた様子……。
「イイヨ。イイヨ……モット、モットダ。ブッテ！　ブッテ！」
明らかにおかしい。菊乃もそれを聞いてぞっとした。
（ひょっとして変態？）
勝春も同じ感想を持ったのか隣で顔を引きつらせる。
さすがの大志もイワンの異常さに気がついたのだろう。大志の表情が険しくなる。自慢のケリを何発もお見舞いしているのにそれが全然効いていないのだから……。
「ふざけやがって！」
大志の怒りが爆発した。
右・右・左・右と大きな振りで次々にケリを放つ。左ハイ・左ロー・回し蹴り、そのどれもが的確にイワンを捕らえる。
それなのに菊乃は急に不安になってきた。これまでの大志は余裕で相手を倒してきた。が、怒りに任せてケリを繰り出す大志の攻撃は明らかに今までとは違う。これではまるでイワンに翻弄されているみたいだ。
サンドバッグみたいに大志のケリを受けるイワン。
このままの状態がいつまで続くんだろうと思われた瞬間だった。
大志の右ハイキックに対し、イワンがフッと身を屈め、はじめて回避行動に出た、と思いきや、いきなりパンチを放った。

大志は素早く身を反らしてそれをかわす。
（空振り！）と、思われた。
が……足を元の位置に引いて体勢を立て直そうとした大志の左ひざがカクーンと落ちた。
地面に肩膝をついた大志が「嘘だろ？」といった表情を見せる。
そして「クッ……」と、手の甲でアゴを押さえる。
「アゴをかすったんダ！」と、勝春が呻いた。
大志の様子を見てイワンが突進する。
頭突き？　と、思って大志が下がった瞬間、横からイワンの拳が飛んでくる。完全な死角から飛び込んできたパンチが「ゴッ！」と大志のこめかみに当たった。
反射的に首を振ってパンチの威力を受け流す大志。が、強烈なダメージが大志の動きを止めてしまう。
菊乃は目をつぶった。とても見ていられない。本当は止めさせたい。しかし、大志はそれを許さないだろう。
大志のピンチを目の当たりにして顔を背ける菊乃を勝春が叱責する。
「大志を信じるんダ！」
結果が怖くて目を開けていられない。菊乃は恐る恐る薄目を開けて様子を伺う。そんな菊乃の目に入ってきた光景。それは信じがたい光景だった。
こめかみを押さえながら肩で息をする大志。辛うじて立っているようにしか見えない。
一方のイワンはボクシングの構えで軽快にステップを踏んでいる。まるで大志をからかっているようにイワンは「ドウシタ？モウ終ワリカ？」と、次の攻撃をわざと遅らせている。
……どう見ても形勢は不利。
勝春がいまいましそうに呟く。
「得意なのは間接技じゃなかったのかヨ……まさか打撃もあるとは」
「ハッ！」掛け声と同時にイワンがパンチを打つ。

それが大志のわき腹にめり込む。
イワンは身体をゆすりながら狙いを定める。そして掛け声とともにパンチを一発だけ繰り出す。その度に、いかにも重そうな一撃が大志の身体に衝撃を与えた。
今の大志にはそれが避けられない。
大志が一方的に痛めつけられる姿を見せ付けられて菊乃はパニック寸前だ。
憎らしいまでにイワンは余裕綽々だ。
「意外ニ頑丈ダネ。君モ。デモ、ボクニハ敵ワナイ。ボクハ不死身ダカラネ」
勝春の脳裏にマスターの言葉が浮かんだ。
（ロシア軍のエリート……まさにバケモノか……）
しかし当の大志はボロボロになりながらも諦めていない。イワンが一発パンチを打つとカウンターで小さなケリを返す。が、そのケリには鋭さが無い。辛うじてやり返している。そんな風に見えた。

＊　＊　＊

番組内容が芸能ニュースに移ってしまったのを機に全員が席に戻った。
ざわざわとする教員達の様子を有賀がいまいましそうに見ている。校長を解任して自分が実権を握るというシナリオが完全に狂ってしまったのだ。
カズは頃合を見計らっていよいよ本題に入った。
「皆さん。今のＴＶを観て分かる通りこれは陰謀です」
「陰謀だって？」「どういうことだ？」と、あちこちで疑問の声。
それを静止しながらカズが続ける。
「はい。これは陰謀なんですよ。すべてはある人物が仕組んだものなんです。そう。有賀先生。あなたが黒幕だったんですね？」

皆の視線が有賀に集中する。
皆の視線を浴びて有賀がしどろもどろになる。
「い、いい加減なことを……何の為に私がそんなことを」
「いいでしょう。では、すべて説明して差し上げますよ」
そう言ってカズはなぜ有賀がこの学校を貶めるような真似をしたのかその真の狙いを明らかにすることにした。
「鍵は江戸時代の地図にありました」
カズの意外な言葉に「？」という空気が流れた。
それには構わずカズが続ける。
「江戸時代、この学校の敷地にはお寺があったんです。墓地も一緒にね」
朝からジャージの体育教師が驚いて立ち上がる。
「お墓だって？　そんなバカな！」
「いや。事実です。ここに古い地図、勿論写しですがここにちゃんと載っています」
カズの持ってきた地図。それは目黒が集めていた郷土史の資料から拝借してきたものだった。
「昔は土葬が一般的でした。だからすぐに墓地のスペースがなくなってしまったんですよ。そのせいで江戸時代のお寺はお墓を残して頻繁に引越しをしてたんです。有賀先生。あなたの目的はただ一つ。この学校の敷地を売り払うことですね？」
カズの問いに対して有賀は不敵に笑う。
「フン。何を根拠に。そもそも誰がこんな土地を買うというんだ？」
「確かにね。ここは駅から遠いですしマンションを建てるならもっといい場所があるでしょうね。ただ、ここじゃなきゃダメなんでしょう？」
カズの追求に有賀の顔色が変化する。それを確認しながらカズがゆっくりと間を取る。そしてズバリと指摘する。
「あなたの目的は徳川埋蔵金ですね？」
カズの言葉に教員達が唖然とする。

「徳川埋蔵金だって？」
「たまにテレビでやっているアレか？」
「この学校にそんなものが？」
「有り得ん！」
教員達の反応を眺めながらカズが続ける。
「皆さんご承知の通り世の中には徳川家康が隠した財宝が今でもどこかに眠っていると信じている人達がいます。彼らは財宝のありかを突き止めようと日々頑張っています」
「そ、それは知っているが、こんな都会にそんなものが……」と、社会科の教師が首をひねった。
カズはもったいぶるように含み笑いを浮かべて続ける。
「正確に言えば徳川埋蔵金ではないんです。有賀先生が見つけたのは……」

＊　＊　＊

菊乃が勝春の腕を握り締めて訴えた。
「ね。カッチー。お願い。止めさせて！」
しかし勝春は戦況を見つめながらゆっくりと首を振った。
「まだダメだヨ」
「なんでよ？　もう見てらんないよ」
「今止めたら後で大志に怒られるヨ」
「もう無理だって！　だってボコボコじゃん……」
「よく見てみなヨ。大志の目。何かを狙ってるんだヨ。多分」
「多分？　それじゃ困るの！」
相変わらずイワンの一方的な攻撃が続いている。
イワンの動きは早くはない。まるで何時間も殴りあった後みたいに一発までに要する時間が長い。狙って、狙ってようやくパンチが一発。それを大志がかわしながらカウンターで蹴りを返す。が、大

志の蹴りにも切れはない。お互いの攻撃が浅くてなんだか惰性で戦っているようにも見える。
さすがにイワンも疲れてきたのか、
「ソロソロ終ワリニスルカ？」と、いったん拳を引っ込める。
そして首や手首をポキポキ鳴らして「トドメハヤッパリ……」と、舌なめずりするような表情を見せた。
勝春がしまったというように呻く。
「まずい！　間接技かもヨ！」
「え、やだ！」
菊乃は大志が足を痛めてしまったこの前の戦いを思い出してしまった。
ところが緊張する菊乃たちと対照的に大志は意外に落ち着いている。その目はまだしっかりとイワンを見据えている。そして背筋を伸ばしながら、
「３８ぶんの７」と、意味不明な一言……。
イワンがあっけに取られる。
「ハ？　オ前、何言ッテンノ？」
菊乃にも意味は分からない。
「さんじゅうはち？」
「さあネ。オレにも分ンネ」
しばらく妙な間があってイワンが（まあいいや）といった風に首を振った。そしていよいよ本気モードに入る。
「ソレジャ、行カセテ貰ウヨ！」
前かがみになったイワンの重心がすうっと下がる。そしてゆっくり息を吸った次の瞬間、矢が放たれたようにダッシュ！　タックルで大志を倒しにかかる。
「危な……」と、菊乃が目をつぶりかけた時、大志が動いた。
座り込むようにぐっと身体を沈めて真っ直ぐ突っ込んでくるイワンに向かって跳ねた！
「ドスッ！」と、鈍い音がした。

恐る恐る菊乃が目をあける。
「え？」
菊乃の目に飛び込んできたのは「く」の字型に身体を折り曲げるイワン……とイワンの頭を両手で抱え込む大志の姿だった。
よく見ると大志の膝がイワンのお腹にめり込んでいる。
大志がぱっと手を離すとイワンはお腹を押さえながら後ずさりする。そして「ソ、ソノ程度ノ膝蹴リナンカ……」と、言いかけて急に顔をゆがめる。
効いている？　イワンの様子がおかしい。
「……ウ、嘘ダロ」と、イワンが両膝をついてガクンと崩れ落ちる。そして苦しそうに息を吐き出すと「ウ・ウグ・ウグワァ！」と、何ともいえない苦悶の声をもらした。
何が起こったのか分らずに菊乃は勝春の腕を引っ張った。
勝春が興奮気味に呟く。
「膝蹴りだヨ！　しかもカウンターで決まったんダ！」
イワンは両手でお腹を押さえながら苦悶の表情を浮かべる。
と、その瞬間、大志がダッシュ！
そしてジャンプ一閃、膝蹴りをイワンの顔面に叩き込む。それも右・左・右と空中で三連発！　まるで走り幅跳びの選手が空中で飛距離を伸ばそうとするみたいに。
大志の飛び膝蹴りを三連発で食らったイワンは後方に吹っ飛んで倒れた。そして、それっきり動かなくなった。
「決まったゾ！」と、勝春がガッツポーズ。
「やった！」と、菊乃が飛び上がる。
大志のところに勝春が駆け寄ってねぎらう。
「やったネ大志！　珍しく苦戦したじゃない」
「……まあな。俺としたことが……クッ」
「痛むの？」と、菊乃が心配そうに大志の顔を覗き込む。
「いや。何、ちょっとな」
「ところでサ。さっきの３８ぶんの７って何のことなんだい？」

「ああ、あれか。あの時点で俺が放った蹴りが３８発。そのうち７発を奴のレバーに打ち込んでやったって意味さ」
「レバー？　肝臓か。なるほどネ。メチャクチャに蹴ってるように見えて実は……」
「そうだ。はじめからそれを狙ってた。いくら奴が頑丈でも同じ部分を何度も打たれればダメージは蓄積するからな」
　まるで水滴が岩に穴を開けるように大志の正確な蹴りはイワンの肝臓に少しずつダメージを与えていた。大志の膝蹴りが効いたのはそれがあったからなのだ。
「サ。カズの所に行こうか！」と、勝春が微笑んで歩き出そうとした。
が、「おぅ」と言いかけて大志がガクンとバランスを崩して転んでしまった。そして地面にゴロンと仰向けに倒れ込んむ。
「ゴッキー！」
　菊乃がしゃがんで大志の頭を抱き起こす。
「大丈夫かヨ？　大志」
「……勝春。カズの所に行ってやれ。俺はしばらく動けそうに無い」
「分ったヨ。じゃ、菊ちゃん。大志を頼むヨ」
　そう言い残して勝春は校舎に向かう。
　校庭に残されたのは菊乃と大志。そして、完全にノックアウトされたイワンの３人だけだった。大の字に寝転がるイワンは死体みたいにピクリとも動かない。チラリとそれを見て菊乃は大志の頭を自分の膝に乗せてやる。
「よく頑張ったね。見てるこっちが痛かったよ」
　大志は薄目を開けながらそれに答える。
「へ……最後ぐらいは格好いいとこ見せないとな」
「……何言ってんの……ボロボロじゃん」
「……うるせぇ」
　どちらからともなく笑みがこぼれる。
　そこで大志が何かを思い出したように呟く。

「ところで、お前、何か俺に言うべきことがあるんじゃねぇか？」
「？」
「前に、ほれ。ハンカチ返した時に……」
「ああ……あれね」
そうだった。今日はまさに大志の誕生日。そして菊乃の誕生日でもある。
今なら渡せるかもしれない。菊乃はポケットに忍ばせた包みをそっと取り出した。そしてなるべく冷静に、なるべくさりげなく、それを大志の手に握らせた。
「何だこれは？」
「何って……プレゼント。誕生日の」
「ああ、そっか。そうだっけな」
「言っとくけどこの前のお礼も兼ねてるんだからね」
「礼って何だ？」
「みんなでご馳走になったでしょ。あれのお礼」
「そういう事か……」
「それ。ちゃんと着けててよね」
「つける？」
「とにかく開けてみてよ」
菊乃に促されて大志が億劫そうに包みを開ける。まだ手が痺れているせいなのか元々そういう性格なのかは分からないが大志はビリビリと雑な開け方をする。
（せっかく何回も包み直したのになぁ）
男はそういうところに無神経だ。
「何だこりゃ？」
中から出てきたのは手作りストラップ。なかなかイメージ通りの素材が無くて苦労したが菊乃の力作だ。
ところが大志はそれを指で摘んで妙な顔をする。
「これは……スカンクか？」
「ハリネズミだよ！」

結構、自分でも可愛く出来たと思っていたので菊乃は少しムッとした。
「世界でひとつしかないんだからね」
「しかし……何でハリネズミなんだ？」
「あんたの髪型。ツンツンしてるから。別にハリセンボンでもいいんだけどね」
「いや。それならハリネズミの方がまだマシだ」
「マシって……超失礼。いい？　財布か携帯に必ず着けてよね。捨てたらぶっ飛ばすわよ」
「強制かよ……チッ。仕方ねえな」
本当に一番言いたかった言葉。菊乃はそれを思い切って言ってみる。
「誕生日おめでと……」
大志の顔がかすかに緩んだ。そして一言。
「……お前もな」
「！　……知ってたの？」
「ああ。でもプレゼントは無いぞ」
「……いいよ。そんなの」
胸がいっぱいになった。
どうしようもない愛おしさがあふれ出してきて菊乃は思わず大志の頭を抱きしめた。
菊乃の胸に顔を埋めて大志が呻く。
「お、おいっ……」
「ご、ごめん。女の子の匂い……ダメなんだっけ？」
菊乃があわてて力を緩める。
が、大志はフッと笑って言った。
「いや……女って……柔らけぇ……」

＊　＊　＊

次第にカズのペースに乗せられていく教員達を苦々しく眺めていた有賀が貧乏揺すりをはじめた。明らかに動揺している。つまりそれはカズの言葉が真実に近づいていることを意味している。それを見てカズはますます自信を深めた。自然と説明に熱が入る。
「有賀先生が見つけたのはある人物の記録です。名前は「井深永次郎」江戸時代中期の人物です」
もはやカズの説明に口出しする人間は居なかった。カズの冷静な口ぶりにはそれだけ説得力がある。
「この記録による、徳川家康が埋めた財宝は江戸時代に既に掘り出されているんです。幕府の人間によって」
カズの解説に面々がため息をついた。そのうちの一人が感心したように言う。
「へぇそうなんだ。それじゃ幾ら探しても財宝が見つからないわけだ」
「そうですね。で、それが何に使われたかというと純粋に投資されたんですよ。貿易にね」
話を聞いていた何人かが、なるほどという顔をした。それはあり得る話だ。当時、幕府は海外渡航を厳しく制限しており自らは外国との交易を独占できる立場にあった。そこで家康の遺した財産を元手に商売をしたというのならさぞかし儲かったことだろう。
「実は井深永次郎という人物はその儲けを管理していた人間なんです。その人のお墓があった所がこの学校の敷地なんですよ」
「ま、まさか！」と、驚きの声があがった。
「嘘だろ？」
「偶然過ぎやしないか？」
さすがにこの話はにわかには信じがたいのか教員達が騒ぎ出す。
そこでカズが丸めてあったＡ３版の紙を２枚広げる。
「ここに２枚の地図があります。こっちは現在の地図。で、こっちは約３００年前の地図。勿論、コピーですが」

教員達が集まってきて地図を覗き込む。
「あらかじめ拡大コピーで縮尺を揃えています。で、この2枚を重ねると……ほら。ちょうど学校の位置にお寺の半分が重なるでしょう」
カズの言うとおり2枚の地図を重ねると古い地図のお寺と加美村学園の敷地が半分重なっている。
「本当だ！」
「凄い」
教員達がカズの周りに集まってきて感心する中、有賀だけは自分の席を立とうとしない。ただ、ものすごい形相でカズを睨みつけている。そんな有賀の厳しい視線を受け流すかのようにカズは余裕の表情でカバンから一冊のビニール袋を取り出した。
「有賀先生。先生のネタ元はこれじゃないですか？」
そう言ってカズが取り出したのはビニールに入ったボロボロの本だった。
それを見て「ま、まさか！」と、有賀が腰を浮かせる。そして、信じられないといった顔つきで有賀が呻いた。
「な、なぜ貴様がそれを持っている？」
「あ、言っておきますけど盗んだんじゃないですよ。ちゃんと正規のルートで借りてきましたから」
「し、しかし……その本が2冊もあるはずが……」
「それがあるんですよ。1冊はあなたが持っている。ていうか今は借金のカタにしているんでしたよね」
「貴様、なぜそれを……」
「調べはついているんですよ。あなたがこの学校の土地を売ろうとしている相手。相手は不動産会社の社長さんですよね。あなたはその社長から活動資金として2，000万円以上のお金を受け取っていますね？」
「ぐ……そ、そんなことまで」
「その社長さんはこの本を見てあなたの話を信用した。井深永次郎

の墓には莫大な財宝が眠っているという話をね」
　カズと有賀のやりとりを見守る教員達にも緊張がはしる。皆、有賀の態度を見てこの話がまんざら絵空ごとではないことを感じ取っているのだ。
　カズはじっと有賀の目を見つめて言った。
「郷土史研究会の目黒君に校庭を発掘させていたのもこれの為ですよね？　彼が発見した板切れ。あれは大志が粉々にしちゃったけど、もしかしてあれこそ井深家のものだったんじゃないですか？」
　そこまで言われて恐らく観念したのだろう。有賀は自嘲気味に薄ら笑いを浮かべて「参ったね。そこまで知られていたとはな」と、吐き捨てた。
「有賀先生。あなたは数ヶ月前にこの本を入手して確信を持ったんでしょう。で、この学校を貶めると同時に実権を握って土地を売ることを計画した。それでうまく井深永次郎の財宝が出てきたら何割か分け前を貰う約束をしてたんじゃないですか？」
「今更とぼけても無駄のようだな。いやはや。その通りだよ」
　有賀はそう言って力なく首を振った。もはや言い逃れはできないと悟ったのだろう。
　それに追い討ちをかけるようにカズが気の毒そうな顔をする。
「そうですか。素直に白状して頂いたのは結構ですが……ひとつ残念なお知らせがあります」
「今更何だね？こ　れ以上残念なことがあるのか？」
「それが……変だと思いませんか？　この本。井深の財宝の秘密を書いた二百年前の本。それが2冊も残っているのは」
　それを聞いて有賀が顔をあげる。
「な、なぜなんだ？」
「実はこれ。続きがあるんですよ」
「な、なんだと？　聞いてないぞ。そんな事は！」
「有賀先生。がっかりしないでくださいね。実はこれ。どう考えてもフィクションなんですよ。だから2冊も残っているんです。いや、

ひょっとしたら他にも残っているかもしれない」
「そんなバカな！　あ、有り得ん！」
動揺する有賀の様子を眺めながらカズが小さくため息をついた。
そして扉の方に向かって声を掛けた。
「入ってきていいよ」と、カズが唐突にそんなことを言うので皆が妙な顔をしていると、ガラガラっと扉を開けて一人の生徒が顔をのぞかせた。
大事そうに何かを胸に抱えて、しょんぼりとした佇まいををみせる小太りの少年。そう。それは目黒だった。
カズは目黒を室内に招き入れると、
「目黒君。ほら。それを有賀先生に見せてあげなよ」と、促した。
おどおどした様子で会議室に入ってきた目黒はゆっくりと有賀の前まで進んでそっと抱えていた本を差し出した。
有賀はひったくるようにしてそれを手にすると表紙や背表紙を調べ中をパラパラとめくり始めた。そしてみるみるうちに顔を紅潮させた。
カズが穏やかな口調で声を掛ける。
「そういうことなんです。特に後半、井深の財宝をめぐって伊賀と甲賀の忍者が出てきてマンガみたいな戦いを繰り広げています。これはどう見ても作り話ですよね」
「そ、そんな……信じられん」
「これを書いた作者は江戸時代の売れない作家だったんでしょうね。先生が入手したのはこの小説の下書きだったんですよ。それも前半の部分」
「何？　では、そっちが持っている方が……」
「はい。完成版です。彼のコレクションの中にありました。もっとも何部刷ってどれだけ売れたかは不明ですが」
「こ、これが小説だったって？　……それじゃバカみたいじゃないか！　クソッ！」
そう言った有賀は泣いているようにも見えた。見るからにガック

リとした様子で相当にショックだったに違いない。
「先生……」と、目黒が恐る恐る口を開いた。
「ボクは先生を信じてました。先生は本当に郷土史を愛していると思ってました。なのにどうして……」
「信じてただと？　笑わせるな。金のためなんだよ」
「そんなぁ。ボク……ボクは」
「おい目黒。お前、そんなのやってて面白いか？　郷土史なんてぇ物はだな。そんなものは年を取ってから暇潰しにやるもんだ」
有賀の言葉を聞いた目黒の目に涙が溜まってくる。そして、ぶるぶると肩を震わせて鼻の穴を大きくした。
「ボ、ボクは本当に好きだからやってるんです！　な、舐めないで頂きたいっ！」

こうして有賀の野望は潰えた。
そもそも有賀が狙っていた財宝などは存在しなかったのだ。にも拘らずお宝が校庭に埋まっていると信じた有賀がこの学校を乗っ取ろうとしたことが一連の事件を巻き起こしたのである。
これは後で判明したことであるが、有賀は加美村学園の評判を落とすためにウラ組織に数百万円を支払っていた。結果的にその工作はミステリー・ボーイズの手によってことごとく阻まれたのであるが校長はこれを警察に届けることはしなかった。そして事件は表ざたになることもなく静かに幕を閉じたのである。

5．BOYS　ON　THE　RUN

おだやかな火曜日。まるで何事もなかったかのように学校は普段の落ち着きを取り戻していた。
社会科の有賀が学校を去ったことは話題になったものの、その真相は一般の生徒には知らされなかった。

「ね、菊ちゃん」
休み時間に美穂子が心配そうな顔で菊乃に話しかけてきた。
「カズ君たち来ないね。やっぱ疲れちゃったのかなぁ」
美穂子はのん気にそんなことを言っている。しかし、菊乃には分っていた。今日、3人が学校に顔を出さない本当の理由……。
「昼休みに部屋に行ってみよっか？」と、いう菊乃の提案に美穂子の顔がほころぶ。
しかしもしも菊乃の予想が当たっているなら、恐らく彼らはもう……。

＊　＊　＊

昼休みに学校を抜け出して菊乃と美穂子は3人の住む部屋を訪れた。
が、インタフォンを鳴らしても誰も出ない。もう一度、もう1回と鳴らしてみる。
「出かけてるのかなぁ」と、美穂子が首を傾げる。
「携帯にかけてみようか」と、菊乃が携帯を取り出す。
しかし大志も、そして勝春にも電波は届かない。
カズに電話した美穂子が半べそをかく。
「カズ君でないよう。どうしちゃったんだろ？」
菊乃が落ち着いた口調で言う。
「事件が終わったから……」
「え？　どういうこと？」と、美穂子がショックを受ける。
「3人とも事件を解決するために組織から派遣されてきたって言ってたでしょ。だから……」
菊乃の言わんとすることを理解して美穂子が「そんな……」と、うつむいた。
その時ちょうど隣の部屋の扉が開いた。
中から出てきたのは40過ぎのおばさんだった。おばさんは菊乃

たちの様子を見て「ああ」と、頷いた。そして、今朝のことを教えてくれた。
「お隣の男の子達なら朝早く引っ越してったわよ。あなたたち同級生なの？」
「え、まあ」と、菊乃が引きつった笑みを浮かべる。
予想していたとはいえやはりショックだった。
（黙って行ってしまうなんて……酷すぎるよ……）
「んまあ。やっぱりねぇ。若いとは思ってたけど高校生だったのねぇ」
おばさんは一人で納得しながら部屋に戻った。
「……菊ちゃん」
涙目の美穂子の手をそっと菊乃が握る。
美穂子の気持ちはよく分かる。それは菊乃も同じだ。
美穂子が鼻をすすりながら言う。
「なんか。寂しすぎるよね。せっかく仲良くなったのに」
「そうだね。なんかあっという間だった気がする。まだ一ヶ月も経ってないのにね」
ミステリー・ボーイズの3人が突然、転校してきたのが二学期の最初。確かに一ヶ月も経っていない。しかし、もう随分前のことのようにも思える。
「美穂子……そんなに泣かないで。また会えるよ。きっと」
菊乃の言葉に美穂子が不思議そうな顔をする。
「なんで？　携帯も繋がらないんだよ？」
「……大丈夫。きっと会えるから。きっと」
そう言い切る菊乃の表情には何かしら確信があるように見えた。
ほんのわずかに冷気を帯びた風が流れ込んできた。マンションに隣接する街路樹が薄くなりかけた緑をざっと揺らせた。町はかすかに秋の気配……。

＊　＊　＊

北へ向かう列車の中で大志は流れ行く景色をぼんやりと眺めていた。
向かいの席ではカズと勝春が大志の様子を見守っている。
「ネ、大志。ホントに良かったのかい？　菊ちゃんたちにお別れしなくって」
勝春の問いかけに対して大志は何も答えない。
代わりにカズが答える。
「ま、会ってしまうと、かえって別れがつらくなるかもしれないしね」
「でもサ。いいのかヨ。だってもう出会えないかもしれないんだヨ」
勝春のその言葉に大志がわずかに反応する。
「どういう意味だ？」
「だってサ。大志にアレルギーが出ない女の子なんてそうは居ないでショ。勿体無い」
「そういえばそうだよね。そっか。そういう意味では藤村さんは特別な存在かもしれないね」
カズの言葉を受けて大志は、
「別に……」と、首をすくめる。そして窓の外に視線を移す。
「今はサ。まだ無理かもしんないけどサ。いつかこの仕事を引退したらまた会いに行けばいいんじゃない？」
「でも、その時まで藤村さんの気が変わってなきゃいいけどね」
「お前ら……好き勝手言ってくれるよな」と、大志が呆れる。
が、勝春とカズは大志の顔を見てニヤニヤ笑っている。
ちょうどその時、駅弁を売る車内販売が通った。大志がそれを呼び止める。
「コロッケ弁当をひとつ」
「え？　コロッケ弁当はありませんけど」と、販売員が驚く。
「そうか。ならいい」

そう言って大志はポケットに財布を戻そうとした。
そのサイフからはみ出したもの……。
それは菊乃からプレゼントされたあの小さなハリネズミだった。
スカンクみたいに見える菊乃の手作りストラップ。
その中には菊乃の深い深い思いと小さな小さなＧＰＳが込められていた……。

（おわり）

最後の戦い　下（後書き）

最後までご愛読頂きありがとうございました。

『～なろう』ではこれが初作品となりますが、一話あたりの分量や改ページが不安定で読みにくかったと思われます（特に携帯の方ごめんなさい）

ご意見ご感想など頂けると幸いです。

それではまた！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0204h/

ミステリー・ボーイズ

2010年10月13日17時46分発行